
さいたま市

大木戸遺跡Ⅲ

大宮西部特定土地地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告

(第1分冊)

2018

独立行政法人 都市再生機構

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



大木戸遺跡第18・20次調査区全景垂直写真（上が北）



1 縄文時代後期掘之内式土器



2 縄文時代後期掘之内式から加曾利B式土器



1 縄文時代後期の赤漆塗木製耳栓



2 縄文時代後期の飾弓

序

埼玉県は首都東京に隣接し、高次の都市機能と交通利便性を兼ね備えながら、ゆとりや潤いをもたらす自然環境にも恵まれています。

現在、ＪＲ西大宮駅周辺では、独立行政法人都市再生機構による大宮西部特定土地区画整理事業が行われ、さいたま市西部の複合拠点として、魅力ある都市機能と自然環境との調和を目指した新しい街づくりが推進されています。

さて、大宮西部特定土地区画整理事業地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数所在しています。今回発掘調査を実施した大木戸遺跡もその一つです。発掘調査は同区画整理事業に伴う事前調査であり、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

大木戸遺跡は何次にもわたる発掘調査が行われ、すでに２冊の報告書が刊行されていますが、今回の報告は第18・20次調査区を対象としたものです。第18・20次調査は、縄文時代後期の集落が展開した台地の北西側裾部にあたる低地の調査で、台地上では遺存することが難しい木器類や漆製品、編物類、草本・堅果類が多数出土しました。

湿潤な低地部から出土した、赤漆で彩色された木製の耳飾や櫛などの装身具、赤漆で文様が描かれた器類、赤や黒の漆で装飾された飾弓などは、往時の色彩を留めたまま、現代によみがえりました。特に、籃胎漆器と呼ばれる竹籠に漆が塗られた容器は大変貴重なもので、現存するものでは日本最古の可能性が出てきました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また、学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用して頂ければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部、さいたま市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成30年3月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 塩 野 谷 孝 志

例 言

1. 本書はさいたま市に所在する大木戸遺跡第18・20次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番、発掘調査に対する指示通知は、以下のとおりである。
大木戸遺跡第18次調査（第18次）
さいたま市西区大字指扇4044他
平成27年2月24日付け教生文第2－60号
大木戸遺跡第20次調査（第20次）
さいたま市西区大字指扇4044他
平成27年4月4日付け教生文第2－7号
3. 発掘調査は、大宮西部特定土地地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。大木戸遺跡第18・20次調査は、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。
発掘調査事業 平成26・27年度
「平成26年度大宮西部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査委託（その2）」
整理報告書作成事業 平成28年度
「平成28年度大宮西部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査（整理）委託」
整理報告書作成事業 平成29年度
「平成29年度大宮西部特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査（整理）委託」
5. 発掘調査・整理報告書作成事業はI－3に示した組織により実施した。
大木戸遺跡第18次の発掘調査は、平成27年1月1日から平成27年3月31日まで実施し、木戸春夫、大谷徹、上野真由美、松浦誠が担当した。
大木戸遺跡第20次の発掘調査は、平成27年4月1日から平成27年12月3日まで実施し、

田中広明、大谷、松浦が担当した。

整理報告書作成事業は、平成28年度から平成29年度まで実施し、平成28年10月1日から平成29年3月31日まで大谷、矢部瞳が、平成29年4月1日から平成30年1月31日まで金子直行がそれぞれ担当した。

平成30年3月22日に、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第444集として印刷・刊行した。

6. 大木戸遺跡の第18次調査における基準点測量及び第20次調査における遺物のデジタル測量は、中央航業株式会社に委託した。

第20次調査における遺跡の空中写真撮影は、株式会社東京航業研究所に委託した。

年代測定及び古環境に関する自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社パレオ・ラボに委託した。

口絵の遺物写真撮影は、小川忠博氏に委託した。

7. 整理報告書作成事業において、自然科学分析全般にわたり明治大学文学部阿部芳郎氏を代表とする明治大学資源利用史研究クラスター・黒耀石研究センターの調査協力を得た。

漆製品の分析については明治大学工学部宮腰哲雄氏、本多貴之氏、明治大学文学部阿部氏、炭化物の同位体分析については東京大学総合研究博物館米田穰氏、明治大学文学部阿部氏、岸田快正氏、全般にわたる森林資源の樹種分析については明治大学黒耀石研究センター能城修一氏、植物資源については明治大学黒耀石研究センター佐々木由香氏、東北大学植物園の小林和貴氏、藍胎漆器の年代測定については東京大学総合研究博物館米田氏、大森貴之氏、尾寄大真氏の諸先生方に御協力をいただき、成果の一部についてそれぞれの担当者に寄稿いただいた。

8. X線CT写真については、東北大学総合学術

博物館佐々木理氏、鹿納晴尚氏、東京国立博物館荒木臣紀氏の御協力を得て撮影を行った。

また、CT画像の解析については、弘前大学人文社会科学部上條信彦氏、片岡太郎氏にお願いした。

9. 発掘調査における写真撮影は各調査担当が行い、出土品の写真撮影は金子が行った。

10. 出土品の整理は大谷、金子が行い、挿図及び写真図版の作成は金子が行った。また、縄文土器の実測を金子が、土偶の実測を小野美代子が、木器類の実測を矢部が、石器の実測を西井幸雄、水村雄功が行なった。

11. 本書の執筆は、

I-1 埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課

VI-1 片岡太郎・上條信彦

VI-2 本多貴之・阿部芳郎

VI-3 (1) 小林和貴

(2) 米田 穰・大森貴之・尾寄大真

VI-4 米田 穰・阿部芳郎・岸田快生

VII-3 矢部

VII-4 能城修一

が行い、VI-5・6については委託の成果を受けて、金子が編集し直した。その他については金子が行った。

12. 本書の編集は金子が行った。

13. 本書にかかる諸資料は平成30年4月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

14. 発掘調査や本書の作成に当たり、下記の機関、方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします（敬称略）。

さいたま市教育委員会 さいたま市遺跡調査会
大塚達朗 岡村道雄 小倉 均 工藤雄一郎
鈴木徳雄 鈴木佑太郎 山田尚友 山田昌久
吉岡卓真

凡 例

1. 大木戸遺跡第 18・20 次における座標測量は、従来の調査区との整合を図るため日本測地系（旧測地系）で行った。本調査区 X・Y 座標は日本測地系（旧測地系）国土標準平面直角座標第 IX 系（原点北緯 36° 00′ 00″、東経 139° 50′ 00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

本調査区の L 5－A 1 グリッド北西杭の座標は、日本測地系 X＝－8600.000 m、Y＝－23000.000 m。世界測地系による変換値は、X＝－8244.978 m、Y＝－23292.456 m。北緯 35° 55′ 31.4692″、東経 139° 34′ 30.7755″ である。

2. 調査で設定したグリッドは、座標値 X＝－7500.000 m、Y＝－23400.000 m の地点を基点（A 1－A 1 グリッド）として、大宮西部特定土地区画整理事業地内全域をカバーする 100×100 m の大グリッドを設定し、その中を 10×10 m の中グリッドに細分した。

大グリッドの名称は、北から南方向にアルファベット（A、B、C…）、西から東方向に数字（1、2、3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせた。中グリッドは北西杭を基準に北から南方向に A～J、西から東方向に 1～10 とし、100 グリッドに区分した。中グリッドの中は、2 m の小グリッドを 25 グリッド設定し、①～の丸付数字で表記した。

調査は中グリッドを基本にして実施し、遺物の取り上げ等に際して、出土位置の記録が難しいものについては、小グリッドで対応した。

3. 遺構の略号は以下のとおりである。

S K…土壌 杭…打込杭

w…木製品のグリッド内取上げ番号

4. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。ただし、一部例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。

全体図 1/350

遺構図 1/60・1/30

遺物分布図 1/20・1/80・1/400

実測図 1/4・1/3・1/2・2/3

拓影図 1/3・1/2

5. 遺構断面図に表記した水準数値は、すべて海拔標高（単位 m）を表す。

6. 遺物計測表の表記方法は以下のとおりである。

口径・器高・底径は cm 単位である。

残存率は目安としての % を示す。

7. 出土土器の実測図及び拓影図の番号付近に付記した略号は、以下のとおりである。

丸付数字…出土の 2×2 m の小グリッド

同分析…炭素・窒素同位体測定に供した

試料

8. 土器実測図及び拓影図断面、木器実測図中の網掛け部分は、漆塗膜の確認された部分である。網掛けの濃度によって、漆の種類を区分しており、図中に例示した。また、拓影図の断面に網掛けしたものの漆が塗られていることを示す。

10%…赤漆

20%…黒漆

30%…鮮やかな赤

40%…炭化部分

漆製品の文様で太い線書き部分は、筆状工具による描出線を表し、描出線内に色調の異なる漆彩色を施しているものを表している。

9. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の 1/50,000 地形図（大宮）、さいたま市発行の 1/2,500 都市計画図を編集・使用した。

目 次

(第1分冊)

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(1) 垂飾	180
1. 発掘調査に至る経過	1	(2) 管玉	180
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	5. 木製品	181
(1) 発掘調査	2	(1) 装身具類	181
(2) 整理・報告書作成	2	(2) 飾弓	183
3. 発掘調査・報告書作成の組織	3	(3) 容器・道具類	189
II 遺跡の立地と環境	4	(4) 丸木舟	232
1. 地理的環境	4	6. 編組製品	234
2. 歴史的環境	6	(1) アンペラ	234
III 遺跡の概要	12	(2) 籃胎漆器	234
1. 大木戸遺跡第18・20次調査の概要	12	(3) 糸状漆製品	234
2. 基本層序	15	(第2分冊)	
IV 遺構と遺物	20	VI 自然科学分析	241
1. 土壌	20	1. X線CT撮影画像解析	241
2. 木組遺構	20	2. 漆製品の分析	243
3. 木杭	25	3. 籃胎漆器の素材植物同定と	
4. 祭祀跡	27	放射性炭素年代測定	262
5. 自然木集中区	27	4. 土器付着炭化物の同位体分析	264
V グリッド出土遺物	35	5. 放射性炭素年代測定	276
1. 縄文土器	35	6. 古環境復元	283
2. 土製品	157	VII 調査のまとめ	301
(1) 土偶	157	1. 縄文時代後期集落と低地利用	301
(2) 土製円盤	157	2. 縄文土器について	303
(3) 土錘	157	3. 木製品について	308
3. 石器	161	4. 大木戸遺跡周辺における森林資源	
(1) 旧石器時代の石器	161	管理と木製品類の樹種選択	314
(2) 縄文時代の石器	161		
4. 石製品	180		

写真図版

挿図目次

(第1分冊)		第31図	I 3区土器分布図(2)……………	44	
第1図	埼玉県 の地形……………	4	第32図	I 3区土器分布図(3)……………	45
第2図	遺跡周辺 の地形……………	5	第33図	I 2区出土土器(1)……………	46
第3図	周辺 の遺跡(旧石器・縄文)……………	7	第34図	I 2区出土土器(2)……………	47
第4図	周辺 の遺跡(弥生以降)……………	8	第35図	I 2区出土土器(3)……………	48
第5図	大宮西部特定土地区画整理事業 地内 の遺跡分布……………	10	第36図	I 2区出土土器(4)……………	49
第6図	事業地内遺跡調査地点位置図……………	12	第37図	I 3区出土土器(1)……………	50
第7図	第18・20次調査区位置図……………	13	第38図	I 3区出土土器(2)……………	51
第8図	第18・20次調査区全体図……………	14	第39図	I 3区出土土器(3)……………	52
第9図	第18・20次調査区土層断面位置……………	16	第40図	I 3区出土土器(4)……………	53
第10図	第18・20次調査区 土層断面図(1)……………	17	第41図	I 3区出土土器(5)……………	54
第11図	第18・20次調査区 土層断面図(2)……………	18	第42図	I 3区出土土器(6)……………	55
第12図	第18・20次調査区 土層断面図(3)……………	19	第43図	I 3区出土土器(7)……………	56
第13図	第1号土壇・出土遺物……………	20	第44図	I 3区出土土器(8)……………	57
第14図	第1号木組遺構と杭1・2・3・4……………	21	第45図	I 3区出土土器(9)……………	58
第15図	第1号木組遺構と杭の土層断面図……………	22	第46図	I 3区出土土器(10)……………	59
第16図	第1号木組遺構の構造材……………	23	第47図	I 3区出土土器(11)……………	60
第17図	杭5と土層断面図……………	24	第48図	I 3区出土土器(12)……………	61
第18図	杭6と土層断面図……………	24	第49図	I 3区出土土器(13)……………	62
第19図	杭の実測図……………	25	第50図	J 2・J 3区土器分布図……………	66
第20図	祭祀跡……………	26	第51図	J 2区土器分布図……………	67
第21図	自然木集中区1……………	28	第52図	J 3区土器分布図(1)……………	68
第22図	自然木集中区2……………	29	第53図	J 3区土器分布図(2)……………	69
第23図	自然木集中区3(1)……………	30	第54図	J 2区出土土器(1)……………	70
第24図	自然木集中区3(2)……………	31	第55図	J 2区出土土器(2)……………	71
第25図	H 3区土器分布図……………	37	第56図	J 3区出土土器(1)……………	73
第26図	H 3区出土土器(1)……………	38	第57図	J 3区出土土器(2)……………	74
第27図	H 3区出土土器(2)……………	39	第58図	J 3区出土土器(3)……………	75
第28図	I 2・I 3区土器分布図……………	41	第59図	J 3区出土土器(4)……………	76
第29図	I 2区土器分布図……………	42	第60図	J 3区出土土器(5)……………	77
第30図	I 3区土器分布図(1)……………	43	第61図	J 3区出土土器(6)……………	78
			第62図	J 3区出土土器(7)……………	79
			第63図	J 3区出土土器(8)……………	80
			第64図	J 3区出土土器(9)……………	81
			第65図	J 3区出土土器(10)……………	82

第66図	A 1・A 2 区土器分布図……………	84	第103図	D 1 区出土土器 (7) ……………	128
第67図	A 1 区出土土器 ……………	85	第104図	D 1 区出土土器 (8) ……………	129
第68図	A 2 区出土土器 (1) ……………	86	第105図	D 1 区出土土器 (9) ……………	130
第69図	A 2 区出土土器 (2) ……………	87	第106図	D 1 区出土土器 (10) ……………	131
第70図	A 2 区出土土器 (3) ……………	88	第107図	D 1 区出土土器 (11) ……………	132
第71図	B 1・B 2 区土器分布図……………	90	第108図	D 1 区出土土器 (12) ……………	133
第72図	B 1 区出土土器 (1) ……………	91	第109図	D 1 区出土土器 (13) ……………	134
第73図	B 1 区出土土器 (2) ……………	92	第110図	D 1 区出土土器 (14) ……………	135
第74図	B 1 区出土土器 (3) ……………	93	第111図	D 1 区出土土器 (15) ……………	136
第75図	B 2 区出土土器 (1) ……………	96	第112図	D 1 区出土土器 (16) ……………	137
第76図	B 2 区出土土器 (2) ……………	97	第113図	E 10・E 1 区土器分布図 (1) ……	140
第77図	B 2 区出土土器 (3) ……………	98	第114図	E 10・E 1 区土器分布図 (2) ……	141
第78図	B 2 区出土土器 (4) ……………	99	第115図	E 10区出土土器 ……………	142
第79図	B 2 区出土土器 (5) ……………	100	第116図	E 1 区出土土器 (1) ……………	143
第80図	C 1・C 2 区土器分布図……………	102	第117図	E 1 区出土土器 (2) ……………	144
第81図	C 1 区出土土器 (1) ……………	103	第118図	E 1 区出土土器 (3) ……………	145
第82図	C 1 区出土土器 (2) ……………	104	第119図	E 1 区出土土器 (4) ……………	146
第83図	C 1 区出土土器 (3) ……………	105	第120図	表採土器 (1) ……………	148
第84図	C 1 区出土土器 (4) ……………	106	第121図	表採土器 (2) ……………	149
第85図	C 1 区出土土器 (5) ……………	107	第122図	表採土器 (3) ……………	150
第86図	C 1 区出土土器 (6) ……………	108	第123図	表採土器 (4) ……………	151
第87図	C 1 区出土土器 (7) ……………	109	第124図	表採土器 (5) ……………	152
第88図	C 2 区出土土器 (1) ……………	111	第125図	土偶分布図 ……………	158
第89図	C 2 区出土土器 (2) ……………	112	第126図	土偶実測図 ……………	159
第90図	D 10・D 1 区土器分布図 (1) ……	114	第127図	土製品実測図 ……………	160
第91図	D 10・D 1 区土器分布図 (2) ……	115	第128図	旧石器時代の石器 ……………	161
第92図	D 10・D 1 区土器分布図 (3) ……	116	第129図	石器分布図 ……………	162
第93図	D 10・D 1 区土器分布図 (4) ……	117	第130図	縄文時代の石器 (1) ……………	163
第94図	D 10・D 1 区土器分布図 (5) ……	118	第131図	縄文時代の石器 (2) ……………	165
第95図	D 10・D 1 区土器分布図 (6) ……	119	第132図	縄文時代の石器 (3) ……………	166
第96図	D 10区出土土器 ……………	120	第133図	縄文時代の石器 (4) ……………	167
第97図	D 1 区出土土器 (1) ……………	122	第134図	縄文時代の石器 (5) ……………	168
第98図	D 1 区出土土器 (2) ……………	123	第135図	縄文時代の石器 (6) ……………	169
第99図	D 1 区出土土器 (3) ……………	124	第136図	縄文時代の石器 (7) ……………	170
第100図	D 1 区出土土器 (4) ……………	125	第137図	縄文時代の石器 (8) ……………	171
第101図	D 1 区出土土器 (5) ……………	126	第138図	縄文時代の石器 (9) ……………	172
第102図	D 1 区出土土器 (6) ……………	127	第139図	縄文時代の石器 (10) ……………	173

第140図	縄文時代の石器 (11)	174	第170図	B 2 区木器類実測図 (2)	207
第141図	縄文時代の石器 (12)	175	第171図	C 1・C 2 区木器類分布図	209
第142図	縄文時代の石器 (13)	176	第172図	C 1 区木器類実測図 (1)	210
第143図	縄文時代の石器 (14)	177	第173図	C 1 区木器類実測図 (2)	211
第144図	縄文時代の石器 (15)	178	第174図	C 1 区木器類実測図 (3)	212
第145図	縄文時代の石器 (16)	179	第175図	C 1 区木器類実測図 (4)	213
第146図	石製品実測図	180	第176図	C 1 区木器類実測図 (5)	214
第147図	木製装身具分布図	182	第177図	C 1 区木器類実測図 (6)	215
第148図	木製装身具実測図	183	第178図	C 2 区木器類実測図	216
第149図	弓分布図	184	第179図	D10・D 1 区木器類分布図 (1)・	217
第150図	飾弓実測図 (1)	185	第180図	D10・D 1 区木器類分布図 (2)・	218
第151図	飾弓実測図 (2)	186	第181図	D10・D 1 区木器類分布図 (3)・	219
第152図	飾弓実測図 (3)・丸木弓実測図・	187	第182図	D10区木器類実測図	220
第153図	H 3 区木器類分布図	190	第183図	D 1 区木器類実測図 (1)	221
第154図	H 3 区木器類実測図	191	第184図	D 1 区木器類実測図 (2)	222
第155図	I 2・I 3 区木器類分布図	192	第185図	D 1 区木器類実測図 (3)	223
第156図	I 2 区木器類実測図	193	第186図	D 1 区木器類実測図 (4)	224
第157図	I 3 区木器類実測図 (1)	194	第187図	D 1 区木器類実測図 (5)	225
第158図	I 3 区木器類実測図 (2)	195	第188図	D 1 区木器類実測図 (6)	226
第159図	J 2・J 3 区木器類分布図	196	第189図	D 1 区木器類実測図 (7)	227
第160図	J 2 区木器類実測図	197	第190図	E10・E 1 区木器類分布図	228
第161図	J 3 区木器類実測図 (1)	198	第191図	E10区木器類実測図	229
第162図	J 3 区木器類実測図 (2)	199	第192図	E 1 区木器類実測図 (1)	229
第163図	J 3 区木器類実測図 (3)	200	第193図	E 1 区木器類実測図 (2)	230
第164図	A 1・A 2 区木器類分布図	201	第194図	表採木器類実測図 (1)	231
第165図	A 2 区木器類実測図	201	第195図	表採木器類実測図 (2)	232
第166図	B 1・B 2 区木器類分布図	203	第196図	丸木舟・編組製品分布図	233
第167図	B 1 区木器類実測図 (1)	204	第197図	第 1 号丸木舟出土状況図	234
第168図	B 1 区木器類実測図 (2)	205	第198図	第 2 号丸木舟出土状況図	235
第169図	B 2 区木器類実測図 (1)	206	第199図	編組製品実測図	236

表 目 次

(第1分冊)

第1表	周辺の遺跡一覧表	9	第13表	C1区非掲載土器分類表	101
第2表	自然木一覧表	32	第14表	C2区非掲載土器分類表	101
第3表	全非掲載土器分類表	35	第15表	D10区非掲載土器分類表	113
第4表	H3区非掲載土器分類表	36	第16表	D1区非掲載土器分類表	121
第5表	I2区非掲載土器分類表	40	第17表	E10区非掲載土器分類表	144
第6表	I3区非掲載土器分類表	49	第18表	E1区非掲載土器分類表	144
第7表	J2区非掲載土器分類表	65	第19表	表採非掲載土器分類表	153
第8表	J3区非掲載土器分類表	65	第20表	掲載土器計測表	154
第9表	A1区非掲載土器分類表	83	第21表	土製円盤計測表	160
第10表	A2区非掲載土器分類表	83	第22表	土錘計測表	160
第11表	B1区非掲載土器分類表	89	第23表	石器一覧表	164
第12表	B2区非掲載土器分類表	89	第24表	木製品一覧表	237

写真図版目次

(第1分冊)

巻頭図版1	大木戸遺跡第18・20次調査区全景 垂直写真（上が北）
巻頭図版2	1 縄文時代後期堀之内式土器 2 縄文時代後期堀之内式から 加曽利B式土器
巻頭図版3	1 縄文時代後期の赤漆塗木製耳栓 2 縄文時代後期の飾弓

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

独立行政法人都市再生機構（旧都市基盤整備公団埼玉地域支社／のち住宅都市整備公団 以下「公団」という）はさいたま市（旧大宮市）北西部で大宮西部特定土地区画整理事業を施行している。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係機関との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

本事業の計画段階における埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、昭和63年8月17日付けし21-21号で、公団首都圏都市開発本部開発本部長（当時）より埼玉県教育委員会教育長あて照会があった。文化財保護課（当時）では、平成元年1月14日付け教文第1106号で、計画地内には埋蔵文化財包蔵地が15箇所所在することから、取扱いについて別途協議が必要である旨、回答した。

区画整理事業地内の埋蔵文化財については、公団埼玉地域支社長（当時）より平成10年7月9日付けさ25-4号で教育長あて「埋蔵文化財の所在及び取扱い」について照会があった。以後、事業の進捗に合わせ取扱いを決定するための試掘調査を文化財保護課（当時、現在は生涯学習文化財課）が実施してきた。

大木戸遺跡のうち本報告に係る部分については、地点ごとに試掘調査の依頼を受け、それぞれ記録

保存のための発掘調査が必要な旨の回答を行った。本事業に係る発掘調査に先立ち、平成12年9月1日付けで「大宮西部地区埋蔵文化財に関する協定書」が公団、埼玉県教育委員会、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（現公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 以下「事業団」）の三者により締結され、発掘調査については、事業団が実施機関として当たることとなった。発掘調査の実施にあたっては、関係機関で調査方法、調査期間等の協議が行われ、その結果、平成26・27年度に発掘調査が実施された。

文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知は、平成12年9月1日付けさ24-11号、平成13年3月26日付けさ24-27号で公団埼玉地域支社地域支社長から県教育長あて提出され、それに対する保護上必要な勧告は平成12年9月26日付け教生文第4-426号、及び平成13年4月9日付け教生文第4-986号で行った。また、第92条の規定による発掘調査届が事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知番号は次の通りである。

平成27年2月24日付け 教生文第2-60号

平成27年4月4日付け 教生文第2-7号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

大木戸遺跡の第18・20次調査は、大宮西部特定土地区画整理事業に伴い、平成27年1月から3月までの第18次調査と、平成27年4月から12月までの第20次調査を二年度に亘り継続して実施した。調査面積は2,577㎡である。

第18次調査は、平成18年1月に事務所の設置や排水用の動力工事、調査区等への鉄板敷等を行って、調査開始への環境整備を行った。また、1月初旬から2月中旬にかけて調査区を囲む形で鋼板矢板の安全柵を打設し、その後調査区内の表土を重機で地表面下3mの深さにまで除去した。3月に入ってから、補助員を導入して表土除去後の精査を行い、4月以降の調査に備えた。

第20次調査は、年度明けの4月から開始し、基準杭の設置、調査区に沿って排水用の側溝を掘削して、本格的な精査を開始した。調査区西側の川表側は攪乱が著しく、攪乱場所を残す形で調査を進めた。

調査は10mの中グリッドを基準にして行い、H・I・J・A・B・C・D・E区について、大きく北側と南側からに分かれて行った。調査区東側には台地上から続くローム台地の裾部が確認され、A・B区を中心とした中央部付近には台地裾部を挟み込むような深い谷地形が確認された。調査区は南北に細長く、全体的に東側から西側へと傾斜する地形であった。

4月から7月にかけて、包含層を覆うマコモ層を剥ぎながら調査を進めると、多量の自然木とその間から土器、木器類が出土した。土器や漆塗りの椀などの木器類、石斧の柄などの木製の道具類は光波測量を行い、自然木や大型の遺物は手測りで記録した。

8月から9月にかけては、中央部のA・B区を中心として調査を行った。台地東側へと入り込む谷地形に沿って多量の遺物と、自然木が出土した。

この地区では漆製品の出土が多く、B区では飾弓や丸木舟も出土した。

安全対策上、調査深度が地表面から4mまでとの制限があるため、西側の谷部底までは調査が及ばなかったが、9月末までにほぼ調査を終え、10月末までに事務所撤去などを行い、調査を終了した。

その後、11月末まで、調査区内及び周辺の安全対策を行った。

(2) 整理・報告書作成

報告書作成事業は、平成28年10月から平成30年3月までの二年度に亘り継続して実施した。

平成28年度は10月から遺物の洗浄、注記等を行い、グリッド毎の接合等を行った。同時に、図面整理、写真整理を行い、第二次図原図等を作成した。

土器はグリッド毎に主なものを抽出して復元や、拓本取りを行い、石器は分類ごとに実測を行ってトレースまで終了した。また、出土木器類は適宜的に番号を付けて分類・整理し、実測を始めた。実測は、オルソ・イメージャーで撮影した写真を基にして図化を行った。

平成29年4月から9月にかけて、約500点の出土土器の実測・トレースを行い、同時に採択した土器片の断面実測・トレースも行った。

10月からはトレース図面や拓本等のスキニングを行い、また、出土遺物の分布図等も作成し、パソコン上で組み合わせて版下を作成した。その後、出土遺物をグリッド毎に整理して版組を行った。これらの版組が完了した土器、石器、木器について写真撮影を行い、パソコン上で組み合わせて版組を終了した。

これらの版を組み合わせて、報告書の割付を行い、12月から文章の執筆を開始し、1月末に入稿した。その後、校正を行い3月22日に印刷・刊行した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成26年度（発掘調査）

理 事 長	樋 田 明 男	調査部	
常務理事兼総務部長	大 嶋 紳一郎	調 査 部 長	昼 間 孝 志
総務部		調 査 部 副 部 長	富 田 和 夫
総 務 部 副 部 長	瀧 瀬 芳 之	主幹兼調査第二課長	木 戸 春 夫
総 務 課 長	藤 倉 英 明	主幹兼整理第二課長	大 谷 徹
		主 査	上 野 真由美
		主 事	松 浦 誠

平成27年度（発掘調査）

理 事 長	樋 田 明 男	調査部	
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭	調 査 部 長	金 子 直 行
総務部		調 査 部 副 部 長	富 田 和 夫
総 務 部 副 部 長	瀧 瀬 芳 之	主幹兼調査第二課長	田 中 広 明
総 務 課 長	安 田 孝 行	主 幹	大 谷 徹
		主 事	松 浦 誠

平成28年度（報告書作成）

理 事 長	塩野谷 孝 志	調査部	
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭	調 査 部 長	金 子 直 行
総務部		調 査 部 副 部 長	細 田 勝
総 務 部 副 部 長	黒 坂 禎 二	主幹兼整理第二課長	山 本 靖
総 務 課 長	曾 川 浩 二	主 幹	大 谷 徹
		主 事	矢 部 瞳

平成29年度（報告書作成）

理 事 長	塩野谷 孝 志	調査部	
常務理事兼総務部長	川 目 晴 久	調 査 部 長	赤 熊 浩 一
総務部		調査部副部長兼整理第二課長	吉 田 稔
総 務 部 副 部 長	黒 坂 禎 二	主幹兼整理第一課長	大 谷 徹
総 務 課 長	曾 川 浩 二	主 任 専 門 員	金 子 直 行

遺跡の周辺には樹枝状谷が発達し、第5図に示したように、谷に面した台地上にはそれぞれ各時代の遺跡が存在する。今回報告の第18・20次調査区は、集落が存在する台地上から続く裾部で、滝

2. 歴史的環境

大木戸遺跡はすでに『大木戸遺跡Ⅰ』『大木戸遺跡Ⅱ』の報告書が刊行されており、さらに大宮西部特定土地区画整理事業地内の他遺跡についても報告書が刊行されている。それぞれの報告書で各時代の周辺の遺跡について触れられていることから、本報告では特に縄文時代を中心にして歴史的環境について説明を加えて行きたい。

まず、旧石器時代については、遺跡周辺の大宮台地西縁部では後期旧石器時代前半期の遺跡は少ない。A T降灰以前の遺跡として、さいたま市西大宮バイパスNo.6遺跡（大木戸遺跡）（1）、No.5遺跡（14）で、第Ⅲ文化層から台形様石器を含む石器群が出土しており、清河寺前原遺跡（12）でも黒耀石を主体的に用いた台形様石器を含む石器群が出土している。

後期旧石器時代後半期の遺跡は急増し、武蔵野台地第Ⅴ～Ⅳ層下部にかけての遺跡では、上尾市殿山遺跡（106）で黒曜石製のナイフ形石器と共に、玉髄製の国府型ナイフ形石器が複数出土し、同天沼遺跡（122）でも国府型ナイフ形石器に類似するナイフ形石器が出土している。西日本との関連が注目される地域である。また、西大宮バイパス関連のNo.4～6遺跡でも、この時期の石器群が出土している。

武蔵野台地第Ⅳ層上部段階のいわゆる砂川期では、上尾市前戸崎遺跡（103）、同在家遺跡（112）、B-53号遺跡（39）などで、ナイフ形石器を中心として、槍先形尖頭器、削器、彫器などの石器群が出土している。

縄文時代では、草創期の黒曜石製の槍先形尖頭器がさいたま市西大宮バイパスNo.5遺跡（14）

沼川によって形成された沖積地である標高10m前後の低地部にあたる。遺構・遺物が検出されるのは、この低地面より約3～4m下部の標高7～6m地点からである。

でデポ状に7点がまとまって出土しており、注目を浴びている。黒耀石は産地同定の結果、栃木県高原山産と推定された。他に、草創期ではさいたま市大丸山遺跡（61）で、横走撚糸文を施文する直行口縁平底の小形土器が出土している。

早期前半では撚糸文系土器群を出土する遺跡が増えてくるが、西大宮バイパスNo.4遺跡（15）で撚糸文系土器群、押型文系土器群、沈線文系土器群が出土しており、大木戸遺跡でも井草式から夏島式的良好な土器群が出土している。また、上尾市宿北Ⅱ遺跡（116）では、当地域では珍しい撚糸文系土器群終末期の無文土器を主体とする住居跡4軒が検出されている。

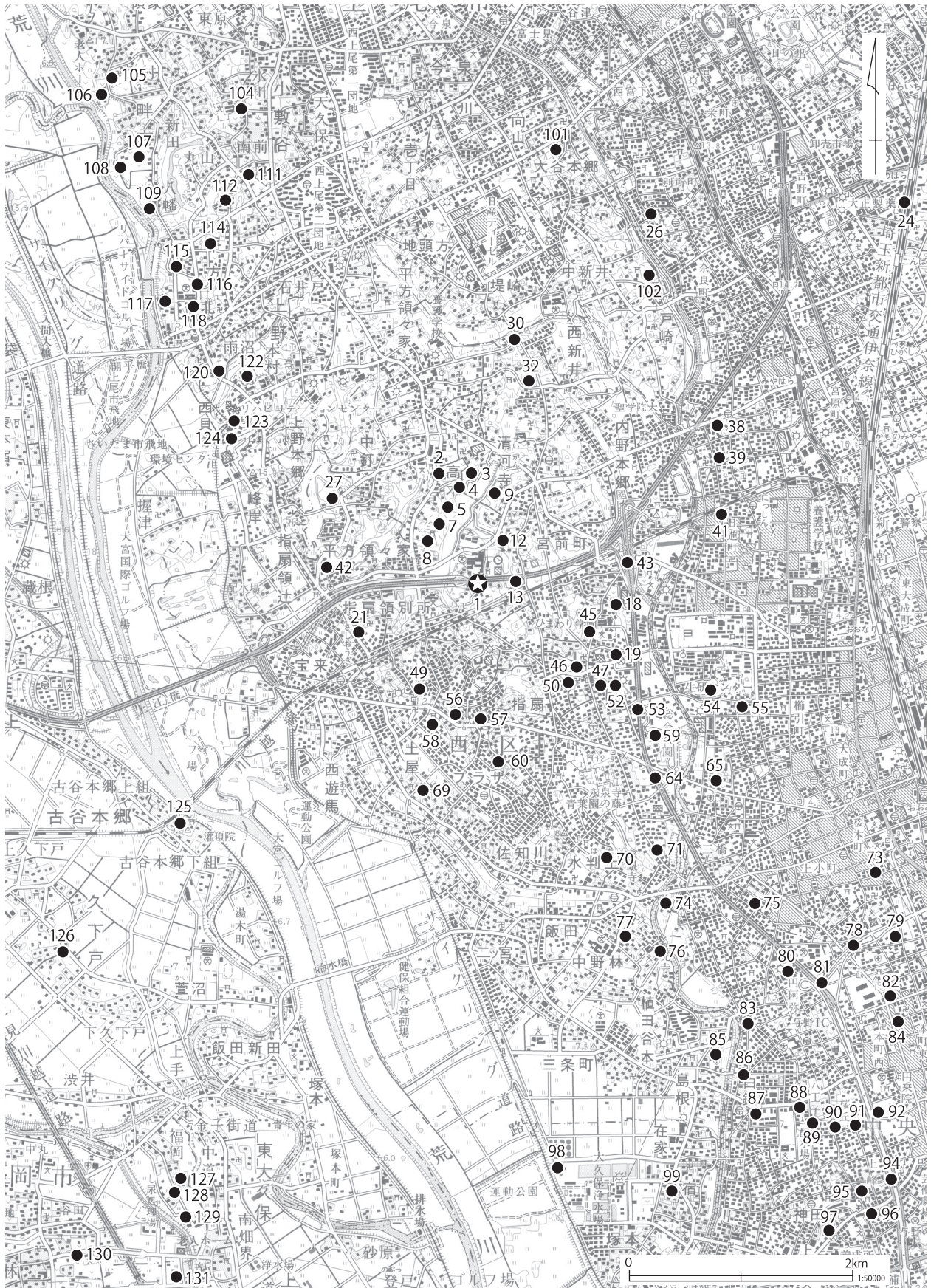
早期後半では海進の発達とともに、古入間湾が深く入り込み、荒川左岸の大宮台地縁辺にヤマトシジミを主体とする貝塚が作られるようになる。古入間湾最奥の貝塚は、現在では煙滅してしまったが、桶川市の江川上流部に形成された谷津貝塚で、条痕文期の貝塚である（桶川市1990）。また、同時期の貝塚は上尾市薬師耕地前遺跡（124）の住居内や、稻荷台遺跡（123）のピット内にブロック状に形成されており、さいたま市五味貝戸貝塚（62）では鶴ヶ島台式土器が出土している。

早期終末では上尾市平方貝塚（121）が著名で、現在の打越式相当の土器群と羽状縄文土器が出土し、平方式が提唱された。また、条痕文期に特有の炉穴は多くの遺跡で検出されるようになるが、打越式期を境に殆ど見られなくなる。

前期では、屋内炉を持つ花積下層式期の住居跡が上尾市箕輪Ⅱ遺跡（115）から検出されており、まとまった土器群が出土している。関山式期で



第3図 周辺の遺跡（旧石器・縄文）



第4図 周辺の遺跡（弥生以降）

第1表 周辺の遺跡一覧表

	番号	遺跡名	時期		番号	遺跡名	時期		番号	遺跡名	時期
さいたま市	1	大木戸 (西大宮 BP No. 6)	旧、縄、弥、古、平、中、近	さいたま市	46	C -65 号	縄、平	さいたま市	90	苗塚	縄、古
	2	高木氷川	縄、近		47	C -62 号	縄、古		91	与野西	縄、古、平
	3	高木小明	縄、古		48	下加	旧、縄		92	寺田	奈
	4	高木道下北	縄、中		49	C -45 号	時期不明、塚		93	相野谷 1 号	旧、縄
	5	高木道下	旧、縄、中、近		50	C -64 号	縄、平		94	南上峰	縄、古、平
	6	高木稲荷下	縄		51	C -63 号	縄		95	内道西	旧、縄、弥、平
	7	福田館跡	近		52	C -15 号	縄、古、平		96	諏訪坂	縄、弥、古
	8	高木稲荷前	旧、縄、近		53	八幡耕地	縄、古		97	上大久保新田	弥、古、中、近
	9	清河寺西原	縄、古		54	下加貝塚	縄、弥、古		98	大久保条里	平、中
	10	清河寺丸山	縄		55	B -60 号	縄、古、平		99	宿宮前	弥、古、奈、平、中
	11	C -98 号	縄		56	琵琶島貝塚	縄、古	上尾市	100	向山	縄
	12	清河寺前原	旧、縄、古		57	C -73 号	縄、古		101	後耕地	縄、中、近
	13	大塚古墳	古		58	琵琶島古墳	縄、古、近		102	氷川	縄、奈、平
	14	西大宮 BP No. 5	旧、縄		59	C -12 号	縄、古、平		103	前戸崎	旧、縄
	15	西大宮 BP No. 4	旧、縄		60	指扇下戸	縄、中		104	西通 I	縄、中、近
	16	西大宮 BP No. 2	旧、縄		61	大丸山	縄		105	雲雀	縄、古、近
	17	西大宮 BP No. 1	旧、縄		62	五味貝戸貝塚	縄		106	殿山 殿山古墳	旧、縄、古
	18	C -16 号	縄、古		63	C -59 号	縄		107	八幡 (江川山古墳)	縄、古
	19	C -66 号	縄、平		64	下手	縄、弥、古		108	畔吉	旧、縄、古
	20	C -39 号	旧、縄		65	B -61 号	縄、平		109	畔吉貝塚	縄、古
	21	滝沼	縄、弥、古、平		66	B -92 号	縄		110	平方丸山	縄
	22	B -37 号	縄		67	C -58 号	縄		111	小林	縄、平
	23	B -44 号	旧、縄		68	青葉園東	縄		112	在家	旧、縄、古、中、近
	24	三番耕地	縄、古、近		69	土屋下	弥、奈、平		113	小塚Ⅱ	旧、縄
	25	山王	縄		70	原	旧、縄、弥、古、奈、平		114	小塚	古
	26	奈良瀬戸	縄、平		71	C - 7 号	縄、弥、平		115	箕輪Ⅱ	縄、古
	27	中釘陣屋跡	近		72	並木貝塚	縄		116	宿北Ⅱ	縄、古、中、近
	28	B -43 号	縄		73	B -70 号	縄、弥		117	箕輪Ⅰ	旧、縄、中、近
	29	B -45 号	縄		74	水判土堀の内	縄、弥、古、奈、平、中、近		118	宿北Ⅰ	縄、古
	30	C -93 号	縄、古、平		75	茗花	縄、弥、古、平		119	東谷	縄
	31	B -46 号	縄		76	林光寺	縄、古、奈、平	川越市	120	雨沼Ⅰ	旧、縄、弥、古、中、近
	32	C -92 号	縄、古、平		77	中野林袋	弥、奈、中		121	平方貝塚	縄
	33	B -47 号	縄		78	小村田	縄、近		122	天沼	旧、縄、古、中、近
	34	C -23 号	縄		79	B -67 号	縄、弥、近		123	稲荷台	縄、弥、古、奈、平
	35	天王	縄		80	山王東 4 号	縄、平		124	薬師耕地前	縄、弥、古
	36	西谷裏	縄		81	小村田西	縄、近		125	灌頂院	中
	37	日進西谷	縄		82	小村田東	縄、古、平、中		126	前田	奈、平
	38	B -50 号	縄、平		83	西浦 1 号	縄、古、平	ふじみ野市	127	天神廻	縄、古
	39	B -53 号	旧、縄、古		84	与野東	縄、弥、古、平		128	城山	中、近
	40	上加	縄		85	根切	古、平、中		129	川袋	古、平、中
	41	B -55 号	縄、古		86	白鍬宮腰	旧、縄、古、奈、平		130	鷲森	縄、平、中、近
	42	辻	縄、古		87	殿ノ前	古		131	伊佐島	弥、平、中、近
	43	宮前	縄、平		88	八王子前原西	旧、縄、奈、平				
	44	B -56 号	縄		89	八王子前原	縄、平				
	45	C -67 号	縄、平								



第 5 図 大宮西部特定土地区画整理事業地内の遺跡分布

は稲荷台遺跡（123）や宿北Ⅱ遺跡（116）、氷川遺跡（102）で数軒の住居跡が検出されているが、荒川中流域の左岸では黒浜式期の遺跡が激減している。黒浜式時期の遺跡の多くは大宮台地中央部から東側にかけて、また、中川を挟んだ下総台地側に集中するようになるが、その要因について検討がなされている。

荒川右岸ではふじみ野市上福岡貝塚や川崎遺跡で黒浜式期の住居跡が検出されており、上福岡貝塚は関山式から続く環状集落と考えられている（上福岡市1999）。その後、荒川右岸ではふじみ野市鷺森遺跡（130）で諸磯a～b式の集落が検出され、荒川右岸の中・下流域では、関山式期から諸磯式期まで安定的に継続した遺跡が存在していたことが理解される。

一方、荒川左岸の中流域でも、黒浜式期の減少以降、氷川遺跡（102）で諸磯a式期の住居跡が、さいたま市上加遺跡（40）、指扇下戸遺跡（60）で諸磯b式期の住居跡が検出されており、前期終末では上尾市在家遺跡（112）で諸磯c式期の住居跡が検出されている。

中期では前半期の遺跡は殆どみられないが、中葉以降の大型環状集落が桶川市の江川流域に存在するようになる。大木戸遺跡の位置するやや下流域の大宮台地西縁部では、上尾市雨沼Ⅰ遺跡（120）、さいたま市高木稻荷前遺跡（8）、前戸崎遺跡（103）、白鍬宮腰遺跡（86）のような中期後葉から後期前葉の小集落遺跡が増える。さいたま市下加遺跡（48）は中期後葉の住居跡約40軒、中期末から後期前葉の堀之内式期の柄鏡形住居跡が約10軒検出され、拠点集落的な集落と考えられる。

荒川中流域左岸の台地縁辺では、中期終末以降後期の堀之内2式期までの遺跡は比較的多く存在するが、後期中葉の加曽利B式まで継続する遺跡は激減する。大木戸遺跡の周辺に同時期の遺跡は少なく、荒川上流の約9kmにある桶川市高井東遺跡（市川他1974）が著名で、大木戸遺跡と同じ

ような低湿地遺跡では、下流約9.2kmに所在するさいたま市南鴻沼遺跡（山田他2015）、東へ約6kmの芝川沿いに形成された寿能泥炭層遺跡（井上他1984）がある。また、やはり遺跡が激減する荒川右岸では、約6.5km離れた地点にふじみ野市ハケ遺跡C地区があり、後期後半安行Ⅰ式の住居跡が検出され、加曽利B式土器も出土している。

桶川市高井東遺跡はいわゆる環状盛土遺構と考えられる遺跡で、加曽利B1式期から晩期中葉までの住居跡が検出されている。同じ桶川市内でも大宮台地の内側に近い元荒川沿いの低地部を含む後谷遺跡（藤沼他2007）では、加曽利B2式以降晩期までの低湿地遺跡が形成されている。

また、芝川沿いのさいたま市寿能遺跡は、加曽利B式期と晩期安行式期の良好な包含層が形成され、特に加曽利B式期では大木戸遺跡と類似する土器群、木器類が地点ごとに出土しており、土器群や木器の編年研究に好資料を提供した。寿能遺跡は加曽利B式以降晩期まで継続する遺跡であるが、大木戸遺跡は加曽利B2式で途絶えてしまい、遺跡の継続性の違いが明らかである。

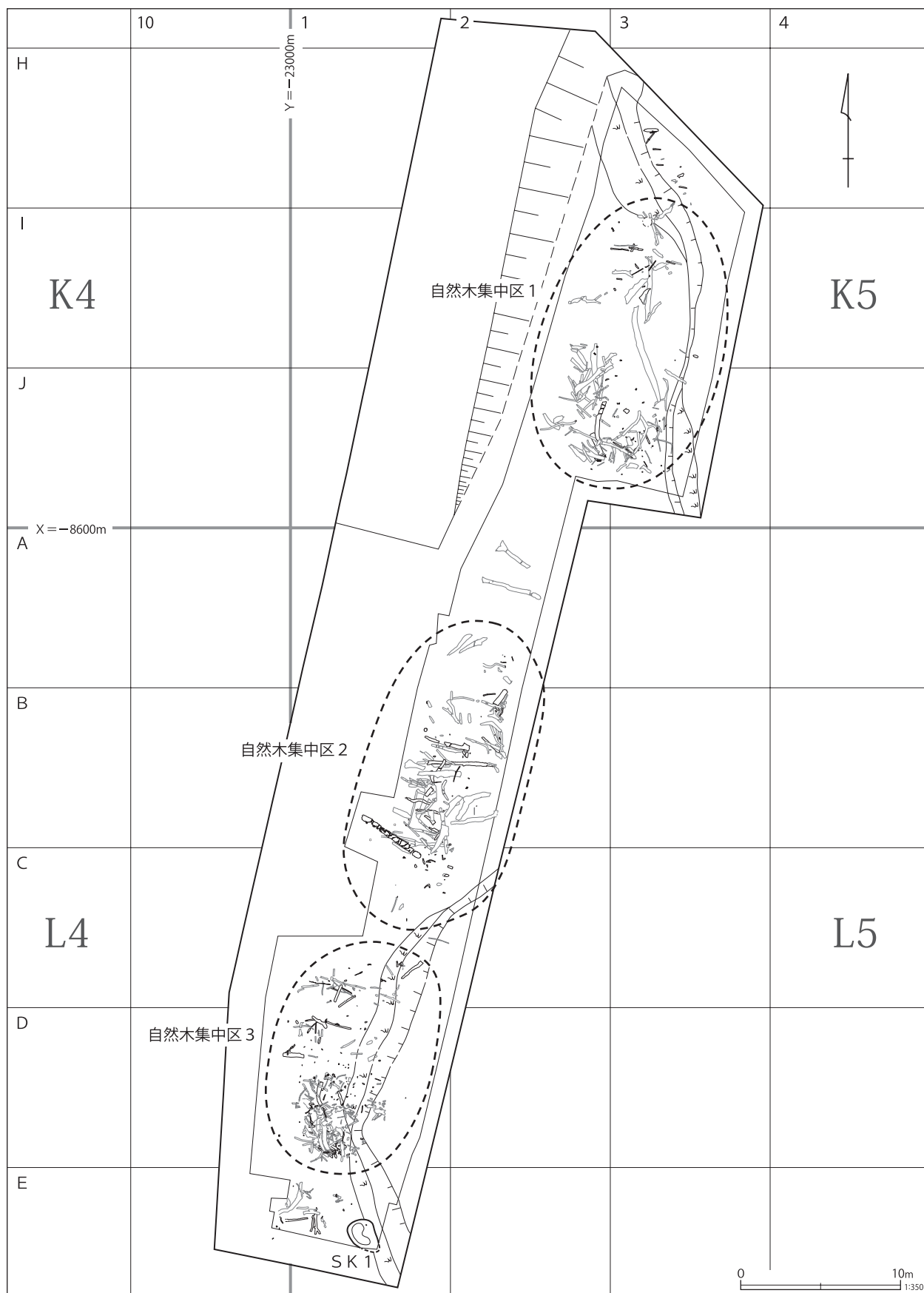
荒川左岸のさいたま市南鴻沼遺跡では、台地裾部から低地部へかけて調査が行われ、前期から後期前葉までと晩期中葉の遺物が層的に出土しており、櫛や丸木舟などの多量の木製品も出土している。しかし、加曽利B式以降から晩期前葉の間については遺跡の継続性は薄いようである。

さらに、荒川左岸の晩期から弥生時代前期にかけての遺跡は少なくなり、晩期終末では上尾市在家遺跡で浮線文期の住居が発見される程度で、遺跡の希薄性に拍車が掛かっている。

この大宮台地西縁部の荒川流域における加曽利B式以降の遺跡の希薄性が、大宮台地内側から東側へと遺跡が移動する前期の黒浜式期と同様な現象として捉えられるのか、また、何がその要因となるのか、時期別に地域的な遺跡のあり方の違いを検証して明らかにしていくことが急務となろう。



第7図 第18・20次調査区位置図



第8図 第18・20次調査区全体図

査区でも縄文時代後期の貯蔵穴群が緩斜面部に展開しており、居住空間と水辺空間を立体的に把握することができた調査事例となった。

調査地点は、北に張り出す舌状台地の西縁を南流して約3km先で荒川に流れ込む滝沼川によって樹枝状に開析された沖積地で、台地裾から続く標高約10m前後の低地部にあたる。台地との比高差は約5mである。

調査は2,577㎡を対象とし、周囲に鋼矢板を打設して調査を実施した。表土掘削の結果、台地直下の調査区東側には台地裾部が張り出し、それを開析するように埋没谷が調査区中央部に湾入していることが明らかになった。

発見された遺構は、調査区全域に広がる縄文時代後期の遺物包含層と土壌1基、木組遺構1基、杭跡6基、祭祀跡1基、自然木集中区3箇所である。

遺物包含層は地表下3m前後から確認され、西側の谷に向かって傾斜して堆積していた。遺物を含まない草本質泥炭層の直下に遺物包含層が厚く広がり、灰色砂層、泥炭混じりの灰褐色シルト層などが交互に堆積していた。

土壌は調査区南東隅部の台地裾部から検出された、後期の貯蔵穴と考えられる。北側のJ2区の包含層中には祭祀跡と思われる石棒、石皿、注口土器、飾弓などのまとまりが確認された。

また、調査区北側と中央部および南側に伸びる

台地の裾部の3箇所自然木集中区（第8図）が確認され、南側D1区の自然木集中区下から、丸木材や板材などを組んだ木組遺構が検出された。

遺物包含層からは、ナラガシワをはじめとするイヌガヤ、オニグルミ、クリ、ムクロジ、トチノキなどの種実も大量に出土した。

遺物は縄文土器、石器、土製品、石製品、漆器、木製品、編組製品などが良好な状態で遺存していた。縄文土器は、深鉢・浅鉢・鉢・壺・注口土器などあり、後期前葉の堀之内2式から中葉の加曽利B2式を主体とする。石器は、石棒・石斧・石鏃・石皿・磨石・砥石・石錘などが出土した。土製品では土偶・土製円板・土錘、石製品では翡翠製の垂飾や管玉がある。漆製品は、赤色漆塗りの櫛や耳栓（耳飾り）をはじめ、木胎漆器の椀・鉢、赤色・黒色漆塗りの飾弓、赤糸（糸状漆製品）など注目すべき遺物が多い。中でも飾弓は細糸で矢羽や菱形の幾何学文様を表現した優品である。木製品は石斧柄などの工具や木製品、丸木弓、櫛状木製品、丸木舟などが出土した。編組製品は、籃胎漆器やアンペラ様の敷物の一部と考えられる編物が出土している。

これらの土器・木器類の大半の出土遺物は、マコモ層にパックされ縄文時代後期堀之内2式から加曽利B2式までに限定されるもので、台地上の後期前葉集落と一致した様相を示している。

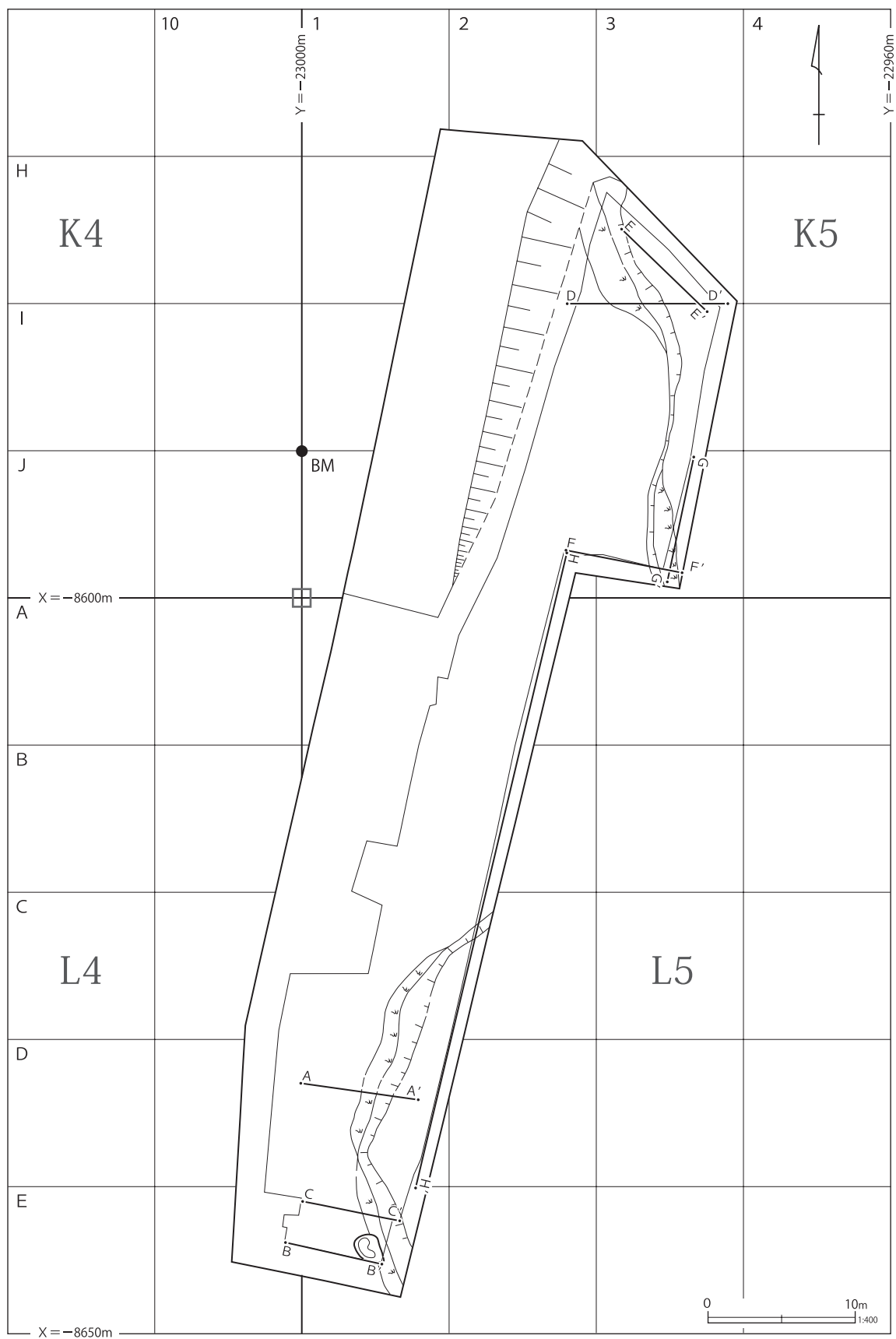
2. 基本層序

調査区沿いに設定した土層観察断面の位置を第9図に、それぞれの土層断面図を第10図から12図に示した。

D1区の中央部に設定した土層断面を、調査区の基準土層とした。土層は細かく区分されるが、遺跡全体を覆う植物遺存体を多く含む、通称マコモ層と呼んだ1・2層の暗黒褐色泥炭層からは、遺物はほとんど出土していない。その下の3層灰色砂質層中から自然木をはじめ、土器などの遺物

が出土しはじめる。さらに下部の遺物の出土が少ない泥炭層や粘土層の4・5層を挟んで、砂質層である6層から再び多くの遺物や自然木が出土するようになる。

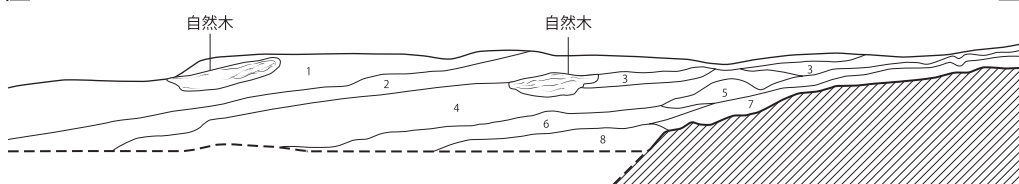
全体を覆うマコモ層は調査区西側の谷部に向かって厚く堆積する傾向にあるが、台地裾部から谷部にかけてはAトレンチのような細かな分層ができない部分が多く、砂質層になると遺物が出土するという傾向は各地点で共通していた。



第9図 第18・20次調査区土層断面位置

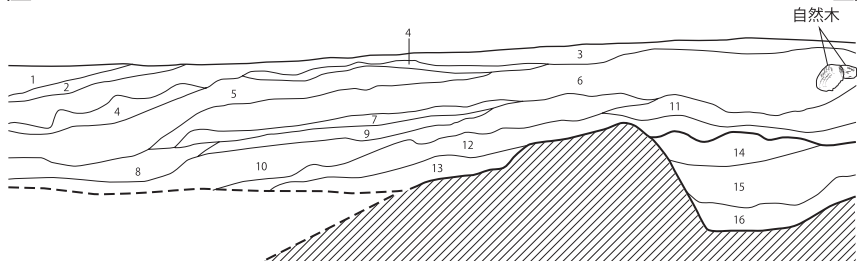
1トレンチ (L4D10・L5D1)

A 7.90m



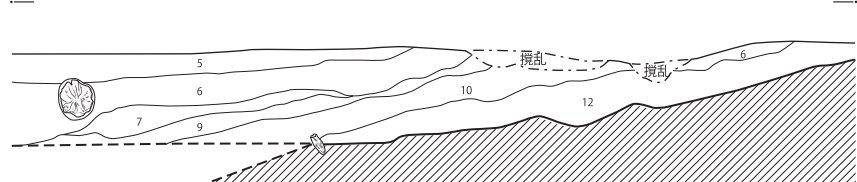
調査区南側土層断面 (1)

B 7.70m



調査区南側土層断面 (2)

C 7.30m



1 トレンチ

- | | | | |
|------------|------------------|-----------------------|----------------|
| 1 暗黒褐色泥炭層 | 植物遺体多量 | 土器片含まない | しまり強い |
| 2 暗黒褐色泥炭層 | 植物遺体多量 | 土器片含まない | 1層より明るい |
| 3 灰色砂層 | 植物遺体・炭化物粒子・土器片多量 | 硬砂層ブロック (径2~3cm大) | 少量 |
| 4 暗黒褐色泥炭層 | 植物遺体・土器片多量 | 下層に砂粒子多量 | 2層に比べしまり弱い |
| 5 灰褐色粘土層 | 植物遺体少量 | 炭化物粒子多量 | 焼土粒子・硬砂層・土器片少量 |
| 6 灰色砂層 | 植物遺体少量 | 炭化物粒子・焼土粒子・砂鉄粒子・土器片多量 | |
| 7 黄灰色砂層 | 土器片多量 | ローム土の影響により黄色味を帯びる | |
| 8 シルト質黒褐色土 | 植物遺体・炭化物粒子少量 | 土器片含まない | |

調査区南側土層断面 (1) (2)

- | | | |
|-------------|---------------|-----------------------|
| 1 暗黒褐色泥炭層 | 植物遺体多量 | 土器片含まない |
| 2 黒褐色泥炭層 | 植物遺体多量 | 土器片少量 |
| 3 黒褐色泥炭層 | 植物遺体多量 | 土器片少量 |
| 4 暗灰褐色粘土層 | 暗灰褐色粘土多量 | 植物遺体・炭化物粒子少量 |
| 5 黒褐色泥炭層 | 植物遺体多量 | 炭化物粒子少量 |
| 6 シルト質黒褐色土 | 植物遺体多量 | |
| 7 暗灰色粘土層 | 暗灰色粘土・炭化物粒子多量 | |
| 8 シルト質黒褐色土 | 植物遺体多量 | |
| 9 暗灰褐色粘土層 | 暗灰褐色粘土多量 | 植物遺体・炭化物粒子少量 |
| 10 シルト質黒褐色土 | 植物遺体・炭化物粒子多量 | |
| 11 シルト質黒褐色土 | 植物遺体多量 | |
| 12 シルト質暗褐色土 | 植物遺体多量 | 炭化物粒子少量 |
| 13 シルト質黒褐色土 | 植物遺体・ローム粒子少量 | |
| 14 シルト質暗褐色土 | 植物遺体多量 | 青色砂粒子少量 (SK1覆土) |
| 15 シルト質黒褐色土 | 植物遺体多量 | 青色砂粒子・ロームブロック少量 (") |
| 16 シルト質暗褐色土 | ローム粒子多量 | 青色砂粒子少量 (") |



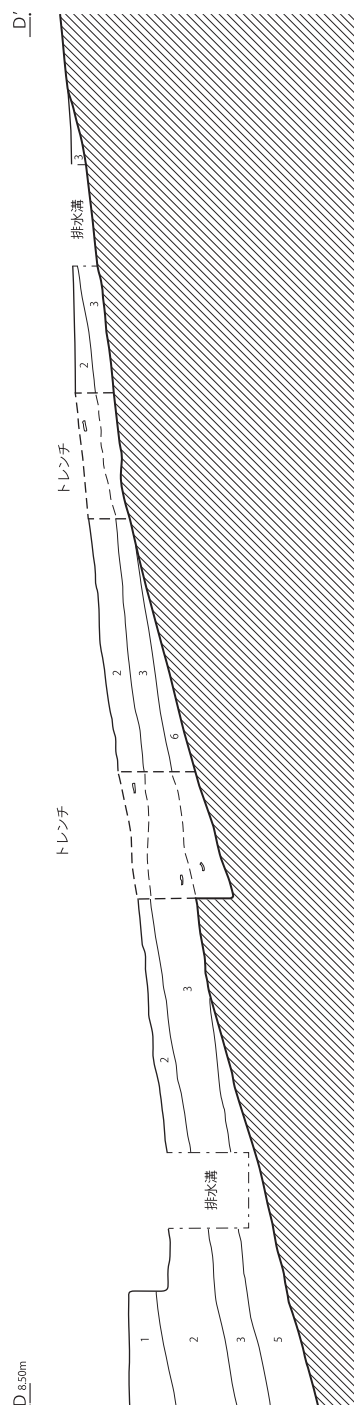
第10図 第18・20次調査区土層断面図 (1)

また、第18図の杭6の断面図では、統一的な層序ではないが、この地点の第4層から第55図12の前期終末の十三菩提式土器が出土した。そのため、第4層出土のヒシ実炭化物の年代測定を行ったところ、calBP4, 966年という縄文時代中

期中葉の値が出され、第4層は想定していた前期終末の層ではないことが判明した。十三菩提式土器は中期中葉の層に台地上から混入したものと思われる。従って、調査区内では第18図の第4層の中期中葉まで遡る層序を確認したことになる。

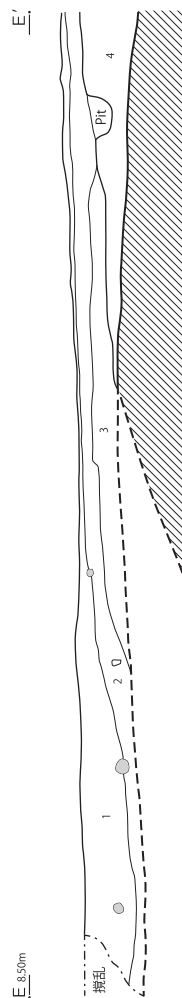
調査区北側土層断面 (1)

D 5.50m



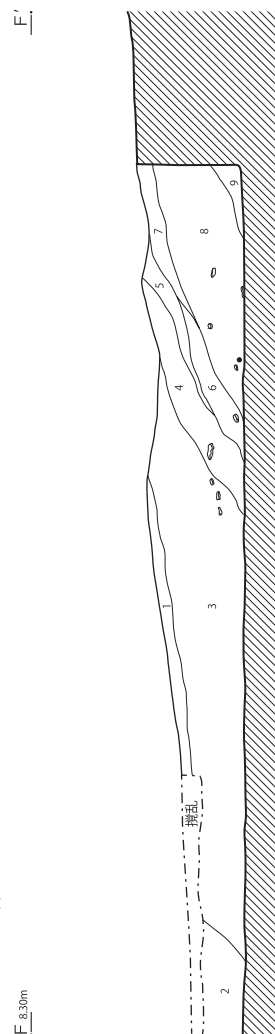
調査区北側土層断面 (2)

E 5.50m



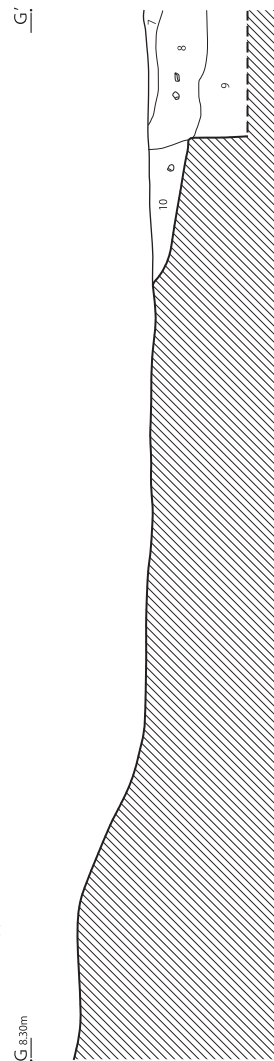
調査区北側土層断面 (3)

F 8.30m



調査区北側土層断面 (4)

G 8.30m



調査区北側土層断面 (1) (2)

- 1 暗黒褐色土 植物遺体・土器片多量
- 2 灰色砂質土 砂層 炭化物粒子・土器片少量
- 3 灰色砂質土 粘土ブロック・硬砂層・土器片少量
- 4 明黄褐色粘質土 地山
- 5 暗黒褐色土 植物遺体主体 砂粒子少量
- 6 黒褐色粘質土 黄褐色土粒子・土器片少量

調査区北側土層断面 (3) (4)

- 1 暗灰色砂質土 砂粒子多量 植物遺体少量
- 2 暗黒褐色土 植物遺体・土器片多量
- 3 黒褐色土 植物遺体少量 土器片多量
- 4 暗褐色土 植物遺体微量 土器片多量 3層より明るい
- 5 暗黒褐色土 植物遺体・土器片多量 2層より明るい
- 6 黒褐色粘質土 植物遺体・炭化物粒子・焼土粒子微量
- 7 黒褐色粘質土 植物遺体・炭化物粒子・焼土粒子微量
- 8 暗黒灰色粘質土 堅い状の落ち込みか?
- 9 漆黒灰色粘質土 硬砂層・黒色粘質土少量
- 10 黒褐色粘質土 黄褐色土粒子・土器片少量



第 11 図 第 18・20 次調査区土層断面図 (2)



第12図 第18・20次調査区土層断面図(3)

IV 遺構と遺物

低湿地遺跡であるため、第18・20次調査区では掘り込みの確認される遺構はほとんど存在していない。調査区東側には台地から続くローム層の裾野が伸びていることから、その地点では掘り込みのある遺構や、打ち込みのある杭などがわずか

1. 土壌

第1号土壌（第13図）

調査区南東端のE1区に位置する。遺構の南側の端が調査区外にあたる。不整の長楕円形を呈し、調査区内では、長径2.24m、短径1.75m、深さ0.69mを測る。この土壌が調査区南東側の壁際に存在するため、この土壌を通る調査区のBラインの土層断面図（第10図）から測ると、0.88mの深さが確認される。また、第10図の土層からは、第1号土壌が埋まりきってから、谷を覆う沖積土が堆積している。

出土遺物は縄文土器が3点、石器が1点である。

2. 木組遺構

第1号木組遺構（第14～16図）

D1区に位置する。打ち込まれる杭の大半は、台地の裾部から続くローム層までは達しておら

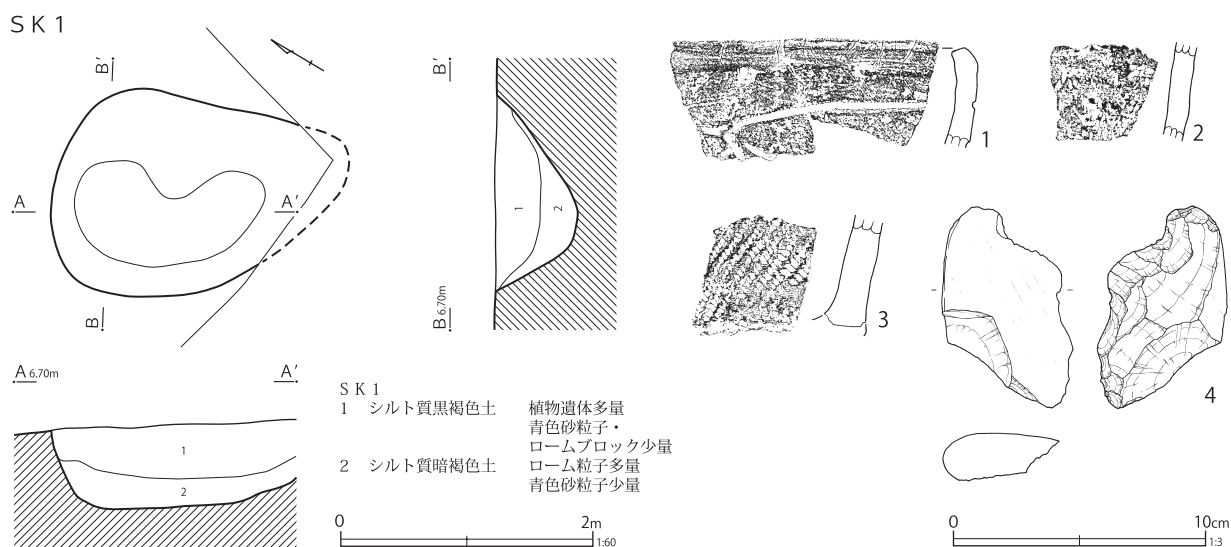
ではあるが確認できた。

遺構として確認できたのは土壌1基、木組遺構1基、杭跡6基であり、その他遺物包含層中に確認できた石棒と石皿や注口土器などが集まっている祭祀跡と思われる遺物の集中地点である。

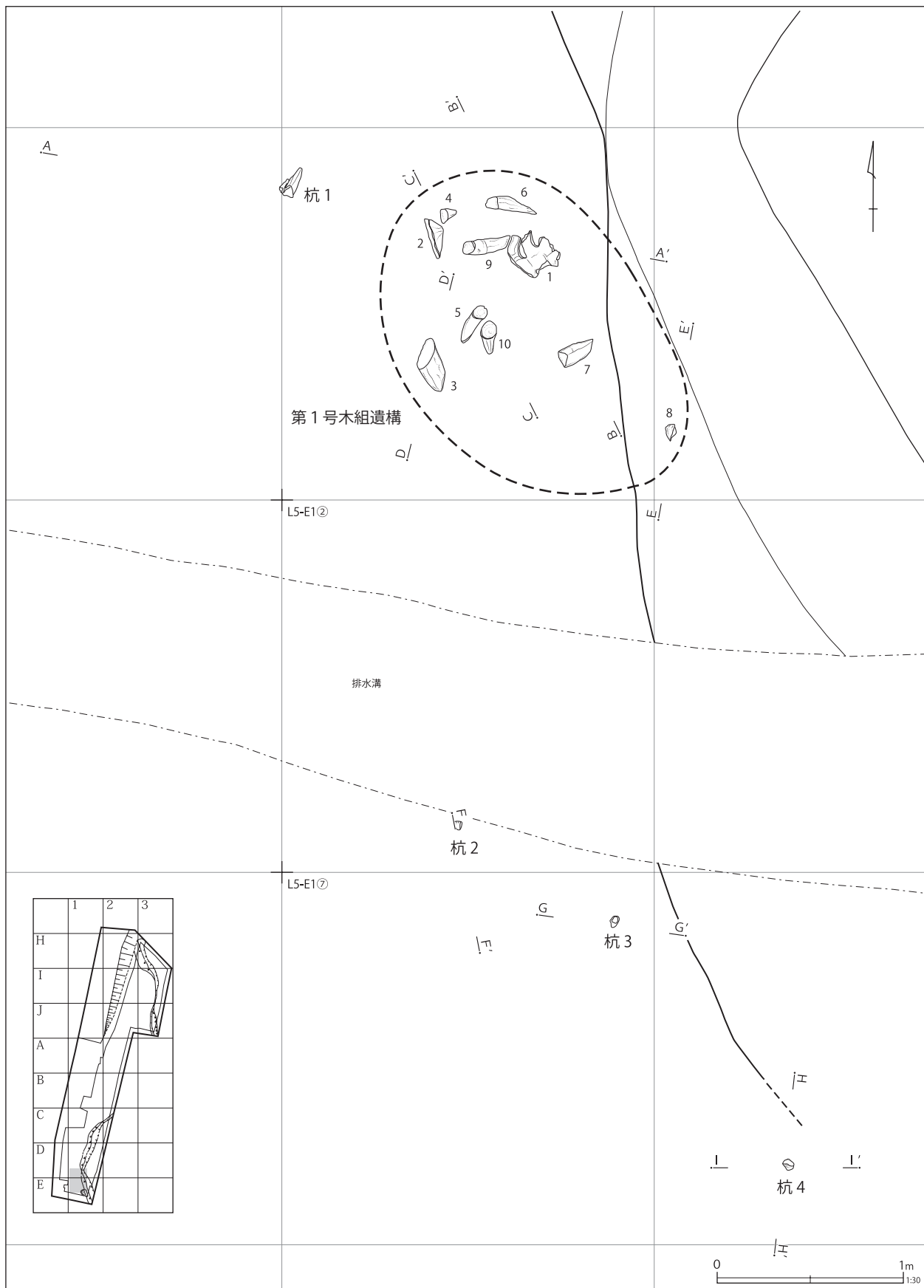
第13図1は内湾しながら開く口縁部破片で、口唇部はやや外削状を呈する。口縁部の無文帯下に横位の沈線を巡らすが、沈線の端部が曲線を描き、区画文が描かれているようでもある。この沈線端部が蛇行して区画文を描くようであれば、縄文時代後期初頭の称名寺2式土器の可能性があり、2、3は横位施文の単節LR縄文のみ施文される破片で、2は胴部、3は底部頂上の破片である。

4は石器の破片であるが、磨製石斧の胴部にあたり、表裏面に研磨の痕跡が認められる。縦8.1cm、横4.9cm、重さ75.3gである。

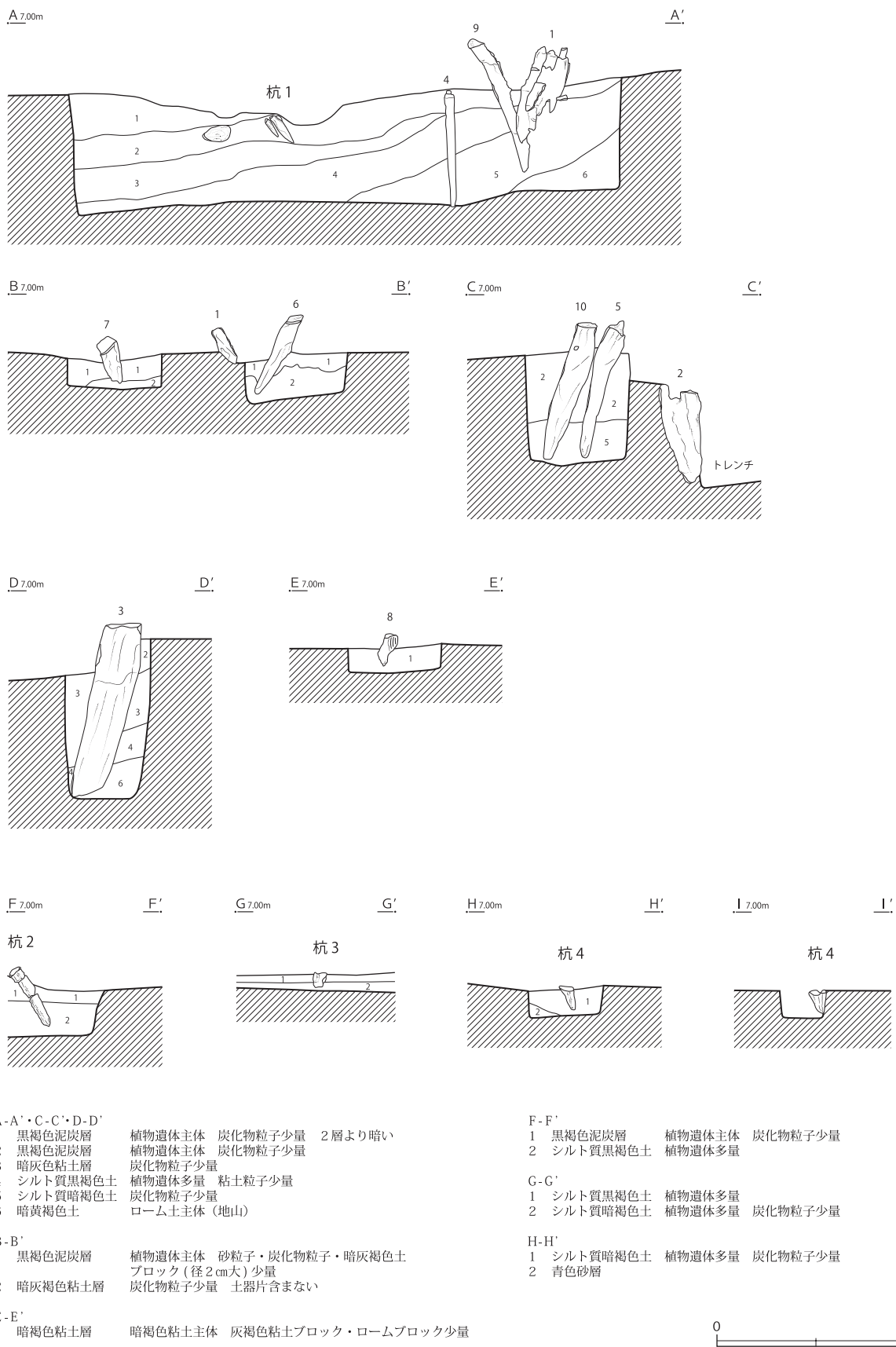
ず、沖積土中に構築されていた。木組は第16図に実測図で示したように、およそ50～90cm弱の板材（1～4）とみかん割材（5、6）、丸太材



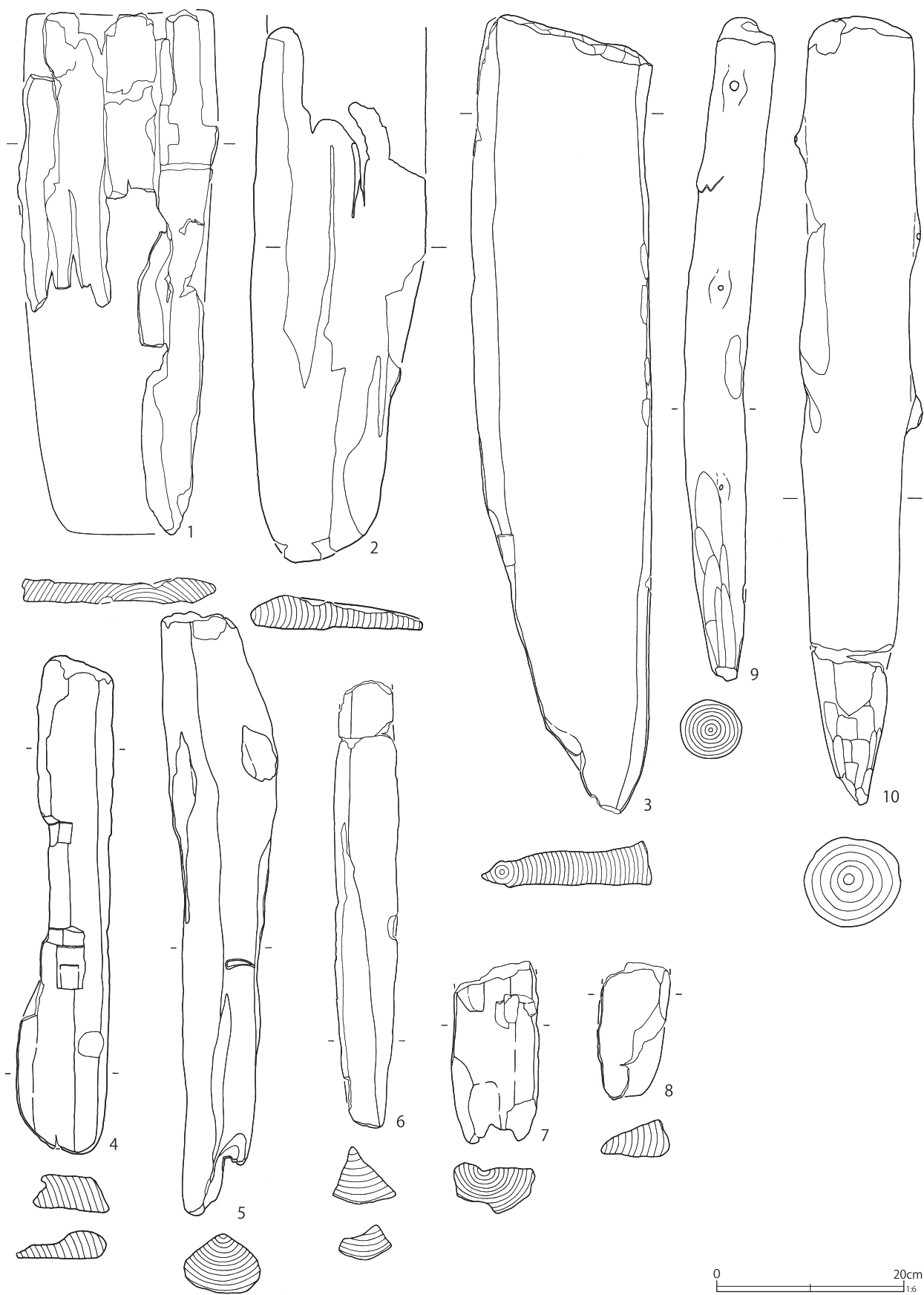
第13図 第1号土壌・出土遺物



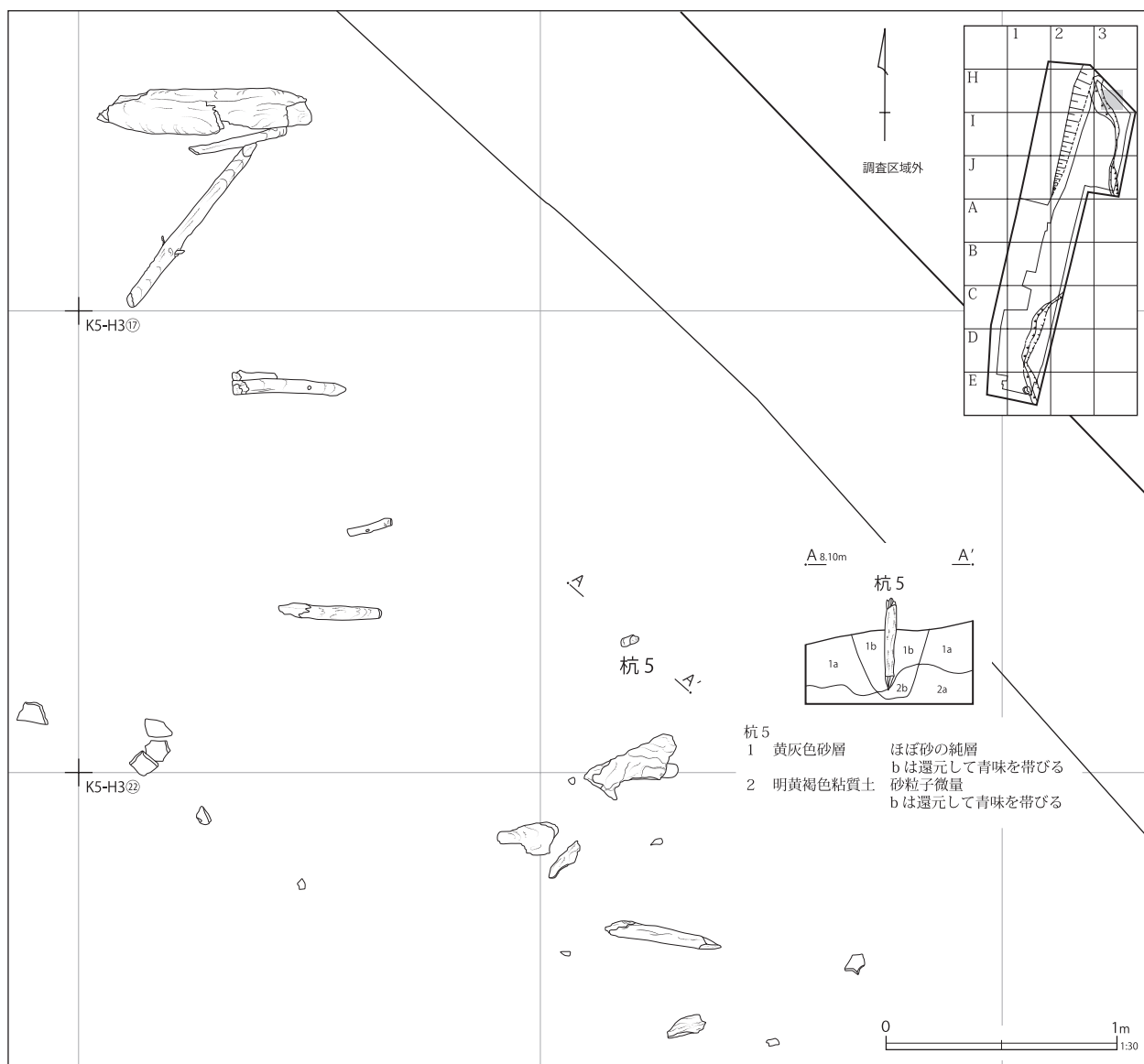
第14図 第1号木組遺構と杭 1・2・3・4



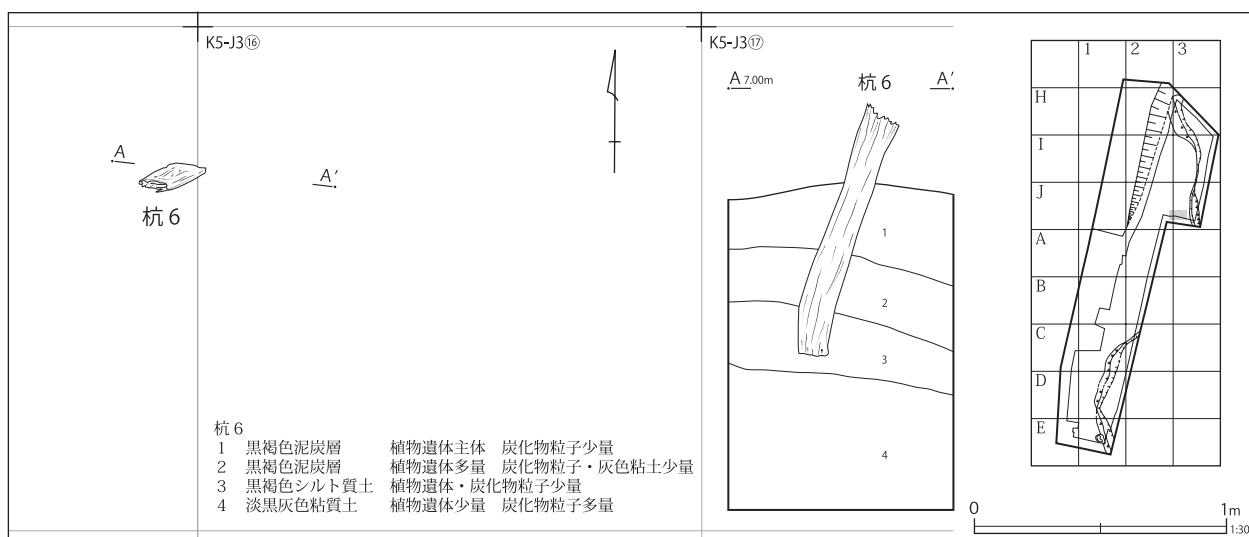
第 15 図 第 1 号木組遺構と杭の土層断面図



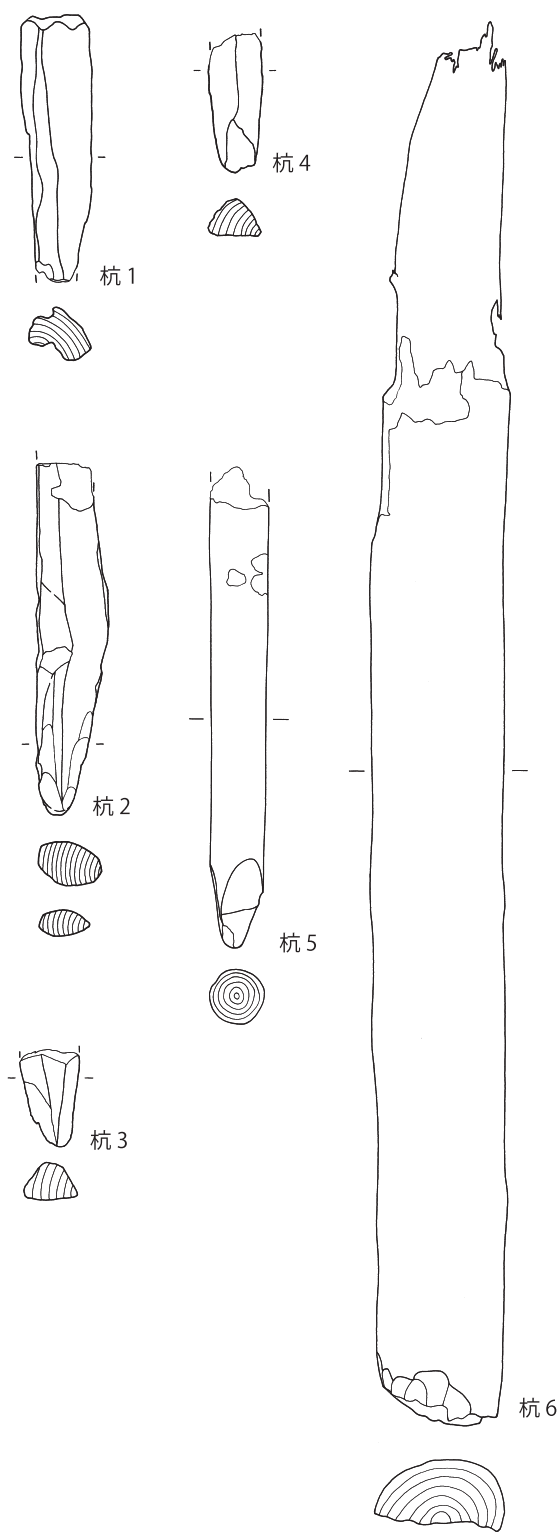
第16図 第1号木組遺構の構造材



第 17 図 杭 5 と土層断面図



第 18 図 杭 6 と土層断面図



第 19 図 杭実測図

(9、10) 等で構築されていた。この木組遺構の上には大量の流木等が堆積していたため、木組は壊されていたものと考えられる。杭の中でも3は87cmと最大の板材で、ローム層まで到達していた。おそらく3がローム層まで達していて原位置を留めていると推定できることから、木組遺構の西側の範囲が推定できる。また、1、4が比較的安定していることから、北側の範囲を示しているものと思われ、これらの杭から木組遺構の範囲はおおよそ破線で示した範囲で、約1.5m位の規模であったことが推察される。木組遺構は深く打ち込まれたいずれの部材も北方向に傾斜していることから、南側からの圧力で壊されたものと判断される。この木組遺構の南側には第16次調査区からの北西へ開く谷が存在し、台地上からの雨水が集まってこの谷筋を下り、調査区内の台地裾部に沿って北西側に流下したことで、壊されたものと推察される。

3. 木杭

調査区全体に亘って地面に木が刺さっているような状況が散見されたが、明らかに打ち込まれたと判断されたものについて杭と認定した。合計6基の杭跡を調査した。

杭 1 (第14、15、19図)

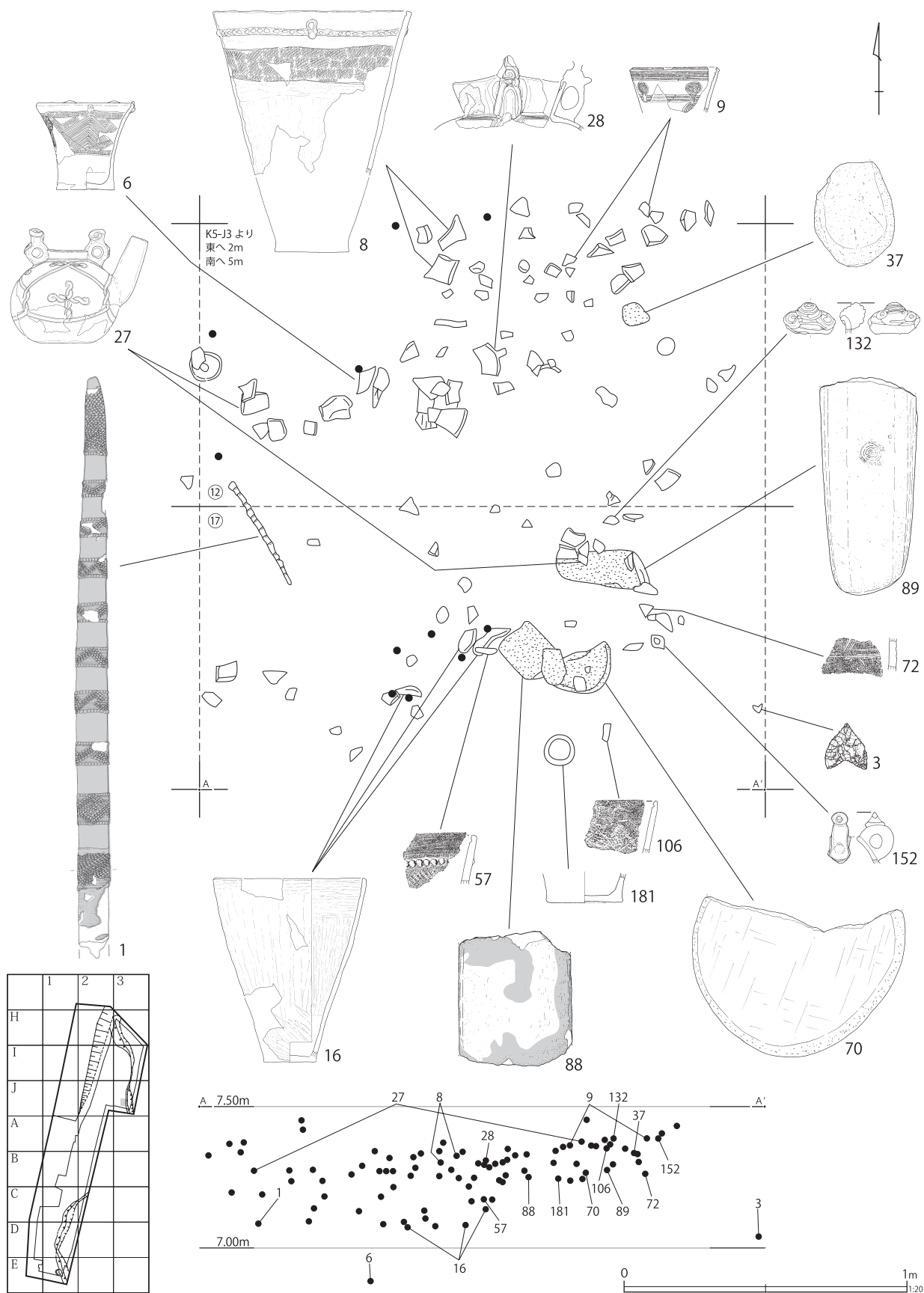
D 1 区に位置する。木組遺構の北西側に接近して位置していることから、壊された木組遺構の一部である可能性もある。土層断面図から判断すると、東へと傾いて依存していることから、木組遺構が壊されたものとは別の力が加わっている可能性もある。杭はみかん割材で、樹種はクリである。

杭 2 (第14、15、19図)

E 1 区に位置する。木組遺構から約2mの場所にあり、木組遺構とは関連がなさそうである。みかん割材が使用されている。

杭 3 (第14、15、19図)

E 1 区に位置する。杭 2 の南東約1mの地点に



第20図 祭祀跡

あり、みかん割材の先端部のみが現存する。

杭4（第14、15、19図）

E 1 区に位置する。杭3の南東約1.5mの地点にあり、みかん割材の先端部のみが現存する。

杭5（第17、19図）

H 3 区に位置する。先端部の加工が鋭く、丸太

の芯杭が使用されている。縄文時代より新しい時代の所産と思われる。

杭6（第18、19図）

J 2～3 区に位置する。調査区際であり、丸太杭の半割材が使用されている。単独の打ち込み杭と思われる。

4. 祭祀跡

J 3 区に位置する（第20図）。割れた大形の石皿と割れた大形の石棒を中心として、土器や飾弓などがまとまって出土した地点について、祭祀跡と認定した。祭祀跡はJ 3 区南側の調査区際に認められ、周囲からは多くの土器や木器類が出土しており、どの範囲までが祭祀行為の所産であるかは不明であるが、石皿、石棒を中心とする約2mの範囲内にはほぼ同一レベルで出土した飾弓などの遺物廃棄範囲を認定した。

石棒は別個体の径14～16cmの大形で、部分的なものであるが、0.5m程の範囲に石皿と伴出している。他に、やや離れているが1m以内に、堀之内2式の深鉢（6、8、57、72）、注口土器（27、28）、無文深鉢（16）、加曽利B 1式の深鉢（9、164）、同時期と思われる飾弓（1）が出土しており、どちらの時期になるかは断定できないが、祭祀跡は堀之内2式最終末から加曽利B 1式初頭にかけての所産と推定される。

5. 自然木集中区

流木等の自然木が集中して堆積していた場所を自然木集中区と認定し、大きく分けて3ヶ所が認められた（第8図）。集中区には自然木のみならず、木器や人手の加わった割材なども含まれていたが、調査時に木質類全体に通し番号を付けて記録し、明らかな木器類については取り上げて図化して報告した（第V章5、6項）。その他の自然木と思われる材については、可能な限り樹種同定を行って、遺跡周辺の水辺の樹木環境復元の資料とした。樹種については第2表に示した。図中のw番号は、調査時に付けた番号であり、第2表中の番号と対応する。本文で報告する図化した出土木製品は別番号になっており、自然木番号とは異なる。

自然木集中区1（第21図）

I～J－2～3区にかけて認められ、A～B－2～3区にかけて台地側に大きく湾入する谷部の、

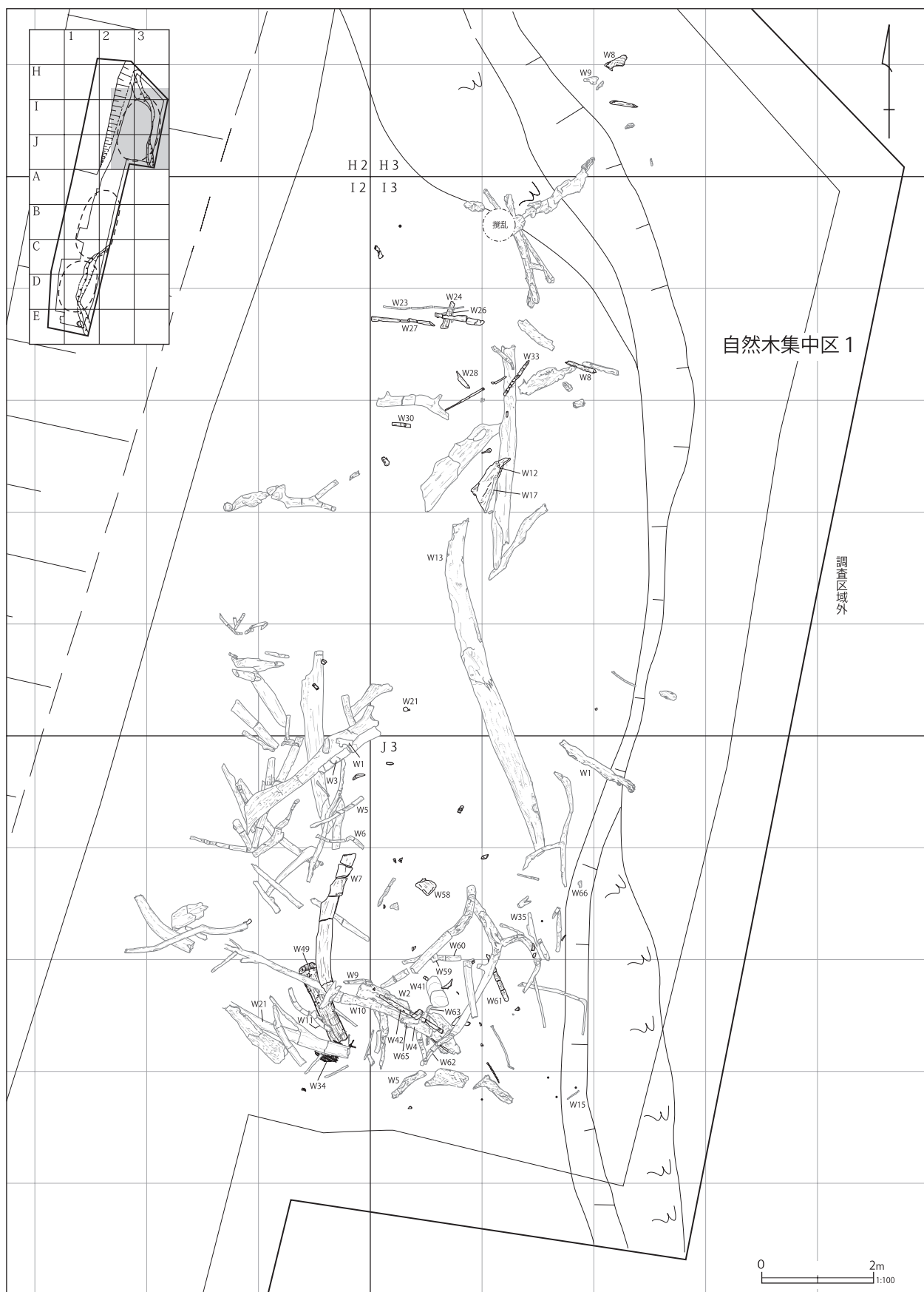
湾口部北側にあたる。木器類と共に堀之内2式期から加曽利B 1式期を中心とした多量の遺物が出土し、加曽利B 2式までの土器群が出土している。この集中区からは丸木舟、飾弓、編組製品なども出土した。

自然木集中区2（第22図）

湾口部南側にあたり、B 1～2区に集中して分布していた。この地区からは漆器や飾弓、丸木舟などが出土しており、加曽利B 1～B 2式期を中心としていた。

自然木集中区3（第23、24図）

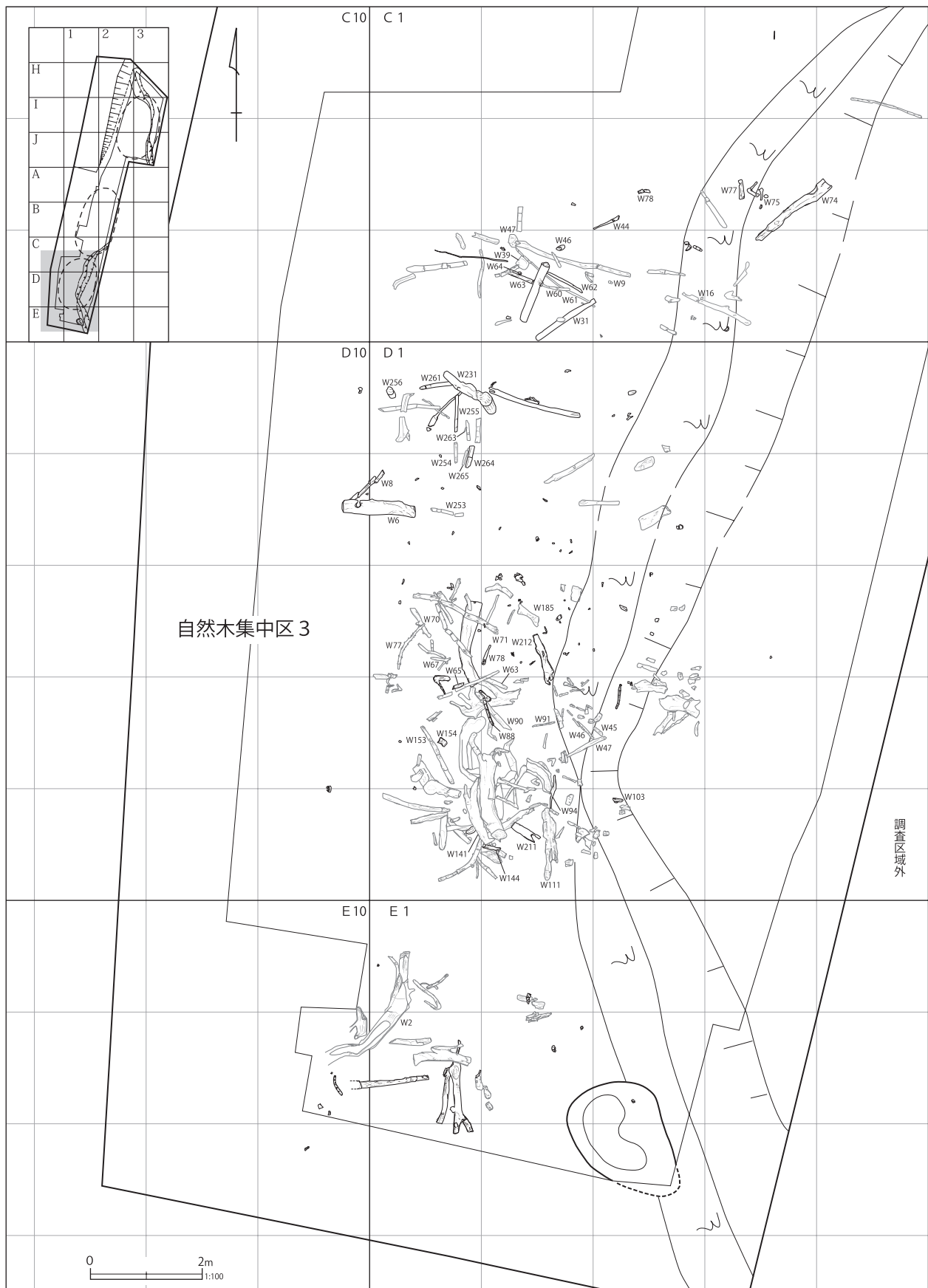
ローム台地の裾が調査区に張り出したD 1区を中心に分布していた。大量の木材が集中して堆積しており、その下部に木組遺構が存在していた。石斧の柄や飾弓、漆器なども出土し、堀之内2式期を中心とした土器群が出土している。



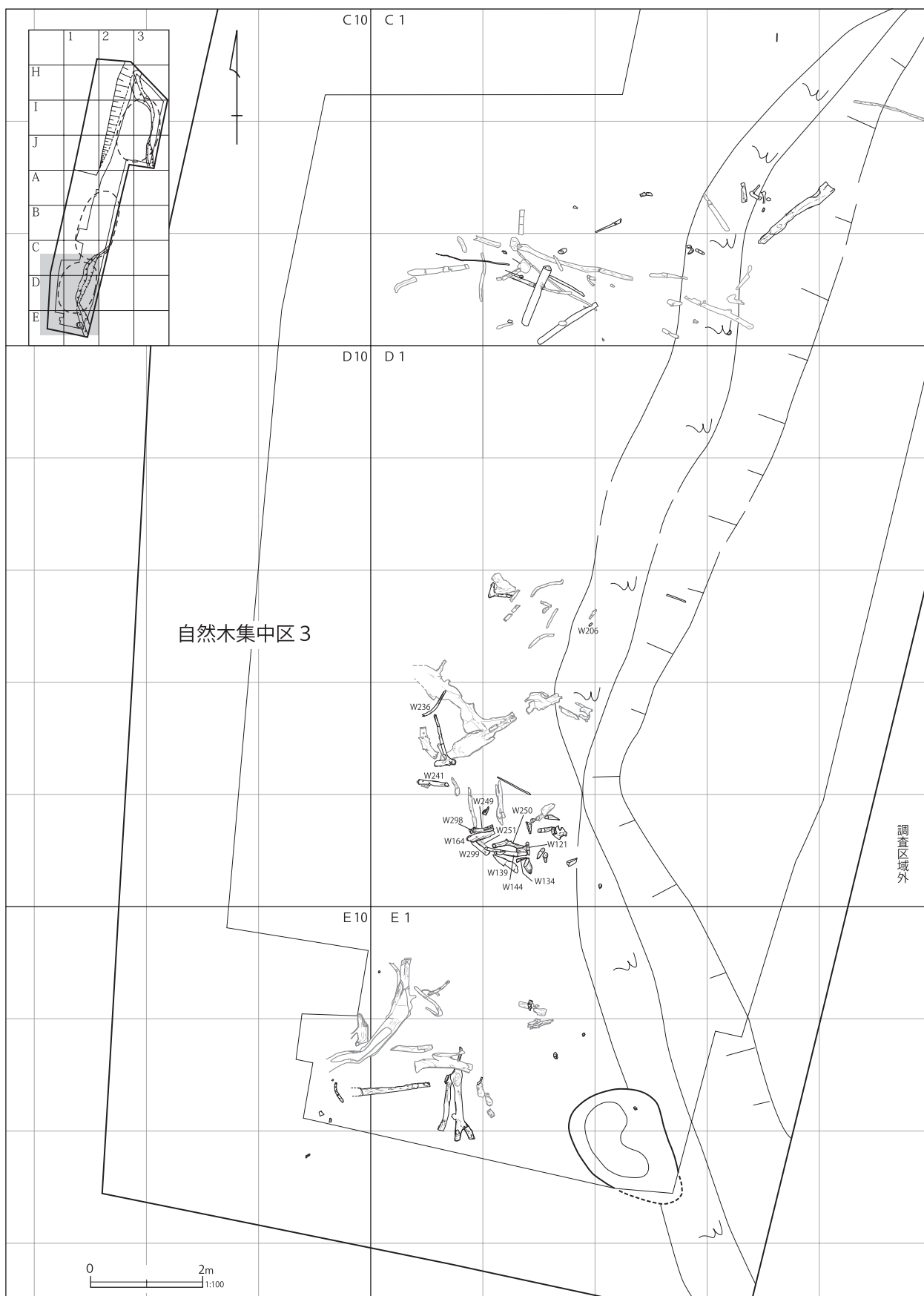
第 21 図 自然木集中区 1



第 22 図 自然木集中区 2



第 23 図 自然木集中区 3 (1)



第 24 図 自然木集中区 3 (2)

第2表 自然木一覧表

図版番号	グリッド	w No.	樹 種	器 種	木取り	長さ	直径	半径	分析番号
第17図	K5-H3	1	ムクノキ	割材	不明	54.5	20.0		2619
	K5-H3	2	アカマツ	杭	不明		4.0		2382
	K5-H3	4	アカマツ	自然木	不明		4.0		2383
	K5-H3	6	アカマツ	自然木	不明		2.9		2384
第21図	K5-H3	8	ムクノキ	割材	不明				2446
	K5-H3	9	ムクノキ	自然木	不明		11.0		2385
第21図	K5-I3	8	コナラ属クヌギ節	割材	みかん割				2447
	K5-I3	12	コナラ属クヌギ節	割材	みかん割				2453
	K5-I3	12	コナラ属クヌギ節	割材	みかん割				2459
	K5-I3	12	コナラ属クヌギ節	割材	不明	83.0		17.0	2620
	K5-I3	13	コナラ属クヌギ節	自然木	不明		39.5		2386
	K5-I3	17	カマツカ	自然木	不明		4.2		2388
	K5-I3	23	ニシキギ属	自然木	不明		2.2		2387
	K5-I3	24	コナラ属クヌギ節	割材	みかん割				2454
	K5-I3	26	エノキ属	自然木	不明		6.6		2389
	K5-I3	27	コナラ属クヌギ節	割材	不明				2445
	K5-I3	28	コナラ属クヌギ節	割材	みかん割				2448
	K5-I3	30	コナラ属クヌギ節	割材	みかん割				2451
	K5-I3	33	クマノミズキ類	割材	みかん割				2452
第21図	K5-J2	1	エノキ属	自然木	不明		7.0		2363
	K5-J2	3	エノキ属	自然木	不明		14.2		2369
	K5-J2	5	エノキ属	自然木	不明		6.4		2364
	K5-J2	6	エノキ属	自然木	不明		4.0		2362
	K5-J2	7	エノキ属	割材	不明	33.5		14.0	2614
	K5-J2	9	ムクノキ	自然木	不明		7.0		2366
	K5-J2	10	エノキ属	自然木	不明		13.2		2367
	K5-J2	11	エノキ属	自然木	不明		7.0		2365
	K5-J2	21	エノキ属	自然木	不明		16.3		2368
第21図	K5-J3	1	コナラ属クヌギ節	自然木	不明		14.2		2377
	K5-J3	2	エノキ属	自然木	不明		—		2380
	K5-J3	4	コナラ属クヌギ節	自然木	みかん割		7.4		2378
	K5-J3	5	エノキ属	自然木	不明		12.5		2379
	K5-J3	15	タケ亜科	竹	不明		2.0		2372
	K5-J3	41	エノキ属	自然木	不明		6.0		2376
	K5-J3	42	コナラ属クヌギ節	杭	みかん割				2456
	K5-J3	58	クリ	加工材	不明	34.0	23.0		2623
	K5-J3	59	クリ	自然木	不明		14.0		2370
	K5-J3	60	コナラ属クヌギ節	自然木	不明		6.8		2373
	K5-J3	61	コナラ属クヌギ節	割材	みかん割				2455
	K5-J3	62	コナラ属クヌギ節	自然木	不明		8.5		2374
	K5-J3	63	コナラ属クヌギ節	自然木	不明		5.9		2371
	K5-J3	65	クリ	自然木	不明		9.5		2375
	K5-J3	66	コナラ属クヌギ節	自然木	不明			5.0	2381
第22図	L5-B1	21	エノキ属	自然木	不明		16.0		2345
	L5-B1	22	コナラ属コナラ節	自然木	不明		13.0		2359
	L5-B1	23	クリ	自然木	不明		6.3		2352
	L5-B1	24	コナラ属コナラ節	板材	板目				2477
	L5-B1	25	コナラ属コナラ節	自然木	不明		10.3		2347
	L5-B1	26	コナラ属コナラ節	自然木	不明		10.8		2353
	L5-B1	27	コナラ属コナラ節	加工材	みかん割				2478
	L5-B1	28	エノキ属	割材	半割?				2486
	L5-B1	29	サクラ属 (広義)	自然木	不明		9.6		2361
	L5-B1	30	コナラ属コナラ節	割材	芯持丸木				2483
	L5-B1	31	エノキ属	割材	不明				2487
	L5-B1	32	エノキ属	自然木	不明		10.8		2354
	L5-B1	33	エノキ属	割材	不明				2480
	L5-B1	34	エノキ属	自然木	不明		11.8		2355

図版番号	グリッド	w No.	樹 種	器 種	木取り	長さ	直径	半径	分析番号
	L5-B1	35	クワ属	自然木	不明		7.0		2349
	L5-B1	37	ムクロジ	自然木	不明		6.5		2356
	L5-B1	38	エノキ属	自然木	不明		10.5		2360
	L5-B1	39	クワ属	自然木	不明		5.8		2343
	L5-B1	40	エノキ属	自然木	不明		9.5		2351
	L5-B1	41	エノキ属	加工材	不明				2475
	L5-B1	42	エノキ属	自然木	不明			6.0	2350
	L5-B1	43	エノキ属	割材	みかん割				2479
	L5-B1	44	エノキ属	自然木	不明		10.5		2357
	L5-B1	45	イヌガヤ	自然木	不明		6.0		2348
	L5-B1	46	エノキ属	自然木	不明			4.3	2358
	L5-B1	47	エノキ属	自然木	不明		16.0		2344
	L5-B1	48	イヌガヤ	自然木	不明		1.4		2346
	L5-B1	49	クリ	杭	芯持丸木				2482
	L5-B1	49	クリ	杭	みかん割				2484
第 22 図	L5-B2	1	コナラ属コナラ節	自然木	不明		20.5		2408
	L5-B2	10	ムクノキ	割材	みかん割				2465
	L5-B2	11	ムクノキ	割材	半割				2464
	L5-B2	11	ムクノキ	割材	半割				2472
	L5-B2	12	エノキ属	自然木	半割?				2469
	L5-B2	13	エノキ属	自然木	不明			6.2	2394
	L5-B2	14	クリ	割材	半割				2471
	L5-B2	15	コナラ属クスギ節	割材	半割				2466
	L5-B2	16	エノキ属	自然木	不明	49.0	15.0		2621
	L5-B2	26	クリ	加工材	芯持丸木				2485
	L5-B2	27	クワ属	自然木	不明		7.2		2395
	L5-B2	28	クリ	自然木	不明		15.5		2396
	L5-B2	29	エノキ属	自然木	不明		12.0		2402
	L5-B2	30	エノキ属	自然木	不明		12.0		2405
	L5-B2	31	クリ	加工材	芯持丸木				2461
	L5-B2	32	ニワトコ	自然木	不明		7.0		2393
	L5-B2	33	エノキ属	杭	芯持丸木				2470
	L5-B2	34	コナラ属クスギ節	自然木	不明		6.8		2428
	L5-B2	35	エノキ属	自然木	不明		7.0		2391
	L5-B2	36	エノキ属	自然木	不明		10.4		2404
	L5-B2	37	エノキ属	加工材	芯持丸木				2463
	L5-B2	38	エノキ属	自然木	不明		11.0		2392
	L5-B2	39	エノキ属	自然木	不明		9.5		2403
	L5-B2	40	エノキ属	自然木	不明		17.0		2390
	L5-B2	41	エノキ属	自然木	不明		6.4		2401
	L5-B2	42	エノキ属	加工材	不明				2476
	L5-B2	43	エノキ属	自然木	不明		15.5		2400
	L5-B2	44	エノキ属	自然木	不明		12.5		2397
	L5-B2	45	ツバキ属	自然木	不明		8.3		2414
	L5-B2	46	ムクノキ	自然木	不明		8.6		2399
	L5-B2	48	コナラ属クスギ節	割材	みかん割				2467
第 23 図	L5-C1	9	コナラ属コナラ節	自然木	不明		5.3		2421
	L5-C1	16	クワ属	自然木	不明			2.4	2425
	L5-C1	31	コナラ属クスギ節	割材	不明				2481
	L5-C1	39	トチノキ	自然木	不明		24.2		2418
	L5-C1	44	コナラ属クスギ節	割材	みかん割				2468
	L5-C1	46	クリ	加工材	芯持丸木				2458
	L5-C1	47	クリ	自然木	不明		15.0		2423
	L5-C1	60	エノキ属	自然木	不明		4.2		2417
	L5-C1	61	イヌガヤ	自然木	不明		2.3		2424
	L5-C1	62	コナラ属コナラ節	杭	不明		4.4		2415
	L5-C1	63	コナラ属クスギ節	杭	みかん割			5.0	2410

図版番号	グリッド	w No.	樹 種	器 種	木取り	長さ	直径	半径	分析番号
	L5-C1	64	ヌルデ	杭	芯持丸木		5.3		2407
	L5-C1	64	ヌルデ	杭	不明		5.0		2422
	L5-C1	74	クリ	割材	芯持丸木				2457
	L5-C1	77	クリ	板材	板目割材				2474
	L5-C1	78	コナラ属クスギ節	割材	みかん割				2462
第 23 図	L5-D1	6	コナラ属コナラ節	割材	不明				2510
第 24 図	L5-D1	8	ヒサカキ	割材	不明				2496
	L5-D1	45		自然木	不明				2497
	L5-D1	46	コナラ属クスギ節	自然木	みかん割			4.9	2432
	L5-D1	47	ヤナギ属	自然木	不明		3.8		2427
	L5-D1	51	クリ	自然木	不明			4.8	2426
	L5-D1	63	ムクロジ	自然木	不明		5.0		2416
	L5-D1	65	トネリコ属シオジ節	割材	不明		3.3		2412
	L5-D1	67	エノキ属	自然木	不明		4.0		2440
	L5-D1	70	エノキ属	自然木	不明		6.7		2419
	L5-D1	71	イヌガヤ	自然木	不明		6.7		2420
	L5-D1	77	イヌガヤ	自然木	不明		4.0		2411
	L5-D1	78	クリ	割材	半割?				2498
	L5-D1	88	コナラ属クスギ節	丸材	芯なし削り出し				2513
	L5-D1	90	コナラ属コナラ節	自然木	みかん割				2435
	L5-D1	91	クワ属	自然木	不明		2.4		2431
	L5-D1	94	コナラ属クスギ節	柄	芯なし削り出し				2449
	L5-D1	103		加工材	榫目				2491
	L5-D1	111	クリ	自然木	みかん割		5.5		2434
	L5-D1	121	エゴノキ属	杭	不明				2502
	L5-D1	134	クリ	板材	みかん割				2488
	L5-D1	139	クリ	杭	不明				2501
	L5-D1	141	クリ	自然木	不明				2444
	L5-D1	144	クリ	加工材	不明				2500
	L5-D1	153	コナラ属クスギ節	自然木	みかん割		6.3		2413
	L5-D1	154	クリ	割材	みかん割				2494
	L5-D1	154	ヤナギ属	割材	不明				2508
	L5-D1	164	クリ	割材	不明	59.5		7.5	2617
	L5-D1	176	クリ	割材	不明				2438
	L5-D1	185	エノキ属	自然木	不明		8.0		2430
	L5-D1	211	コナラ属コナラ節	割材	不明				2505
	L5-D1	212	クリ	加工材	芯持丸木	98.0	12.5		2613
	L5-D1	221	エノキ属	自然木	不明			13.5	2441
	L5-D1	231	クリ	割材	不明				2436
	L5-D1	241	イヌガヤ	杭	不明				2507
	L5-D1	249	ヤナギ属	杭	不明				2511
	L5-D1	250	クリ	杭	不明				2504
	L5-D1	251	クリ	自然木	不明		8.0		2429
	L5-D1	253	エノキ属	自然木	不明		4.3		2433
	L5-D1	254	ニワトコ	自然木	不明		3.4		2442
	L5-D1	255	ニワトコ	杭	不明				2509
	L5-D1	256	クリ	割材	半割?				2490
	L5-D1	261	コナラ属クスギ節	割材	榫目				2489
	L5-D1	263	ムクロジ	自然木	不明		2.4		2409
	L5-D1	264	コナラ属クスギ節	割材	みかん割				2495
	L5-D1	265	タケ亜科	自然木	不明		1.5		2443
	L5-D1	283	カマツカ	自然木	不明		3.3		2406
	L5-D1	298	クリ	割材	芯持丸木				2492
	L5-D1	299	トチノキ	割材	不明				2503
第 23 図	L5-E1	2	ヤナギ属	自然木	不明		27.5		2437

V グリッド出土遺物

1. 縄文土器

第18・20次調査区からは、縄文時代後期前葉の多量な土器群を中心として、早期から後期初頭までの土器群が少量出土した。ここでは、時期別に土器群を大別し、後期の土器群については型式別に大別してさらに細かな分類を行うこととする。

出土土器は全体で16,226点を数え、その中で実測図及び拓本等で図化したものは1,710点である。また、非掲載土器は14,663点で、その内訳は第3表に示した通りである。非掲載土器は型式帰属判断の難しい破片が大半であり、厳密な分類ではないが、群分けした土器群の数値はおおよその傾向を示しているものと判断される。

第3表 全非掲載土器分類表

分類	時期	全体				
		型式	口縁部	胴部	底部	小計
I 群	早期	撚糸文	1	8	0	9
		条痕文	2	44	0	46
		小計	3	52	0	55
II 群	前期	羽状縄文	0	5	0	5
		諸磯 a 式	0	0	0	0
		諸磯 b / 浮島	1	6	2	9
		諸磯 c	0	1	1	2
		十三菩提	4	11	0	15
III 群	中期	小計	5	23	3	31
		五領ヶ台 2	0	6	1	7
		貉沢 / 勝坂 I	1	24	0	25
		加曽利 E III	0	29	0	29
		加曽利 E IV	0	0	0	0
IV 群	後期	小計	1	59	1	61
		称名寺 1	2	2	0	4
		称名寺 2	5	49	0	54
V 群	後期	小計	7	51	0	58
		堀之内 1	94	409	0	503
		堀之内 2	536	2005	0	2541
VI 群	後期	小計	630	2414	0	3044
		加曽利 B 1	425	1360	0	1785
		加曽利 B 2	188	418	0	606
VII 群	後期	小計	613	1778	0	2391
		縄文のみ	50	1791	5	1846
		無文	180	6232	694	7106
VIII 群	後期	小計	230	8023	770	9023
		合計	1489	12400	774	14663

非掲載土器14,663点中、後期の土器群は14,516点で、約99%を占めている。後期の土器群の中では、称名寺式土器が0.4%、堀之内1式が約3.5%、堀之内2式が約17.5%、加曽利B1式が約12.3%、加曽利B2式が約4.2%であり、無文もしくは縄文のみの土器群は約62.1%である。

第I群土器

早期の土器群を一括する。

第1類…撚糸文系土器群を一括する。

第2類…条痕文系土器群を一括する。

第II群土器

前期の土器群を一括する。

第1類…花積下層式から黒浜式までの羽状縄文系繊維土器群を一括する。

第2類…諸磯 a 式土器を一括する

第3類…諸磯 b 式、浮島式土器を一括する。

第4類…諸磯 c 式土器を一括する。

第5類…十三菩提式土器を一括する。

第III群土器

中期の土器群を一括する。

第1類…五領ヶ台2式土器を一括する。

第2類…貉沢式、勝坂I式土器を一括する。

第3類…加曽利EIII式土器を一括する。

第4類…加曽利EIV式土器を一括する。

第IV群土器

後期初頭の土器群を一括する。

第1類…称名寺1式土器を一括する。

第2類…称名寺2式土器を一括する。

第V群土器

後期前葉の堀之内1式土器を一括する。

第VI群土器

後期前葉の堀之内2式土器を一括する。

第Ⅶ群土器

後期中葉の加曽利B 1式土器を一括する。

第Ⅷ群土器

後期中葉の加曽利B 2式土器を一括する。

第Ⅸ群土器

地文のみ、もしくは無文の時期不詳の土器群を一括する。

第1類…縄文のみを施文する土器群を一括する。

第2類…無文の土器群を一括する。

以上、出土土器群をⅠ～Ⅸ群に分類し、挿図にはおよそ群別に深鉢、鉢、浅鉢、壺、注口土器、底部の順で掲載した。器種別の分類等については、最後にまとめて概括する。

なお、実測土器の法量等の計測は、第20表に一括してまとめた。

H 3 区の土器群（第25～27図）

調査区の最北区にあたり、台地の裾部が続くことから、湧水の多い地点であった。

掲載土器56点、非掲載土器402点の合計458点が出土した。出土土器は少量で、第Ⅵ群の堀之内2式から第Ⅷ群の加曽利B 2式までが出土しており、堀之内2式と加曽利B 1式を主体とする。

1～3は第Ⅳ群の称名寺2式土器である。1は大形把手付きの胴部で括れる深鉢で、沈線区画内に単列の列点文が施文される。2は沈線区画の列点文は不明で、3は沈線区画内に縄文LRが施文される。

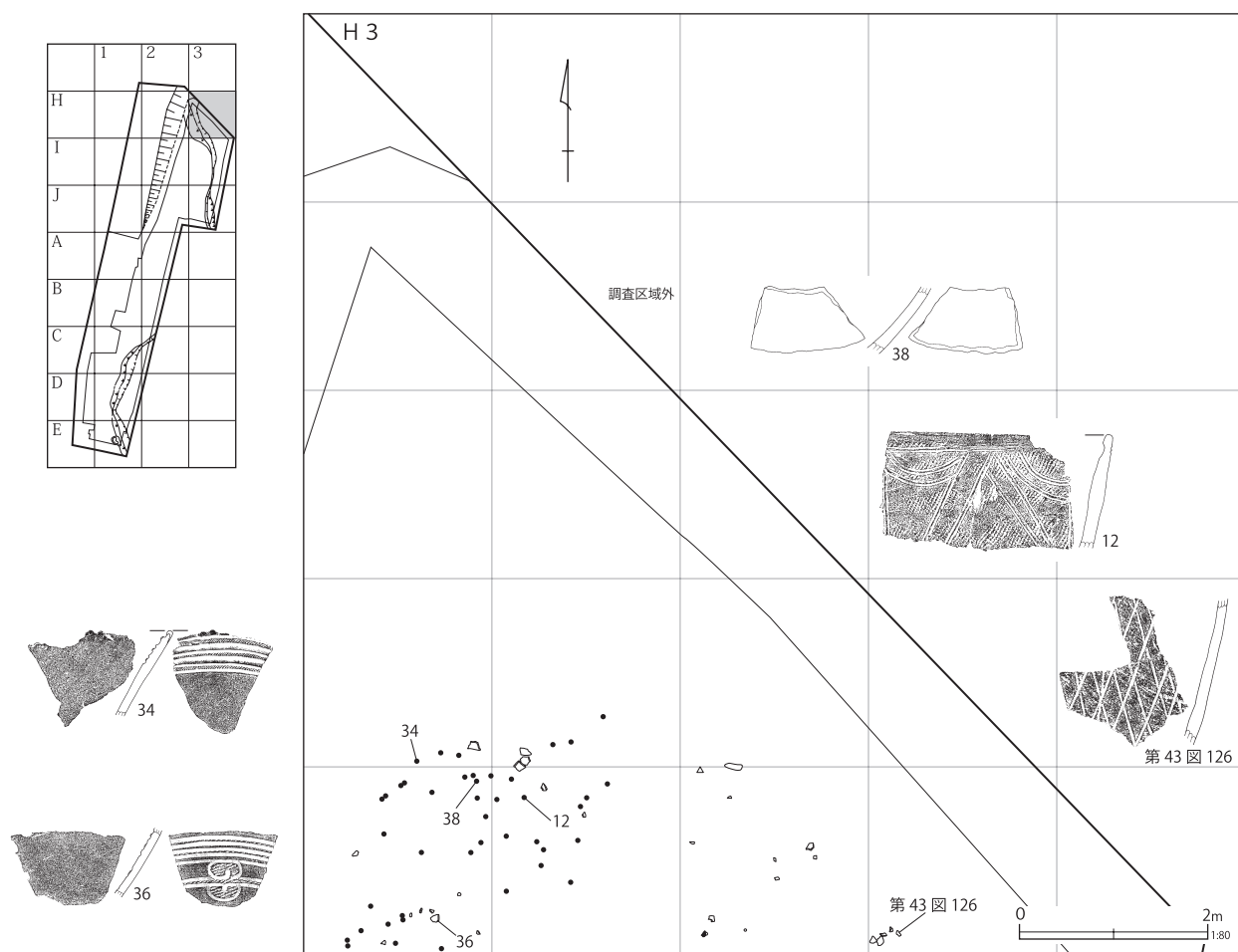
4～16は第Ⅵ群の堀之内2式土器の深鉢である。4～7、9は口縁部に刻みのある隆帯を巡らし、「8」字状貼付文が施文される。5は口唇上に沈線が、口唇下に挟りに近い沈線が施文される。6は2帯の横位縄文帯と縦位縄文帯が組み合わさる構成を採るが、横位1帯目の上側の区画沈線と横位2帯目の下側区画沈線を施文した後に、縦位区画沈線が施文され、その後に上下縄文帯の下側及び上側の沈線が最後に施文されている。縦位区

画内には縄文LRが縦位施文される。この構成は横帯文を縦位に区画して長方形や楕円文を区画する加曽利B式の手法へと継承されるものと思われる。12は地文縄文上に縦位鋸歯状と弧線文を組み合わせた文様を描くもので、半截竹管の平行沈線が使用されている。

17～27は第Ⅶ群の加曽利B 1式土器の深鉢である。17は横位の沈線帯、18、19は多条沈線の縄文帯を施文するもので、18の口縁部内面には幅広の挟り状沈線が巡り、口唇部内外端に細かな刻みが施される。18、22、23には内文がみられる。20は口縁部の横位沈線下に格子目文が施文される。25は口唇部直下から沈線の格子目文が施文される。24は紐線文系土器で、太い隆帯上に押圧状の刻みが施される。27は横位の多条沈線上に、縦位の蛇行沈線が垂下する。

第4表 H 3 区非掲載土器分類表

H 3						
分類	時期	型式	口縁部	胴部	底部	小計
Ⅰ群	早期	撚糸文				0
		条痕文				0
小計			0	0	0	0
Ⅱ群	前期	羽状縄文				0
		諸磯a				0
		諸磯b / 浮島				0
		諸磯c				0
		十三菩提				0
小計			0	0	0	0
Ⅲ群	中期	五領ヶ台2				0
		猪沢 / 勝坂Ⅰ				0
		加曽利EⅢ				0
		加曽利EⅣ				0
小計			0	0	0	0
Ⅳ群	後期	称名寺1				0
		称名寺2				0
小計			0	0	0	0
Ⅴ群	後期	堀之内1				0
Ⅵ群		堀之内2	14	29		43
小計			14	29	0	43
Ⅶ群	後期	加曽利B 1	14	52		66
Ⅷ群		加曽利B 2	1	3		4
小計			15	55	0	70
Ⅸ群	後期	縄文のみ		35		35
		無文	5	221	28	254
小計			5	256	28	289
合計			34	340	28	402



第 25 図 H 3 区土器分布図

28～32は第Ⅶ群の加曾利B 1 式土器の鉢類である。28、29は小形の鉢で、横位の沈線帯を持ち、28の口縁部下肩部の突帯には刻みが施され、横位沈線帯には縄文RLが施文される。29の沈線帯は無地文である。30は上半部の平行沈線帯とクランク状沈線で長方形区画文を施文し、地文に縄文LRが施文されるが、一部磨消されている。28、30は漆が塗られている。32は太い沈線で縄文帯が区画されるもので、縦位の区切り文の一部が観察される。

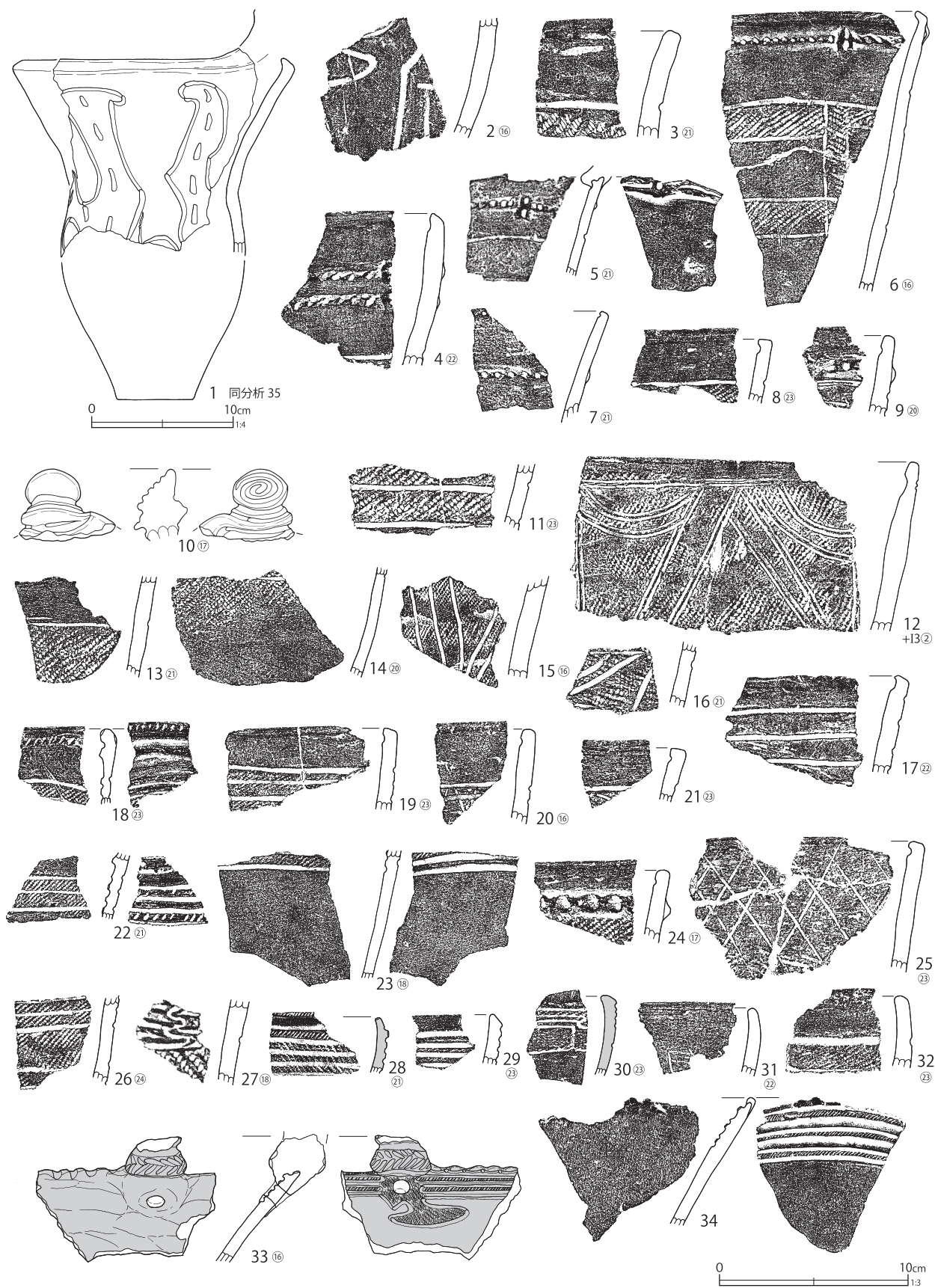
33～36は内文を持つ浅鉢である。33、34は口縁部が直線的に開く器形で、33は円形の突起に刻みが施されており、34は内文沈線に挟り状の沈線が加わり、口唇上の沈線内に細かな円形刺突文が施される。33が第Ⅵ群終末の様相を持ち、34が第Ⅶ群初頭の様相を持つ。35は刻みを施す

上下の沈線帯間に細かな縄文LRが施文されている。36は内文下段の沈線帯を挟んで、上下に対称的な「の」字状単位文が描かれ、単位文内に縄文LRが施文される。33、35、37、38は漆が塗られている。34、36も塗られていた可能性が高い。

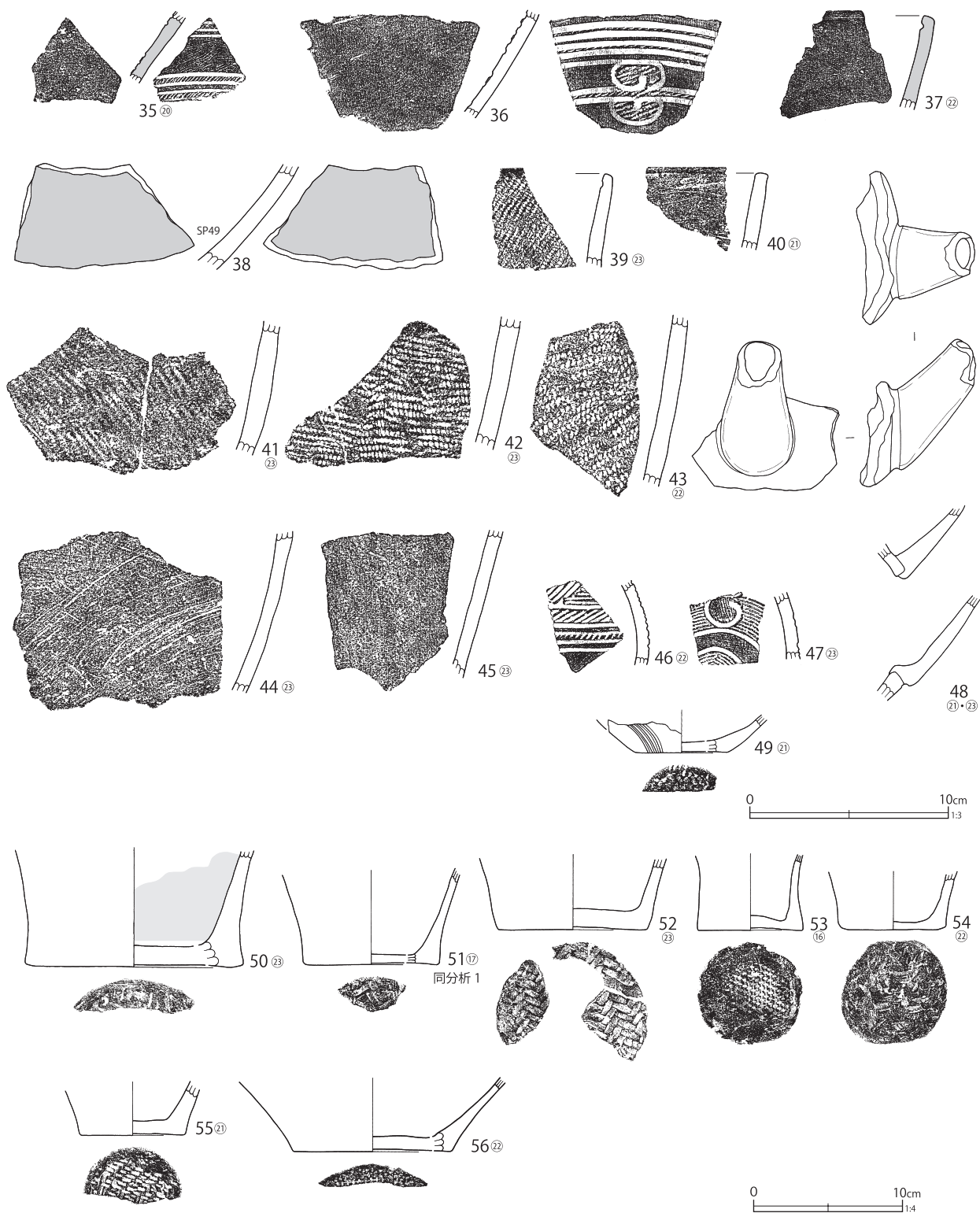
39～45は第Ⅸ群で堀之内2 式から加曾利B 1 式の破片と思われる。

46～48は注口土器で、46、47が胴部破片、48が注口部、49が底部破片である。48、49が第Ⅵ群の堀之内2 式、46、47が第Ⅶ群の加曾利B 1 式土器と思われる。

50～56は底部破片である。大半は深鉢の底部破片で、第Ⅵ群と第Ⅶ群のものと思われる。50は底部内面に赤色顔料が付着している。また、55は鉢の底部、56は底径が大きいことから、浅鉢の底部と思われる。



第26图 H3区出土土器(1)



第 27 图 H3 区出土土器 (2)

I 2 区の土器群（第28、29、33～36図）

I 2 区は調査範囲が狭いが、I 3 区から通しの土器分布図（第28図）を見ると、西側に緩く傾斜している傾向が理解される。

掲載土器92点、非掲載土器581点の合計673点が出土した。その殆どが後期前葉から中葉にかけての土器群で、第Ⅵ群の堀之内 2 式と第Ⅶ群の加曽利 B 1 式土器を中心として、第Ⅴ群の堀之内 1 式土器から第Ⅷ群の加曽利 B 2 式土器までが出土している。

第33図 2、3 は第Ⅳ群の称名寺 2 式土器で、深鉢の口縁部破片である。4 は胴部破片で、沈線区画に列点文が施文される。

5～16 は第Ⅵ群の堀之内 2 式土器で、16 以外はバケツ形に開く深鉢の破片である。5～9 は口

縁部に刻みを施す隆帯が巡らされ、「8」字状貼付文が付けられている。7 は幅広の縄文帯 1 帯構成で、9 は口唇部が幅広で内側に突出し、口唇上に 2 本の沈線が巡る。また、「8」字状貼付文上の口唇部には渦巻文が施文される丸い低平な突起が付く。9 は口縁部内外面に、漆が塗られている。11、13～15 は地文縄文上に沈線文が施文される土器群で、12、16 は第Ⅶ群の横位縄文帯の一部である可能性もある。

17～28 は第Ⅶ群の加曽利 B 1 式土器の深鉢の破片である。17～20 は内文を持つ口縁部破片で、18 は口縁部内面の沈線が強い抉り状とは成らず、まだ第Ⅵ群段階の可能性もある。17 は口唇部内端と口縁部の肩部に刻みが施される。19 は若干内接する口縁部沈線内に円形刺突文列を施文し、口唇上に押圧状の刻みが施されている。いずれも内文は刻みを施す刻文帯が交互に施文されている。

23 は口縁部が小波状を呈し、緩く内湾しながら立つ器形で、横位の縄文帯間の無文帯部に「の」字状文から変形した縦位の沈線を持つ縦位楕円文を 2 段に配し、鉤状の区切り文がこの楕円文から派生するように施文されて、縄文帯が楕円区画されているようである。無文帯も地文縄文が完全に磨消されず、「の」字状単位文の周辺には縄文が残されている。

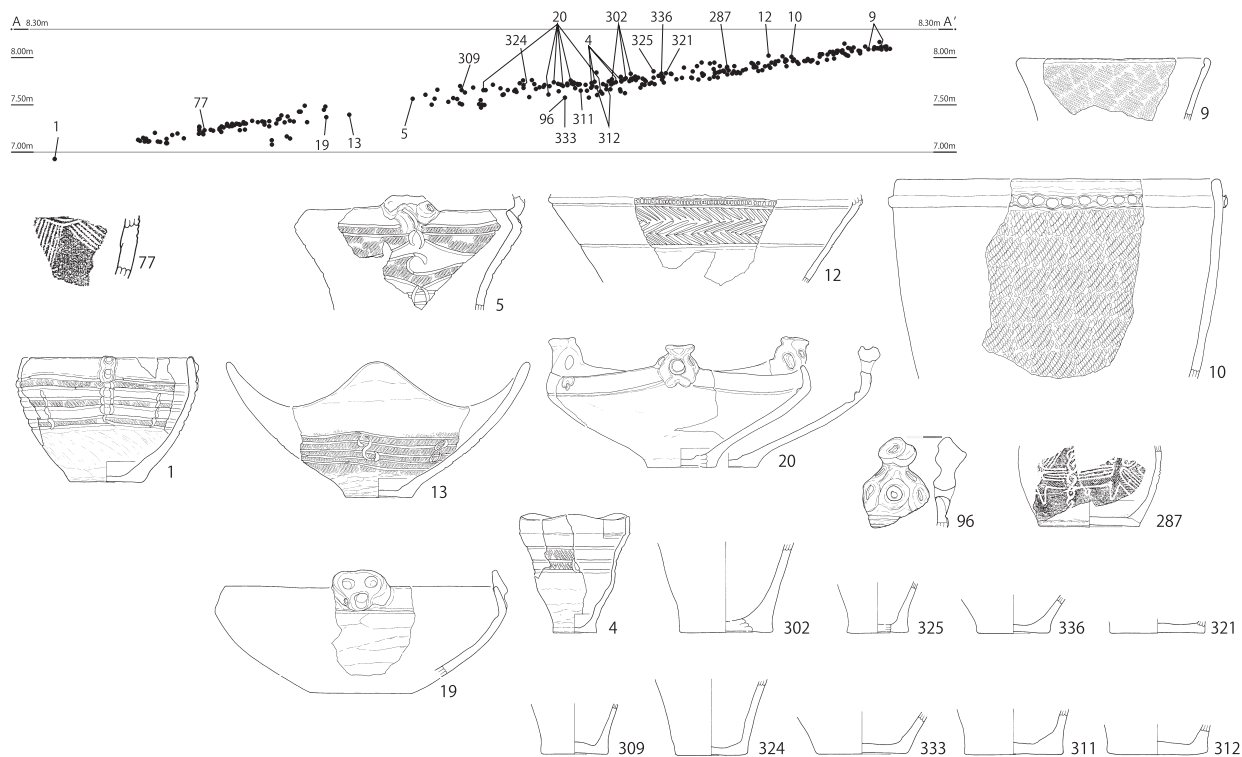
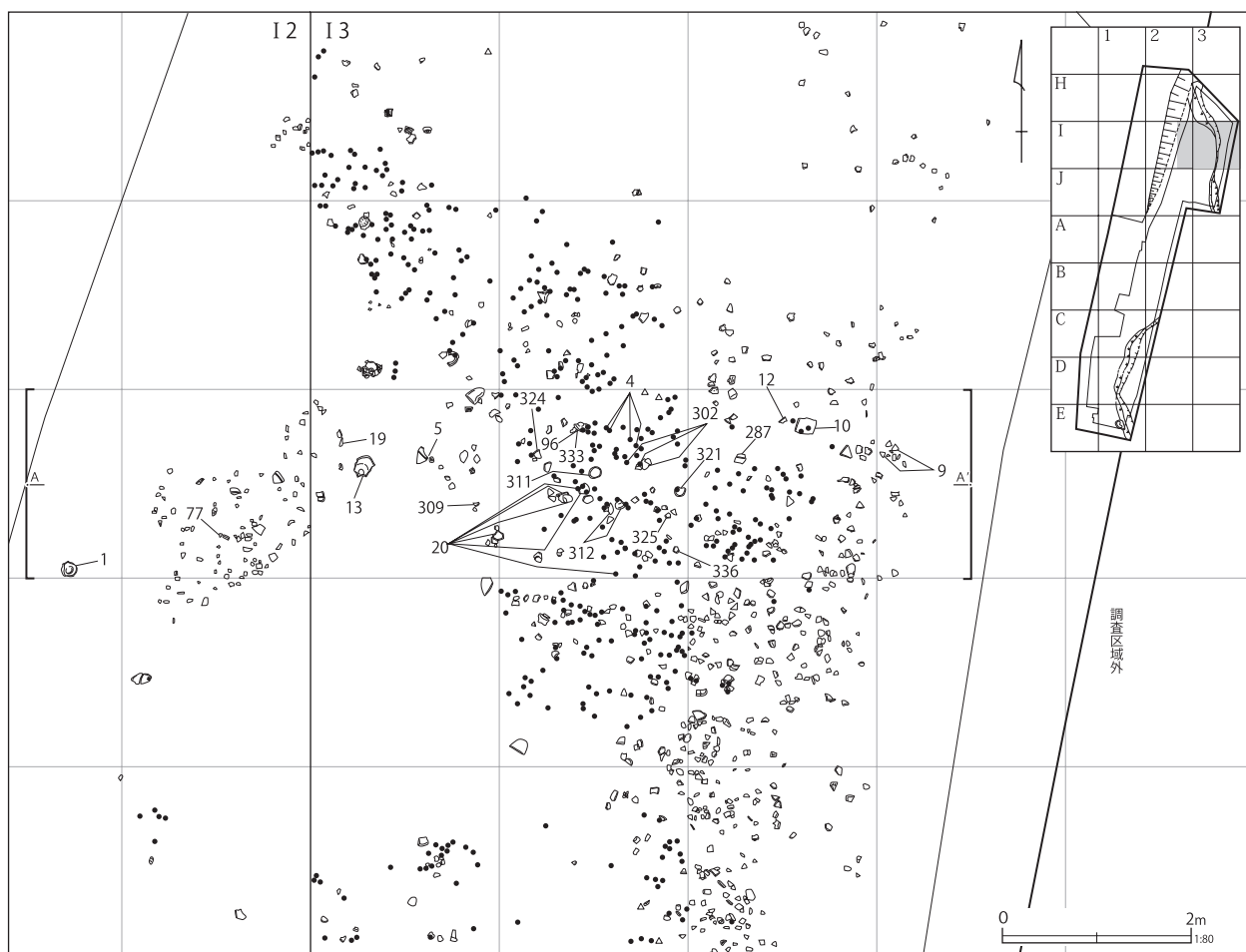
24 は鉢の可能性もあるが、口縁部に補修孔があり、繊維質の紐状のものが漆で埋め込まれている。

30～33 は沈線の格子目文が施文される深鉢で、31、32 は多条沈線で描かれることから第Ⅵ群の可能性もある。

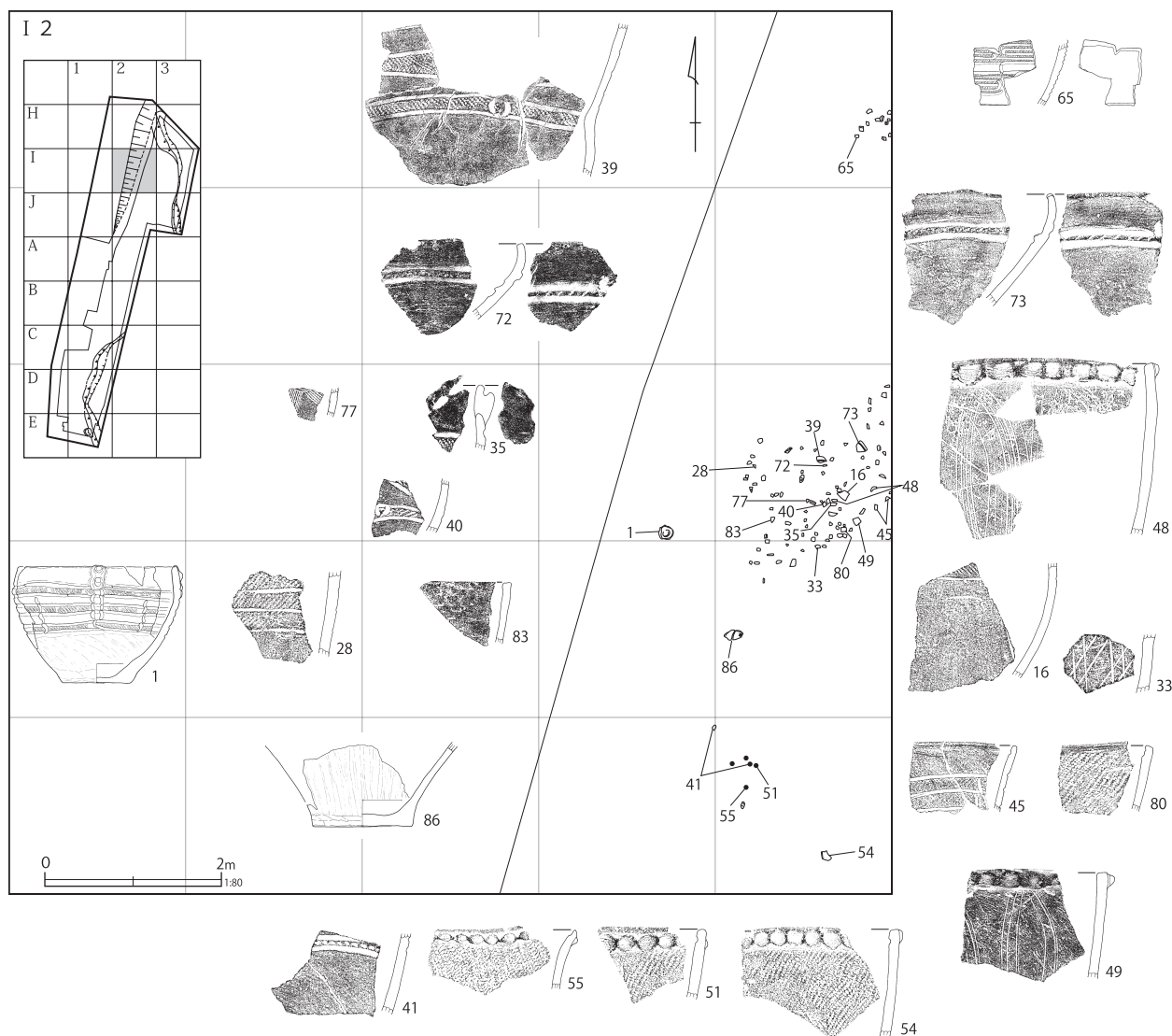
34～45 は第Ⅷ群の加曽利 B 2 式の精製深鉢である。34、35 は 3 単位波状口縁深鉢で、34 は胴部を 2 帯の縄文帯で区画するものと思われ、口縁の波底部から縦位に連なる対弧状区切り文と綾線状区切り文が施文され、それを起点として描かれる上下対弧文の外側に当たる連続菱形状区画内に、縄文が充填施文される。35 は把手の側面に楕円

第 5 表 I 2 区非掲載土器分類表

分類	I 2 区					
	時期	型式	口縁部	胴部	底部	小計
I 群	早期	燃糸文				0
		条痕文				0
小計			0	0	0	0
II 群	前期	羽状縄文				0
		諸磯 a				0
		諸磯 b / 浮島				0
		諸磯 c 式				0
		十三菩提				0
小計			0	0	0	0
III 群	中期	五領ヶ台 2				0
		猪沢 / 勝坂 I				0
		加曽利 E III				0
		加曽利 E IV				0
小計			0	0	0	0
IV 群	後期	称名寺 1				0
		称名寺 2				0
小計			0	0	0	0
V 群	後期	堀之内 1 式		11		11
VI 群		堀之内 2 式	11	45		56
小計			11	56	0	67
VII 群	後期	加曽利 B 1	22	68		90
VIII 群		加曽利 B 2	11	26		37
小計			33	94	0	127
IX 群	後期	縄文のみ	4	72		76
		無文	4	290	17	311
小計			8	362	17	387
合計			52	512	17	581



第 28 图 I 2 · I 3 区土器分布图



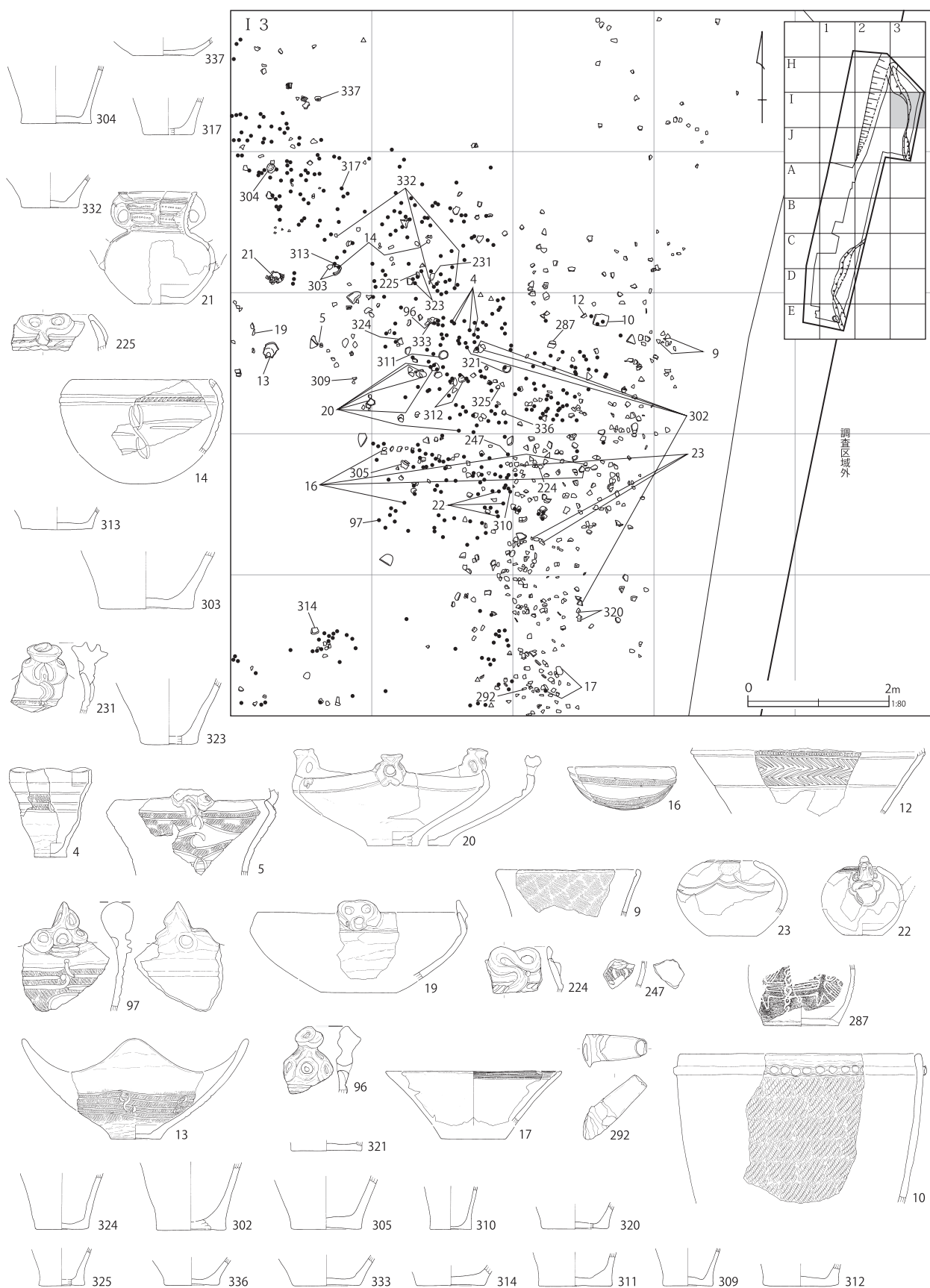
第 29 図 I 2 区土器分布図

形の刺突文が施され、把手部に垂下する 3 本沈線の一部が残っている。38 は弧を描く 2 帯の縄文帯が施文され、39、40 は胴部区画縄文帯内に対弧の区切り文が施文されている。45 は平口縁で、2 帯の縄文帯が綾線状区切り文で区切られている。

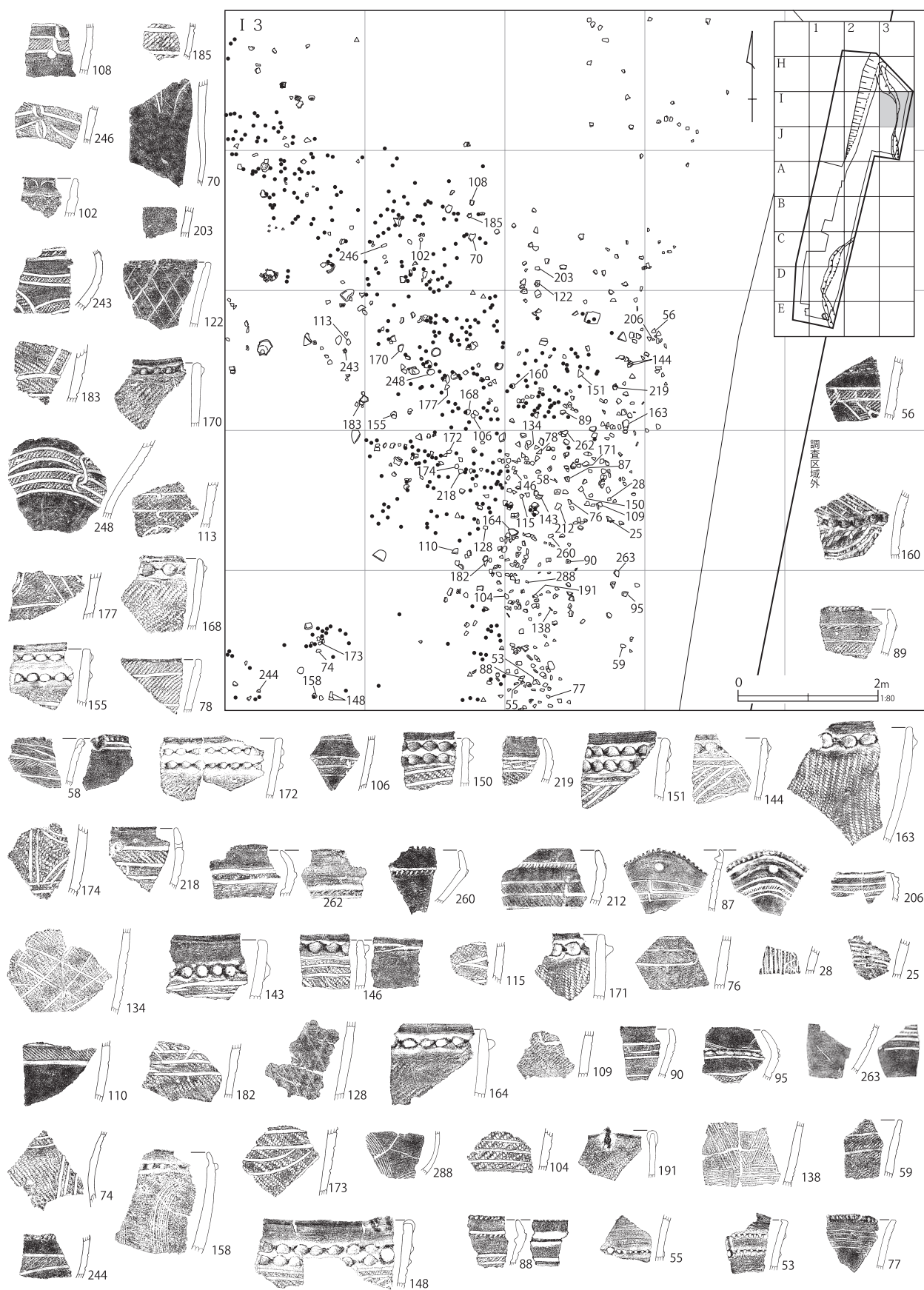
46～55 は紐線文系土器で、46 は綾線状区切り文が、47～49 は無地文上に条線で綾線もしくは紡錘文状のモチーフが描かれている。50～55 は縄文のみ施文されるもので、51、54、55 は縄文施文後の隆帯貼付である。有文の紐線文土器は第Ⅷ群土器で、51、54、55 は第Ⅶ群土器の可能性が高い。

1、29、56～65 は鉢で、61 以外は第Ⅶ群土器である。1 は 64 と同一個体であり、「8」字状貼付文から変化した縦位の隆帯が口縁部から垂下され、その下に縦位の対弧状区切り文が横位の縄文帯 3 帯を貫いて施文される。また、縦位の対弧状区切り文との間には、横帯ごとに方向を変えた弧線状区切り文が縦位に垂下されている。最下段の縄文帯では対弧状区切り文と弧線状区切り文から続くように対向する鉤状区切り文が施文され、楕円区画文が構成されている。

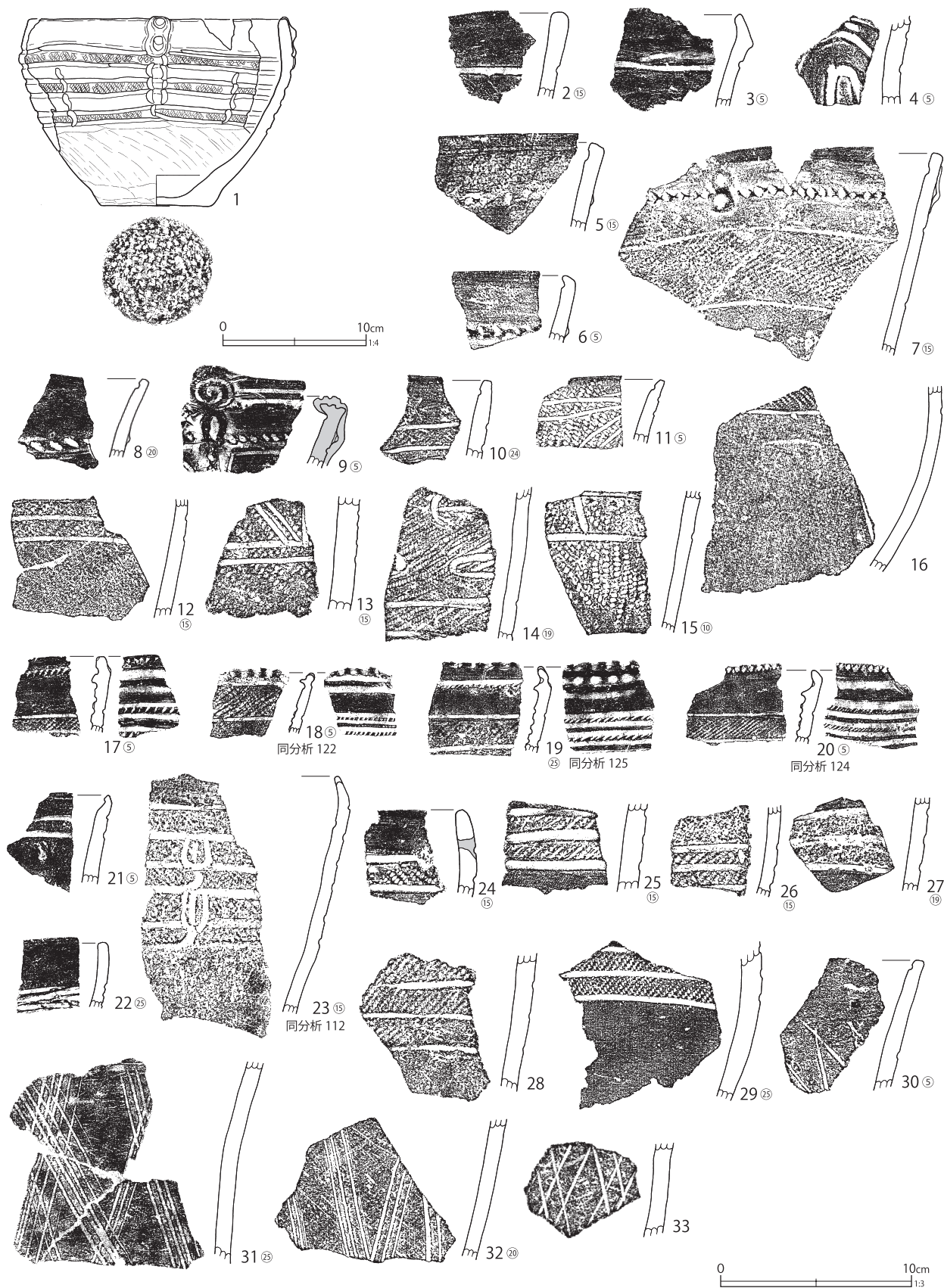
56、57、63 は平行沈線が施文され、56、57 の口唇上には刻みが施される。58 は円形刺突文を



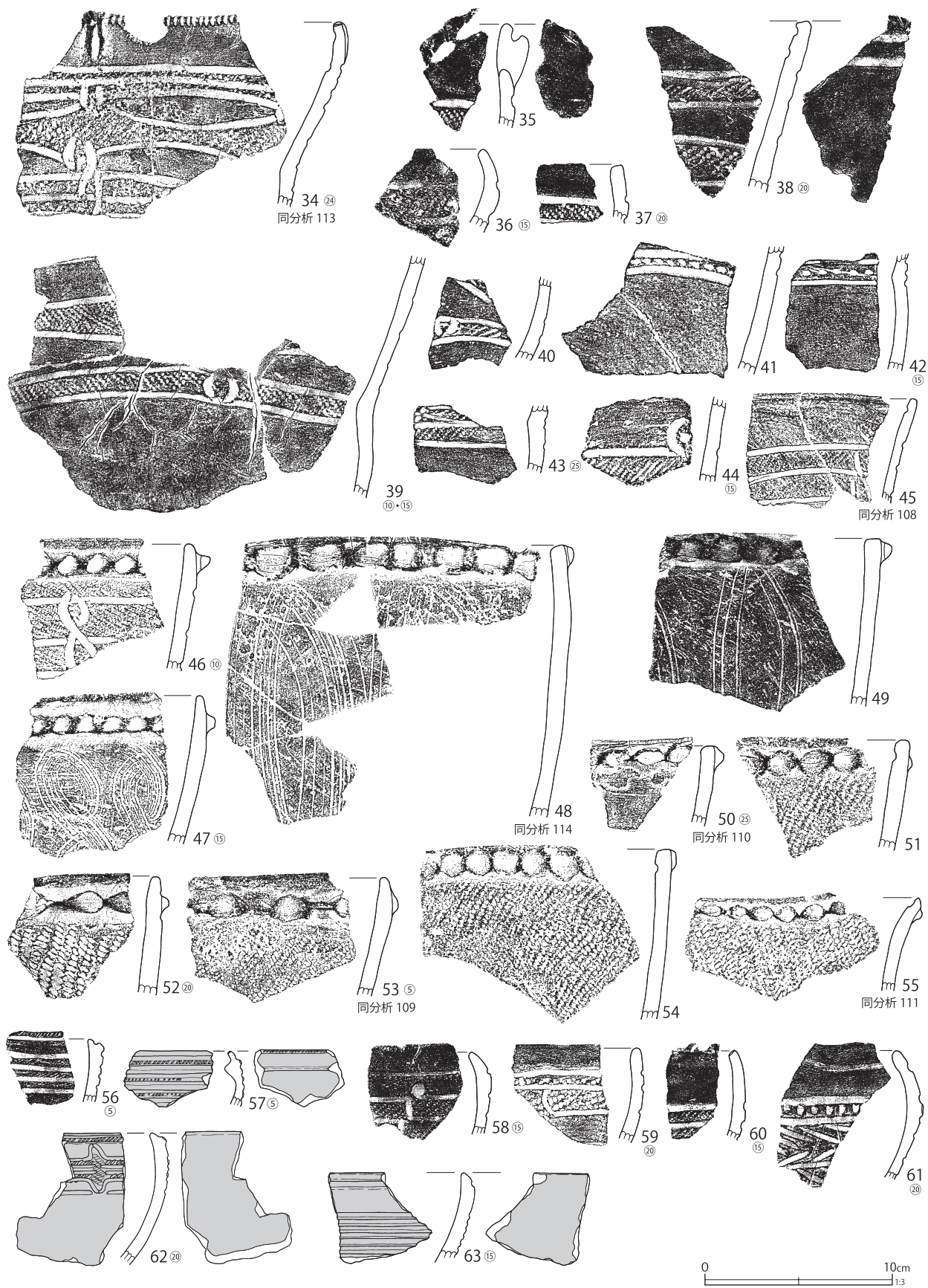
第30图 I 3区土器分布图(1)



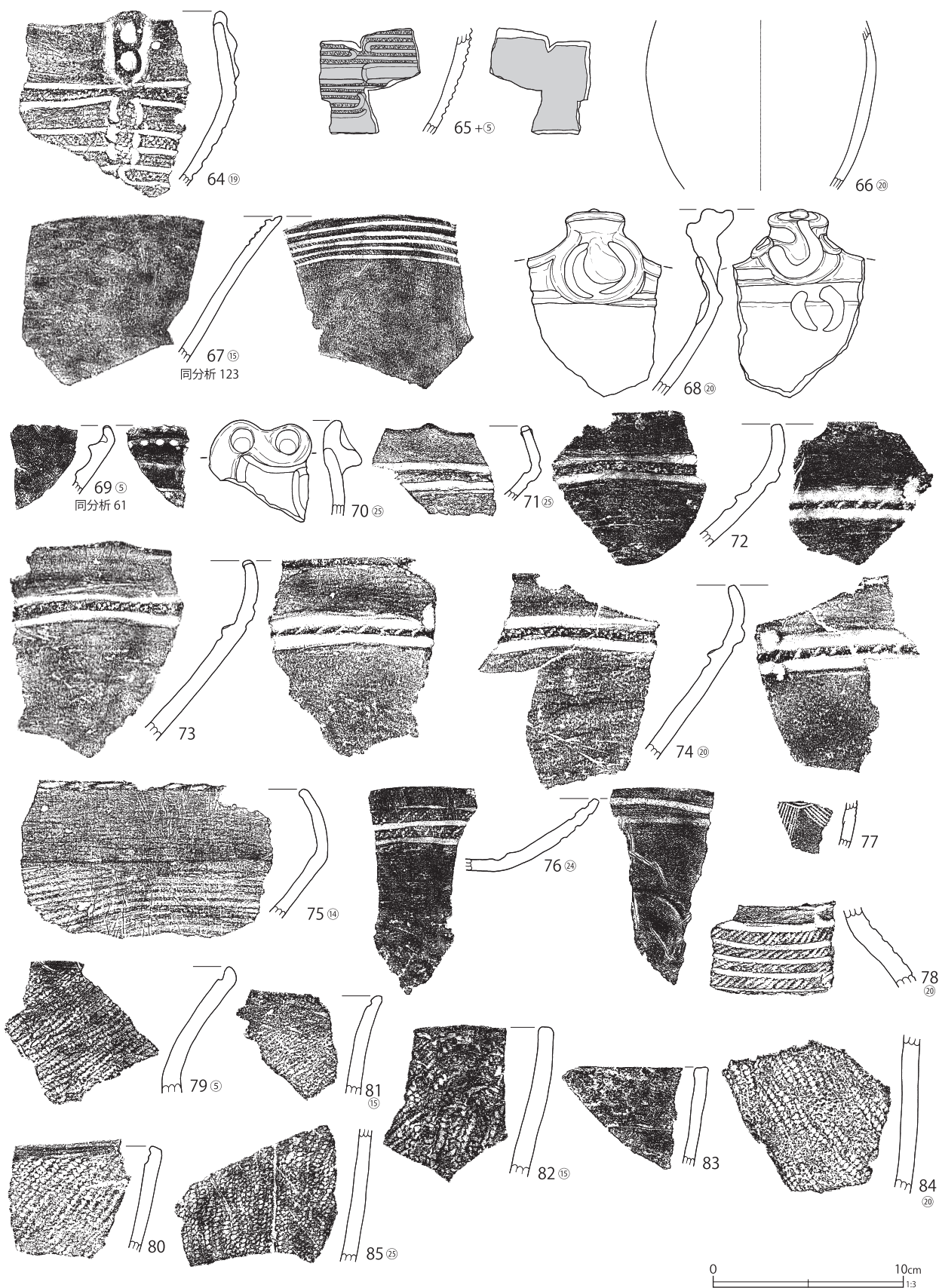
第31图 I 3区土器分布图(2)



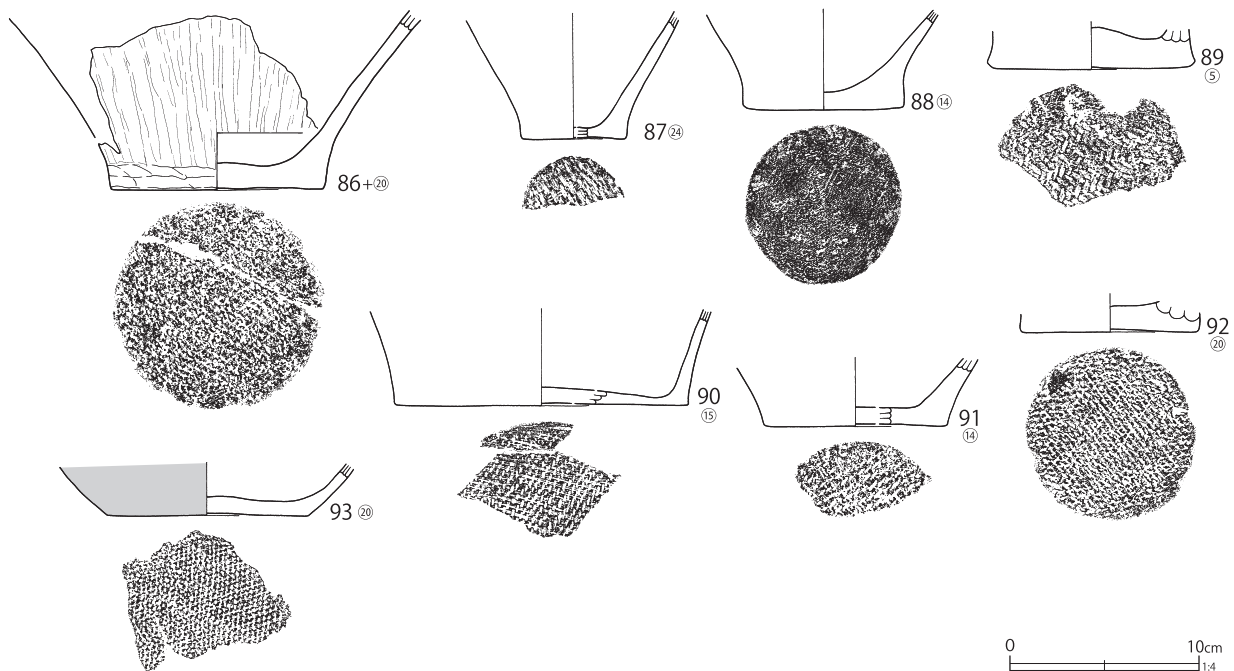
第33图 I 2区出土土器(1)



第 34 图 I 2 区出土土器 (2)



第 35 图 I 2 区出土土器 (3)



第 36 図 I 2 区出土土器 (4)

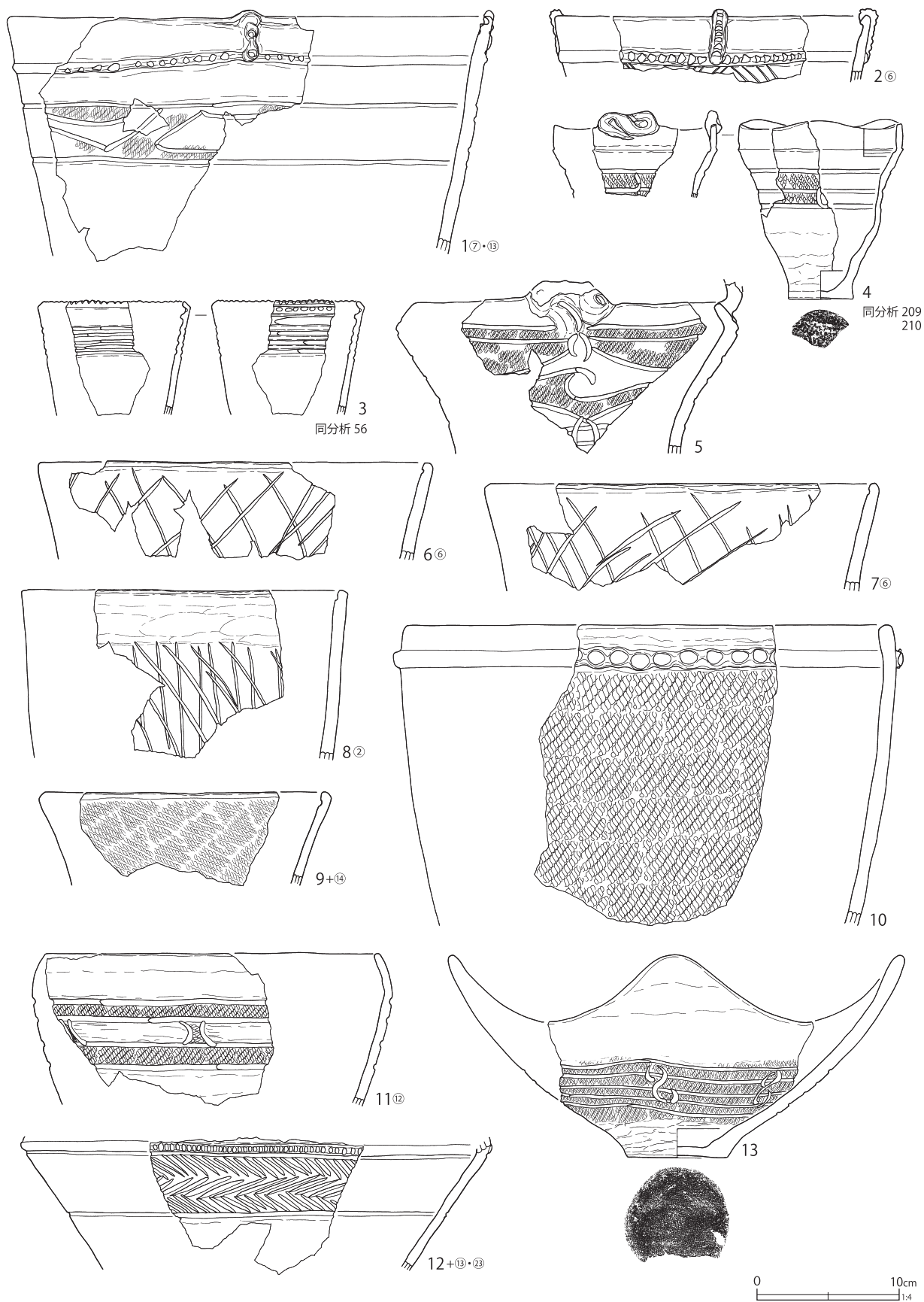
起点に左側へずれる縦位の区切り文が施文される。59は弧線状の区切り文と化した横位沈線で、楕円区画文が構成される。62は4本の横位沈線で施文される沈線帯の上下沈線の一部が上下に山形状に張り出し、縦位の菱形状区画文が構成され、縦位の縄文LRが施文される。平行沈線間には無文帯を挟んで、上下に細かな刻文帯が施されて、縦位縄文が際立っている。65は上下2帯の縄文帯内の沈線が鉤状区画文で区切られ、楕円文が構成される。57、62、63、65は漆が塗られている。また、61は突起の付く鉢と思われ、肩部の刻文帯下に横位の沈線区画が施され、中に矢羽状沈線が充填施文されている。第Ⅷ群土器である。

66は無文の壺の胴部破片と思われるが、時期は不詳である。

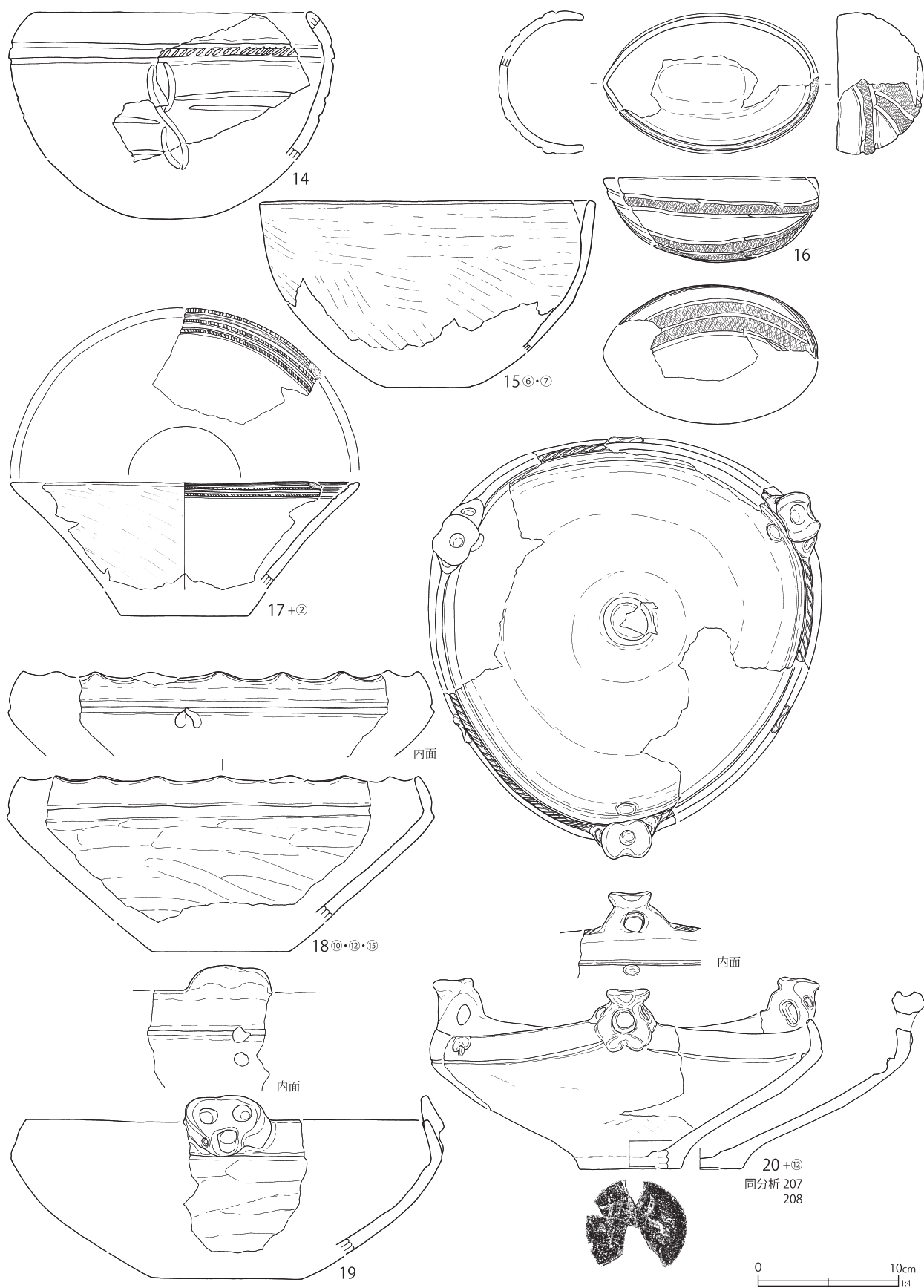
67～76は浅鉢で、67は第Ⅵ群、他は第Ⅶ群から第Ⅷ群土器のものと思われるが、69、71～74、76は第Ⅶ群の可能性が高い。72～74は内面に刻文帯を持つ同一個体である。76は皿状の浅鉢で、底面内側に円形の沈線が巡る。

第 6 表 I 3 区非掲載土器分類表

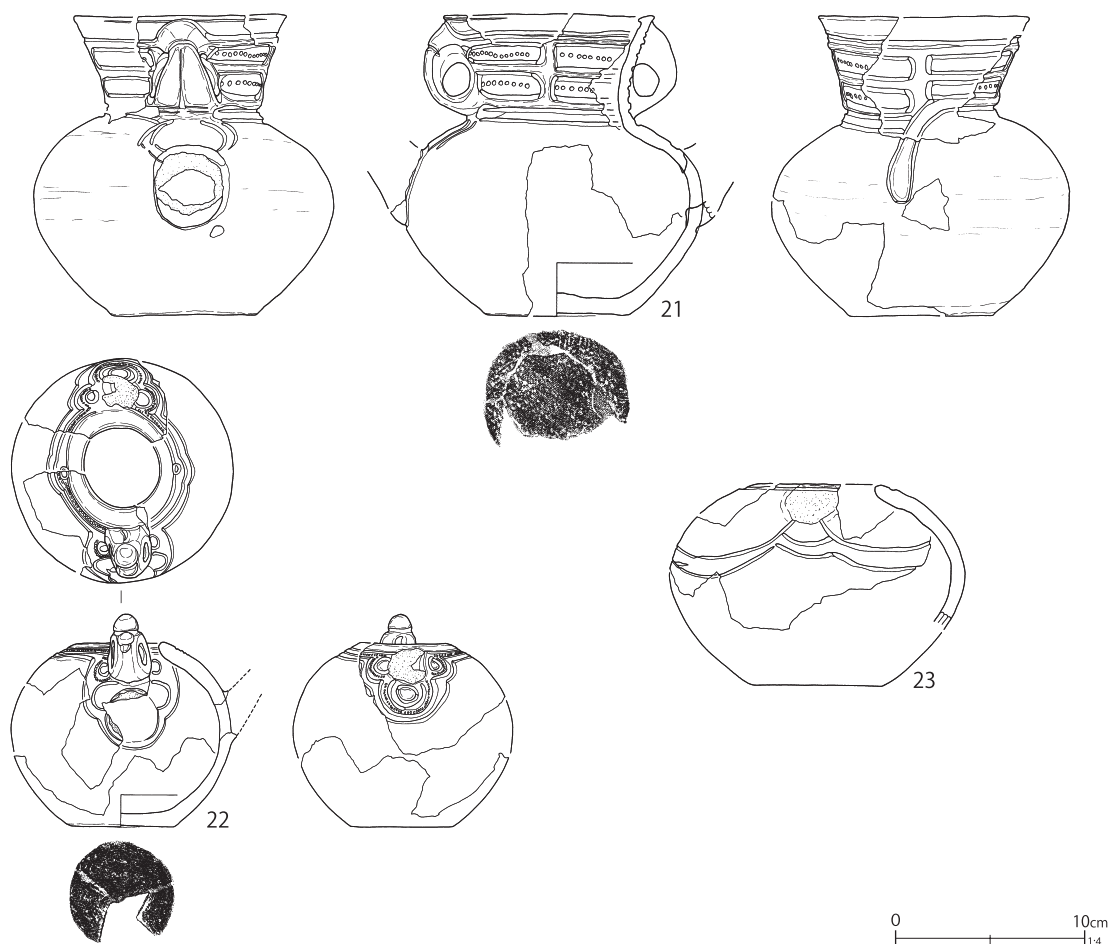
分類	時期	I 3 区				
		型式	口縁部	胴部	底部	小計
I 群	早期	燃糸文				0
		条痕文		3		3
		小計	0	3	0	3
II 群	前期	羽状縄文		3		3
		諸磯 a				0
		諸磯 b / 浮島				0
		諸磯 c			1	1
		十三菩提	1	3		4
		小計	1	6	1	8
III 群	中期	五領ヶ台 2				0
		貉沢 / 勝坂 I				0
		加曾利 E III				0
		加曾利 E IV				0
		小計	0	0	0	0
IV 群	後期	称名寺 1				0
		称名寺 2		5		5
		小計	0	5	0	5
V 群	後期	堀之内 1	2	14		16
VI 群		堀之内 2	113	393		506
小計			115	407	0	522
Ⅶ群	後期	加曾利 B 1	157	455		612
Ⅷ群		加曾利 B 2	100	145		245
小計			257	600	0	857
IX 群	後期	縄文のみ	25	594		619
		無文	54	858	144	1056
小計			79	1452	215	1746
合計			452	2473	216	3141



第 37 图 I 3 区出土土器 (1)



第 38 图 I 3 区出土土器 (2)



第39図 I 3区出土土器（3）

77、78は第Ⅶ群の注口土器と思われるが、78は壺の可能性もある。

79～84は第Ⅸ群土器で、79～81は第Ⅶ群の縄文施文土器と思われる。

86～92は底部で、86、88、90、91は鉢の、93は注口土器の底部と思われる。

I 3区の土器群（第28、30～32、37～49図）

I 3区は土器分布図（第28、30～32図）から理解されるように、北西方向から南東方向にかけて帯状に土器が分布する。また、調査区の東側では台地の裾部分が南西方向に伸びており、その傾斜に沿って土器が分布しているようである。

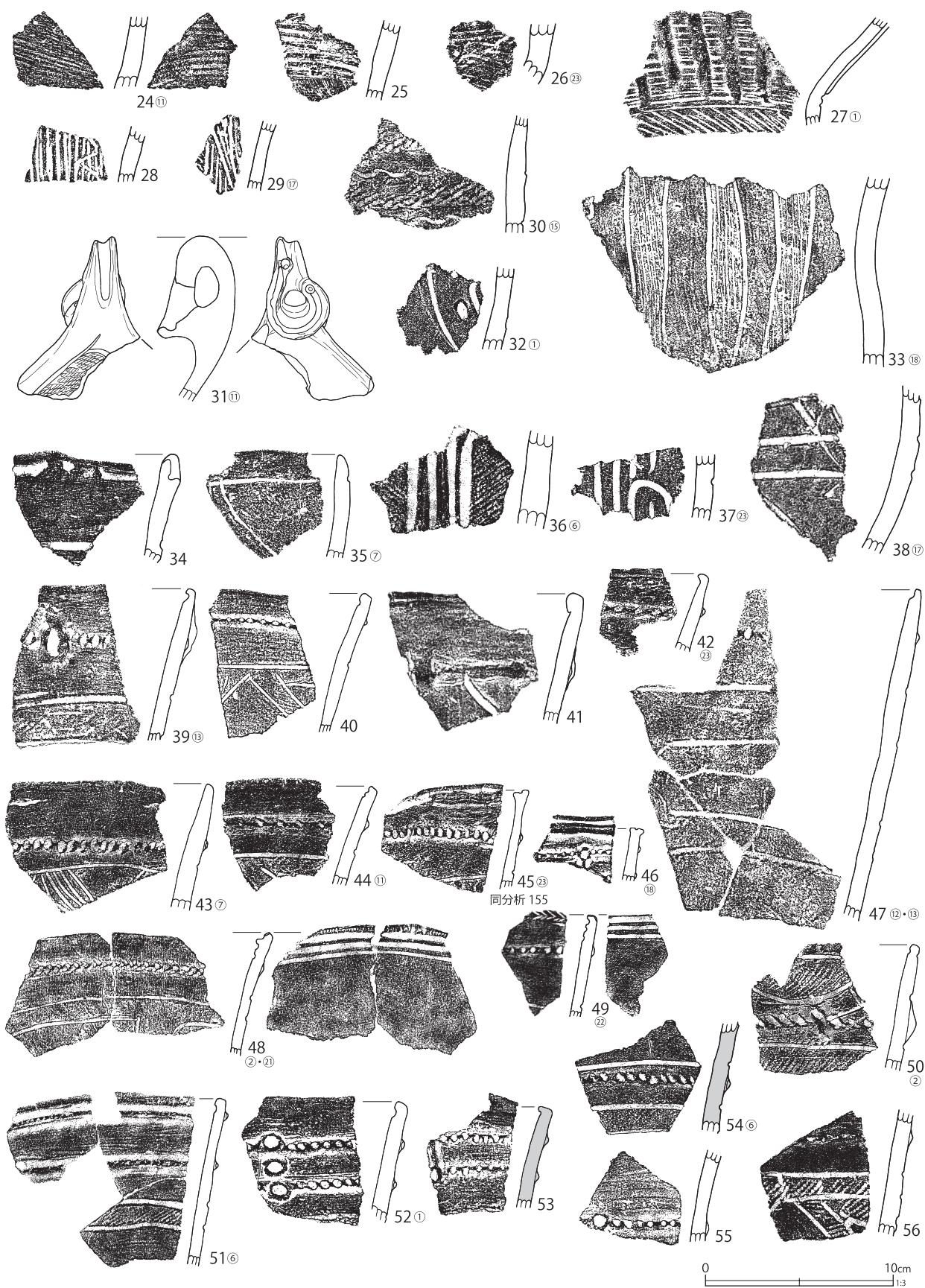
掲載土器337点、非掲載土器3141点の合計3478点が出土した。台地の裾部分が続くことから、非

掲載土器では台地上から流れ込んだ第Ⅰ群第2類の条痕文系土器群、第Ⅱ群第1類の羽状縄文系の繊維土器、第4類の諸磯c式土器、第5類の十三菩提式土器が若干出土している。しかし、大半は第Ⅵ群堀之内2式から第Ⅷ群加曾利B2式の土器群である。

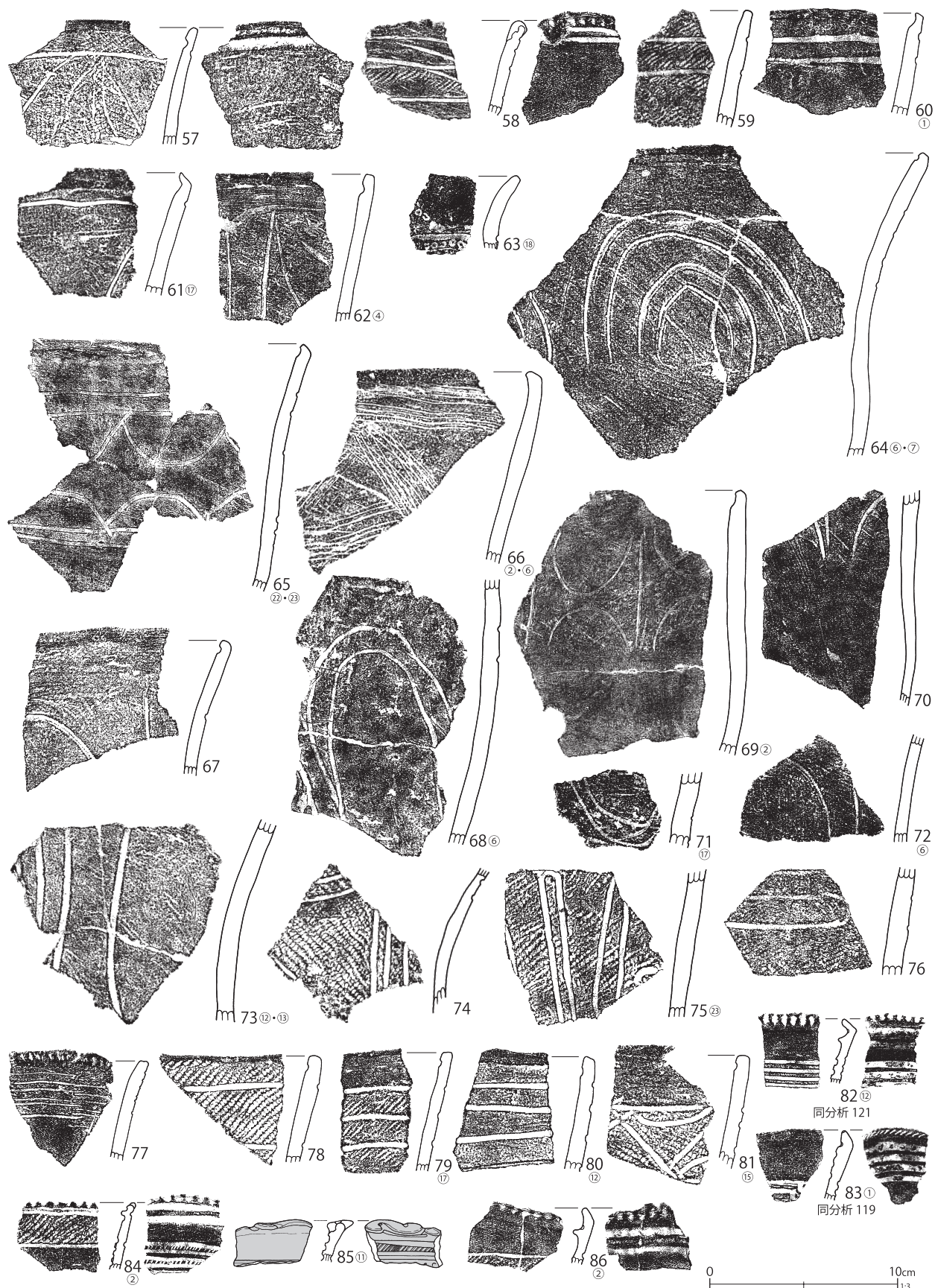
第40図24～26は第Ⅰ群第2類の条痕文系土器群で、胎土に若干の繊維が含まれる。内外面とも貝殻条痕が施文されている。

27～29は第Ⅱ群第4類の諸磯c式土器である。27は開く頸部に扁平な隆帯文が垂下されている。28、29は平行沈線を地文とする胴部破片である。

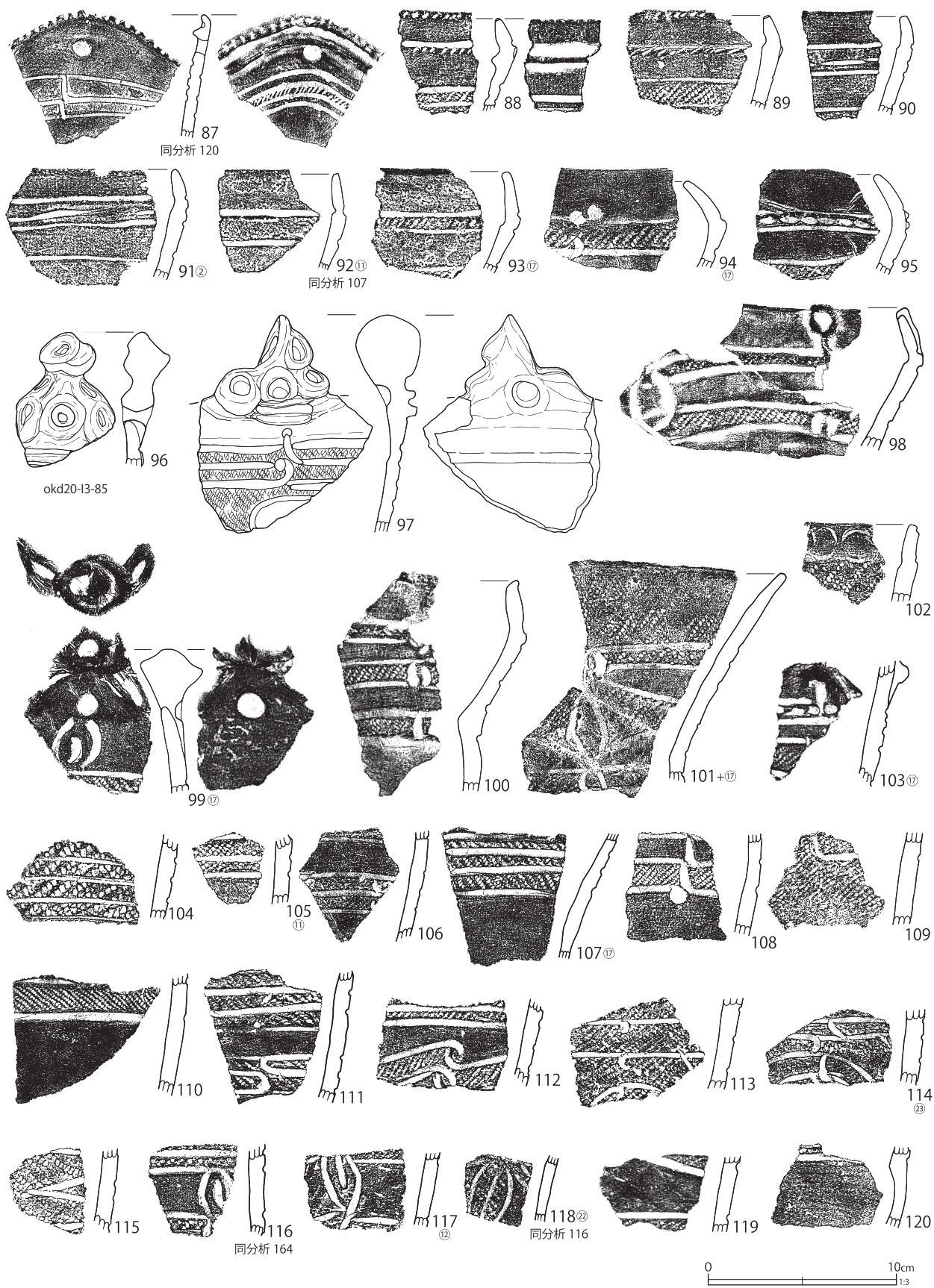
30は縄文LRの横位施文と、原体の末端の結節と思われる結節回転文が施文される。諸磯c式に伴うものと思われる。



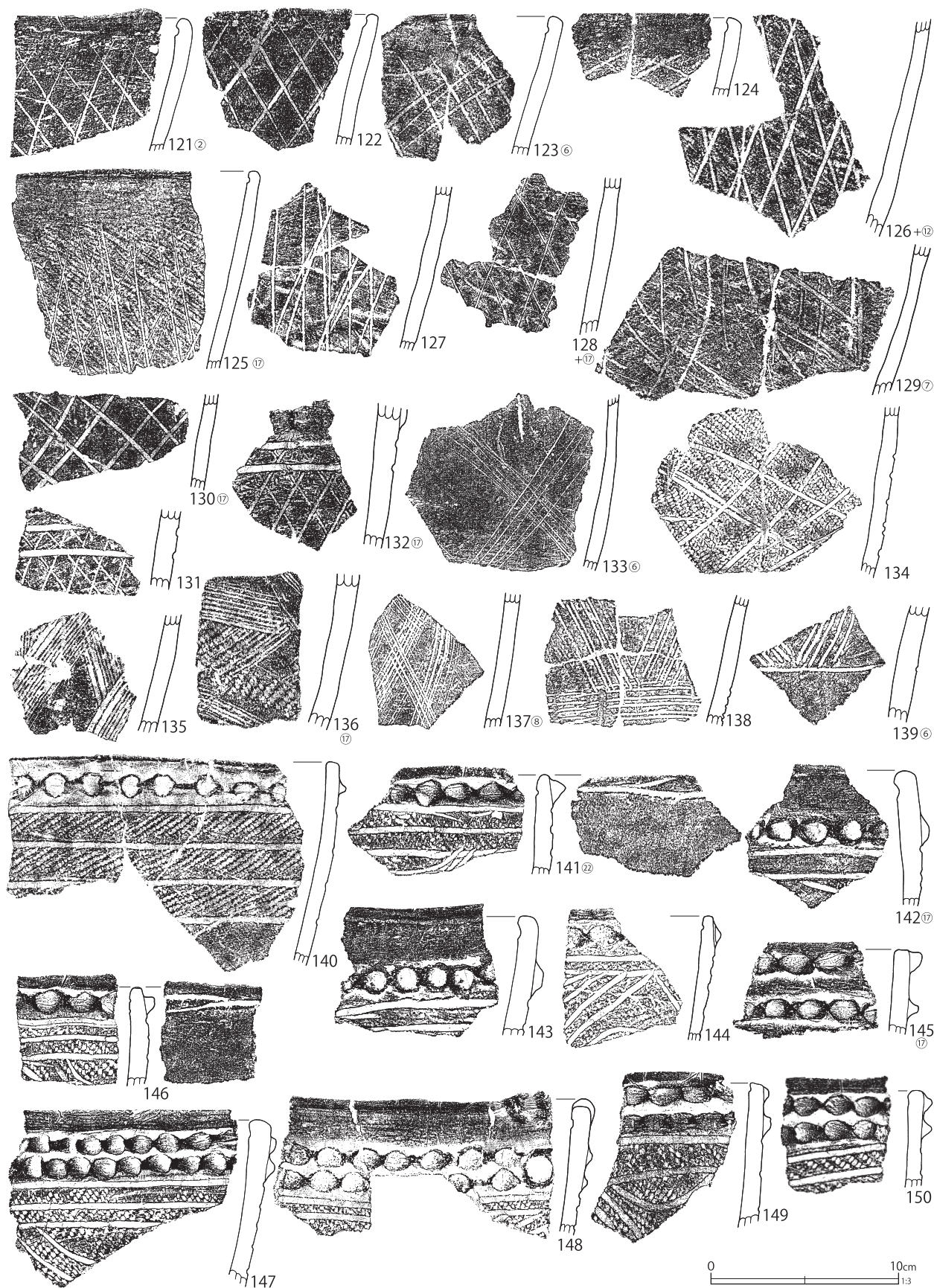
第40图 I 3区出土土器(4)



第 41 图 I 3 区出土土器 (5)



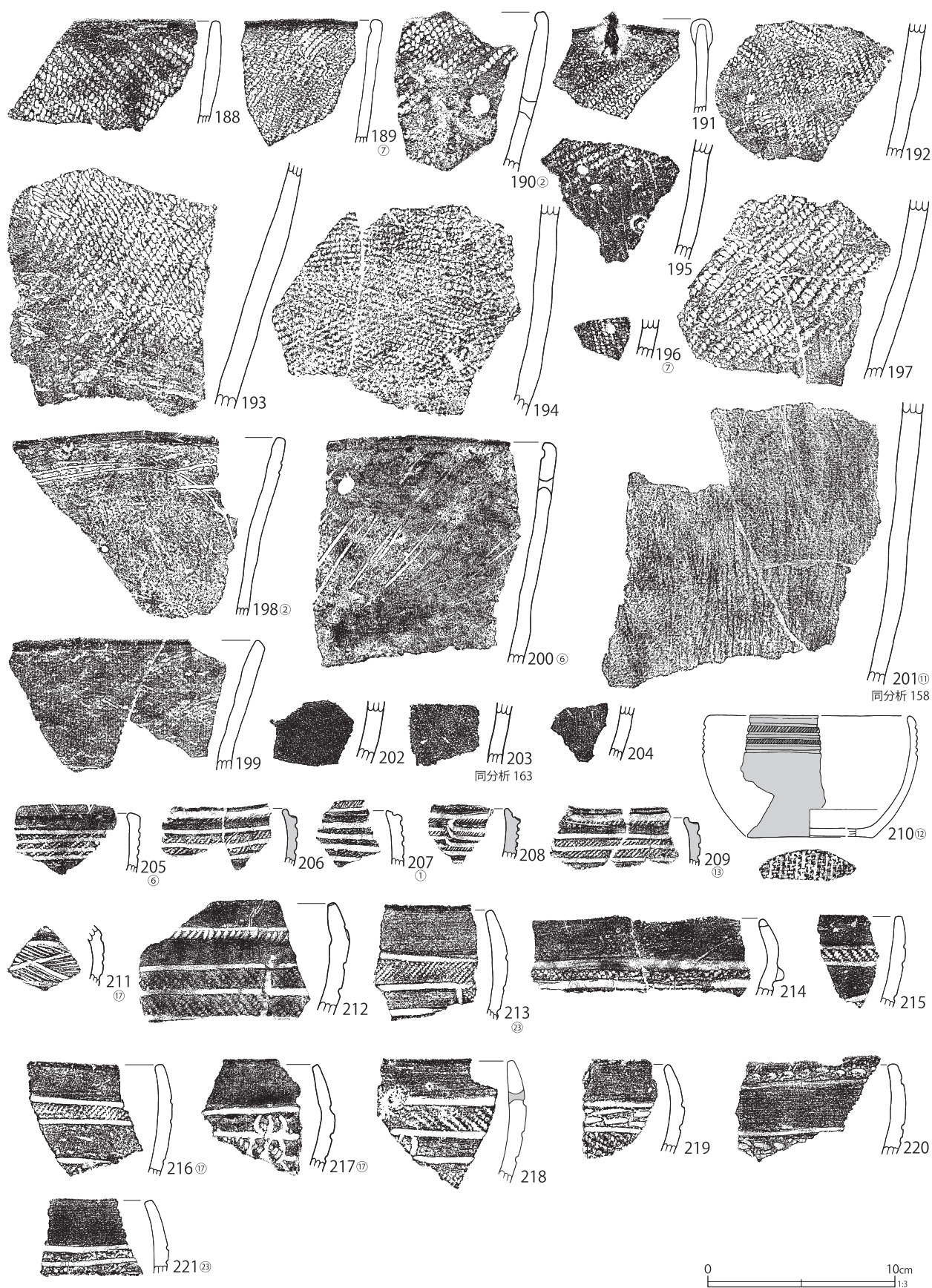
第 42 图 I 3 区出土土器 (6)



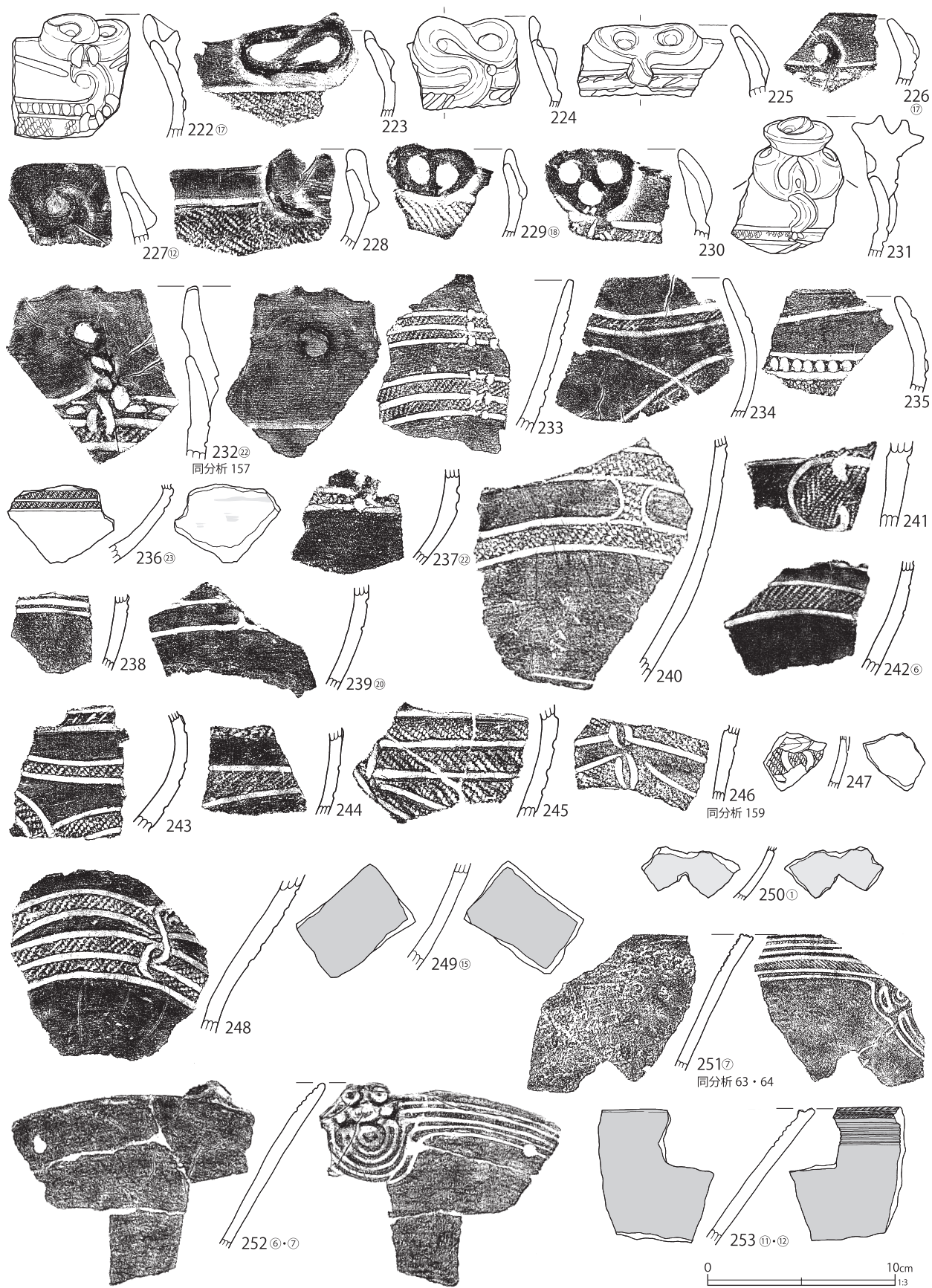
第43图 I 3区出土土器(7)



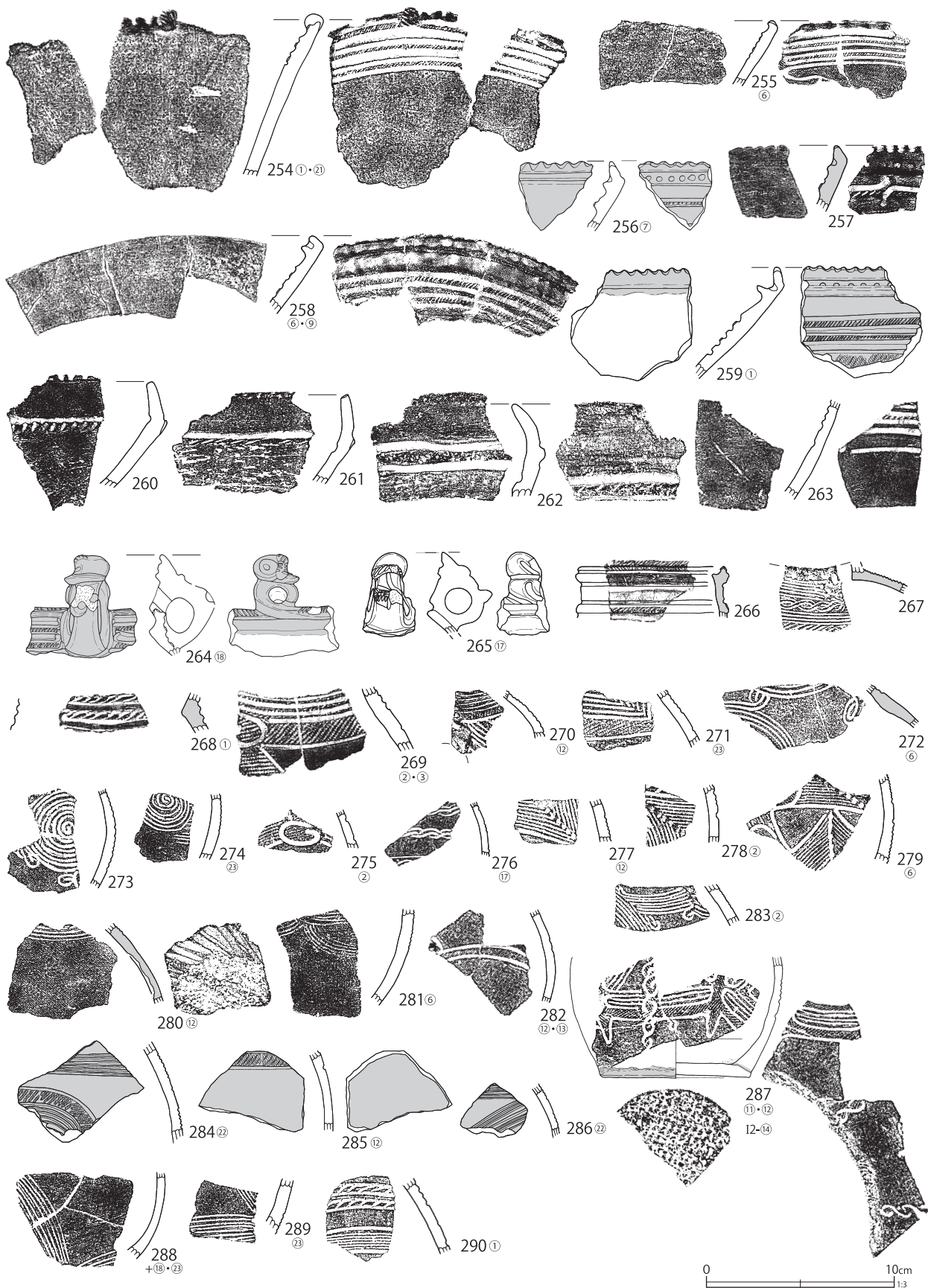
第44图 I 3区出土土器(8)



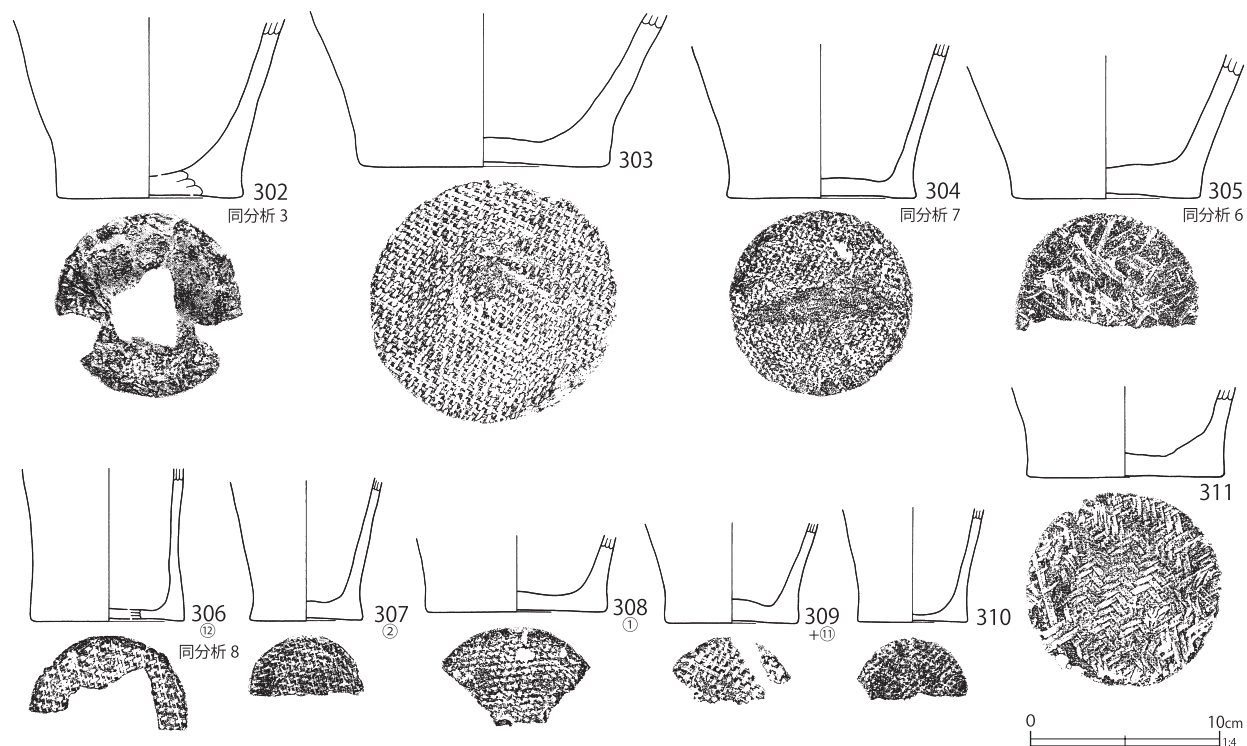
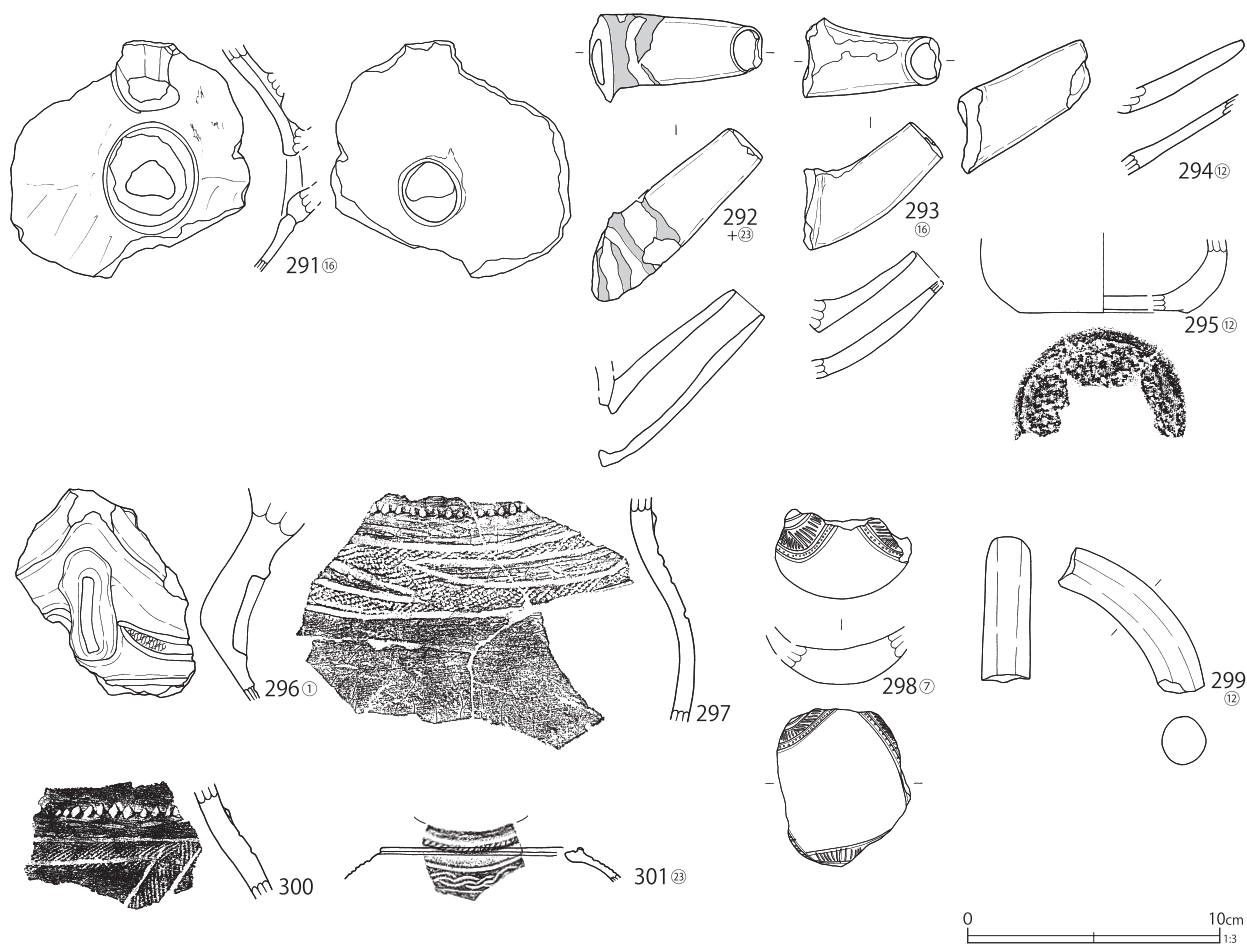
第45图 I 3区出土土器(9)



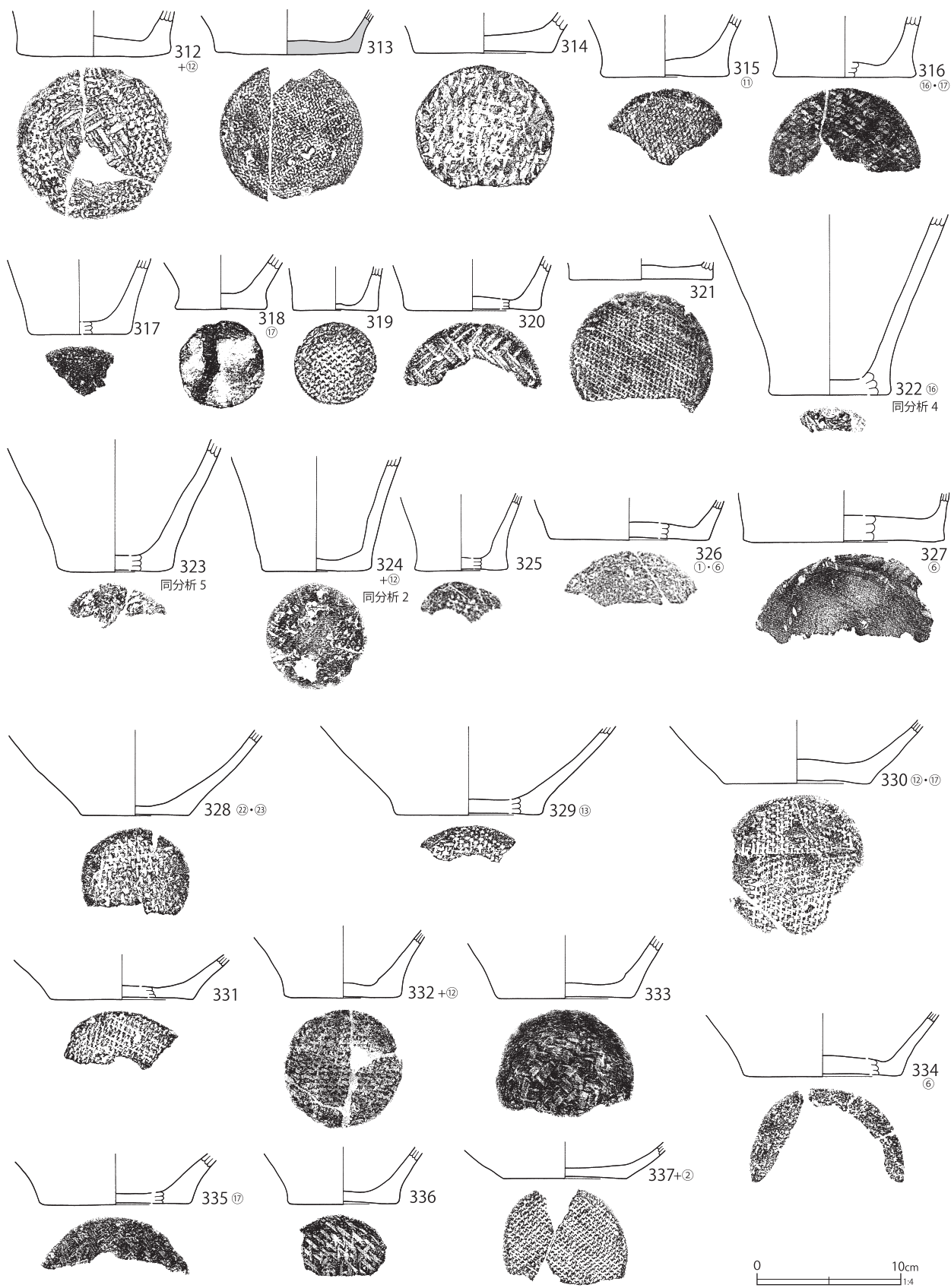
第 46 图 I 3 区出土土器 (10)



第 47 图 I 3 区出土土器 (11)



第 48 图 I 3 区出土土器 (12)



第 49 图 I 3 区出土土器 (13)

31～33は第Ⅳ群土器である。31は盲孔を繋ぐ沈線文を伴う大形把手の付く深鉢で、区画内に縄文が施文される第1類の称名寺1式末段階の土器である。32は沈線区画内に列点文が、33は条線が充填施文される第2類の称名寺2式土器である。

34～38は第Ⅴ群の堀之内1式土器である。43は頸部が沈線で区画され、口縁部には沈線が巡る。35は先細り状の口縁部が沈線で区画され、無地文上に弧状の沈線が施文されるもので、第Ⅵ群になる可能性もある。36は地文縄文上に多条沈線でモチーフが描かれるもので、37、38は無地文上に太沈線のモチーフが描かれる。

1、2、39～81は第Ⅵ群の堀之内2式土器の深鉢である。1、2、39～56は口縁部に隆帯が巡るもので、1は幅狭な文様帯が区画され、三角形を基調としたモチーフが描かれ、区画外に縄文が施文される。2は隆帯が太く、43と同様な集合沈線の鋸歯状文が描かれる。45、46は口唇上に沈線が巡る。48、49は沈線の内文が施文され、48は口唇部上に、49は口唇部上と外端面に刻みが施される。51～53は2本の隆帯が巡るもので、51は幅狭な縄文帯を持ち、52は縦位3連の円形刺突文が施文され、53は2本隆帯が縦位の隆帯で連結されている。50は隆帯より上側の口縁部に沈線の弧線文が描かれるもので、珍しい例と言えよう。57～61は口縁部に隆帯が施文されない土器群で、58は内文が施文される。

62～73は胴部で緩く括れる器形で、無地文上に沈線文を施文する西関東系の土器群である。62、67、69、73は直線と弧線文の組み合わせ、64、65、68、71～72は弧線文や曲線文の組み合わせである。74～76は地文縄文上に沈線文を施文する土器群である。

77～81は口縁部に横線文や鋸歯状文を組み合わせるもので、第Ⅵ群と第Ⅶ群の中間的な様相を持つ土器群である。

3、82～88は第Ⅶ群土器の古段階から前半に

かけての深鉢で、78～95は第Ⅶ群土器後半から第Ⅷ群にかけての深鉢である。3、82～88はいずれも内文を持ち、3、82、83、86、87は内湾する口縁部に円形刺突文が施される。

4、5、96～100は3単位突起系列の深鉢で、4は扁平な横「S」字状の貼付文が3単位の波頂部に配され、胴部の縄文帯には鉤状の区切り文と、「の」字状文の変形した区切り文が施され、器形からすると第Ⅶ群か第Ⅷ群への移行期の土器と思われる。5は突起部から連なる対弧区切り文で文様帯の上端と下端が区切られ、区切り文を起点とする弧線文と横位の入組文が施文される。96、97、99は突起部を残す破片で、97は非対称の突起に瘤状貼付文が付くもので、第Ⅶ群土器である。96、99は頭部が球状を呈する対称形の突起で、99の突起下には「の」字文から変形した「川」字状の沈線が施文されている。第Ⅶ群から第Ⅷ群への移行期の土器群と思われる。98、100は口縁波底部から連なる対弧状の区切り文で、縄文帯が区切られている。

101は胴部で括れ、口縁部が直線的に外反する第Ⅷ群の平口縁土器で、綾線状区切り文を起点にして上下対向の対弧文が描かれている。

104～120は胴部破片で。104～115は第Ⅶ群、116～120は第Ⅷ群土器である。

6～8、121～134は沈線の格子目文が描かれる第Ⅶ群土器群で、無地文上に描かれる場合が多いが、134が縄文R L地文上に格子目文が描かれる。第Ⅵ群の可能性もある。格子目文は口縁部から描かれるが、8は口縁部に横位のナデ整形を施し、無文帯を構成してから格子目文が描かれる。131、132は格子目文施文後に平行沈線が施されており、132は押圧隆帯が貼付されることから、紐線文系の土器である。

135～139は条線や多条沈線で鋸歯状文や格子目文が描かれる土器群である。第Ⅵ群土器の可能性もある。

10、140～187は紐線文系の土器群で、第Ⅶ群から第Ⅷ群にかけての深鉢である。平行沈線を施文する縄文帯のみのもの（140）、鋸歯状沈線と弧線文を組み合わせたもの（141～153）、内文を持つもの（154）、格子目文（156）、蛇行区切り文が垂下するもの（157）、条線文（158）、縦位の沈線文（159）、隆帯を挟んで沈線文を施文するもの（160）、縄文のみ施文するもの（161～172）等のバラエティがある。隆帯には1本と2本があり、154、157、159は縄文施文後に隆帯が貼付されている。173～187は胴部破片で、181は胴部区画の平行沈線帯内に、「の」字状文から変化した対弧状単位文が施文されている。

188～204は第Ⅸ群の深鉢で、191は口縁部を取り巻く縦長の貼付文が施文される。

11～16、205～250は第Ⅶ群から第Ⅷ群土器の鉢である。205～210は平行沈線帯を持つ小形の鉢で、208、209は左側へずれる区切り文が施され、210は刻文帯が重ねられている。211は斜格子状のモチーフ内に方向の異なる集合沈線が施文される。11～13、212～221は大形の鉢で、11は楕円文が区画され、212、213は幅広の縄文帯に沈線の区切り文が施される。12は大森タイプのソロバン玉形の鉢で、胴部刻文帯下に3段の異方向の綾杉状集合沈線が施文される。13は波状口縁が大きく開く鉢で、波頂部と波底部の胴部縄文帯に縦「S」字状の綾線状区切り文が施文される。217は「の」字状区切り文が連なって垂下され、218は無文部に「の」字状の変化した対弧文が施文される。218は補修孔があり、漆で塞がれている。

14は胴部が球形状の第Ⅷ群土器の鉢で、肩部の刻文帯から大形の綾線状区切り文が垂下される。

19、222～231は扁平な突起の付く口縁の内湾する鉢もしくは浅鉢で、第Ⅷ群土器と思われる。222は突起からの隆帯下に綾線状区切り文が続き、131も同様な構成で突起下に弧線文を描いている。232は山形の突起が付き、突起下に綾線

状区切り文が施文される。233は口縁の開く鉢で、2帯の縄文帯の沈線が短い対沈線状の刺突文で区切られている。第Ⅶ群土器である。234、235は口縁部が大きく内湾する鉢で、235の口縁部には沈線の弧線文が施される。236～250は鉢の胴部破片で、236～242は第Ⅶ群、243～248は第Ⅷ群土器である。248は波状の口縁部が開く器形と思われる。236は赤彩が施され、249、250は漆が塗られている。247は器壁の剥落部に木葉痕が残されている。

15は無文の鉢で、ケズリ状の調整が前面に施されている。

16は舟形の鉢で、底部を無文とし、弧状の縄文帯で船縁が飾られる。

17、18、20、252～263は第Ⅵ群から第Ⅷ群土器の浅鉢である。17、251～255は直行口縁部が開く器形の内文を持つ浅鉢で、17、251、252は口唇部周りに沈線文が施文される第Ⅵ群土器である。253～255は口唇部直下に挟り状の沈線が施文される第Ⅶ群土器である。256～259は口縁部が短く内折し、いずれも円形刺突文列が施文される。18、20、260～262は無文の口縁部が緩く内湾する浅鉢で、肩部には刻みが施される。18は小波状口縁を呈し、20は左右対称形の3単位突起が付く浅鉢で、以上は第Ⅶ群土器である。

21～23、264～297、300、301は第Ⅵ群から第Ⅶ群にかけての注口土器で、21～23、269、271、280～286、288、289、296、297、300は第Ⅵ群と思われる。287は底部の剥落を漆で補修している。292の注口部は4ヶ所に補修を行っている。

298は、全体形は不明であるが厚い丸底の球形状で、刺突文を施す区画沈線内に、刻状の細沈線が充填施文されている。299は注口土器の吊手と思われる湾曲する棒状土製品である。

302～337は底部で、大半は深鉢の底部と思われるが、313、314、318、326、328～336は鉢や浅鉢の底部の可能性が高い。337は注口土器の底部である。

J 2 区の土器群（第50、51、54、55図）

J 2 区は J 3 区から続く狭い調査区で、掲載土器38点、非掲載土器166点の合計204点が出土した。

第55図12は第Ⅱ群第5類の十三菩提式土器で、本遺跡の調査可能範囲で確認された最下層からの出土遺物である。条線の加飾を施す隆帯が渦巻文を構成し、地文の条線の鋸歯状文間に三角印刻が施されている。23は第Ⅲ群の勝坂式土器で縦走する多条縄文地上にペン先状工具の三角押文がジグザグに施文される。

14は第Ⅵ群、1、15は第Ⅶ群、16～20は第Ⅷ群の精製深鉢である。14は口縁部に刻みを施す隆帯が施文され、15は間隔の狭い平行沈線を施文する縄文帯が施文される。1は沈線間隔の広い

縄文帯が構成され、蛇行沈線が区切り文として垂下する。16は3単位突起付土器の突起で、2本の沈線が垂下する。17、18は口縁が直線的に開く深鉢で、沈線の弧線文が施される。19は口縁部が内折する深鉢で、肩部の沈線区画帯に対弧状区切り文が施される。20は波状口縁に沿って2列の刺突文帯が施文され、波頂部から括弧状の区切り文が連なって垂下施文される。

23～25は第Ⅶ群～第Ⅷ群にかけての紐線文系土器群で、23、24は同一個体である。口縁部に2本の押圧隆帯を施し、地文縄文上の胴部に2本沈線で鋸歯状文とその間に弧線文が施文される。

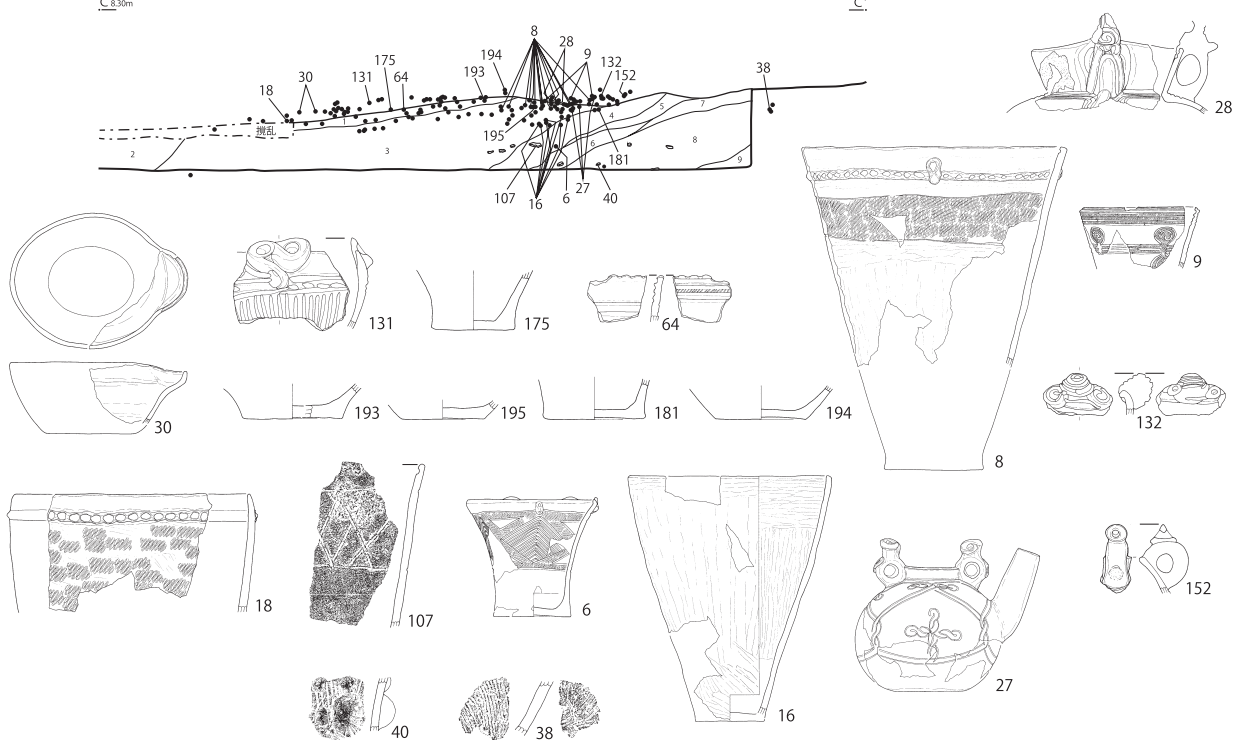
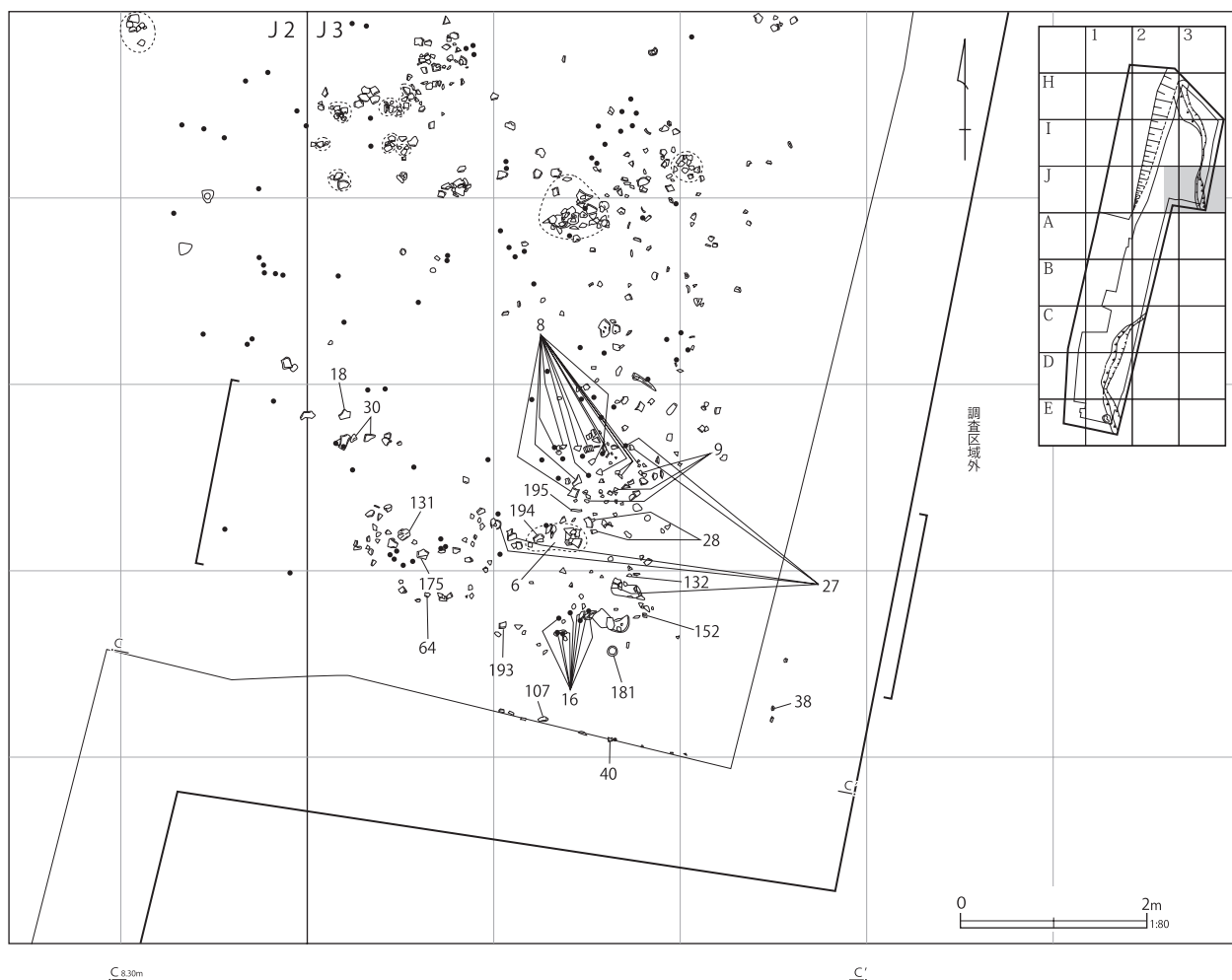
1～7、26～32は第Ⅶ群から第Ⅷ群にかけての鉢である。26は大きく内湾する器形で、間隔の狭い沈線帯が設けられている。沈線間は縄文施

第7表 J 2 区非掲載土器分類表

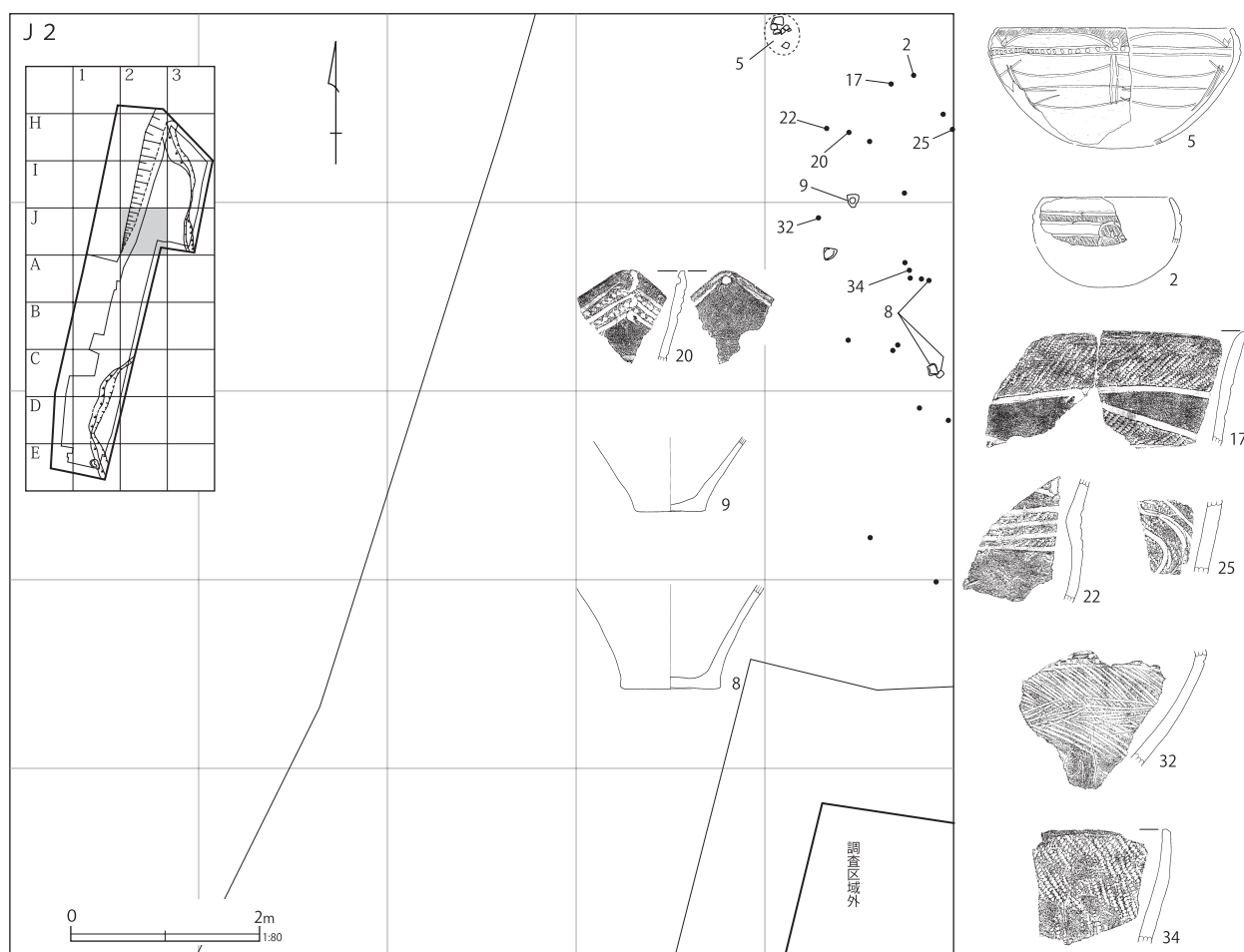
J 2						
分類	時期	型式	口縁部	胴部	底部	小計
Ⅰ群	早期	撚糸文				0
		条痕文				0
小計			0	0	0	0
Ⅱ群	前期	羽状縄文				0
		諸磯 a				0
		諸磯 b / 浮島				0
		諸磯 c 式				0
		十三菩提				0
小計			0	0	0	0
Ⅲ群	中期	五領ヶ台 2				0
		貉沢 / 勝坂 I		1		1
		加曽利 E Ⅲ				0
		加曽利 E Ⅳ				0
小計			0	1	0	1
Ⅳ群	後期	称名寺 1				0
		称名寺 2				0
小計			0	0	0	0
Ⅴ群	後期	堀之内 1		1		1
Ⅵ群		堀之内 2	1	2		3
小計			1	3	0	4
Ⅶ群	後期	加曽利 B 1	10	19		29
Ⅷ群		加曽利 B 2	1	8		9
小計			11	27	0	38
Ⅸ群	後期	縄文のみ		27		27
		無文		84	12	96
小計			0	111	12	123
合計			12	142	12	166

第8表 J 3 区非掲載土器分類表

J 3 区						
分類	時期	型式	口縁部	胴部	底部	小計
Ⅰ群	早期	撚糸文				0
		条痕文		8		8
小計			0	8	0	8
Ⅱ群	前期	羽状縄文				0
		諸磯 a				0
		諸磯 b / 浮島				0
		諸磯 c				0
		十三菩提	3			3
小計			3	0	0	3
Ⅲ群	中期	五領ヶ台 2				0
		貉沢 / 勝坂 I				0
		加曽利 E Ⅲ		1		1
		加曽利 E Ⅳ				0
小計			0	1	0	1
Ⅳ群	後期	称名寺 1				0
		称名寺 2		6		6
小計			0	6	0	6
Ⅴ群	後期	堀之内 1		11		11
Ⅵ群		堀之内 2	34	245		279
小計			34	256	0	290
Ⅶ群	後期	加曽利 B 1	32	113		145
Ⅷ群		加曽利 B 2	18	35		53
小計			50	148	0	198
Ⅸ群	後期	縄文のみ	6	223	2	231
		無文	18	619	82	719
小計			24	842	84	950
合計			111	1261	84	1456



第 50 図 J 2・J 3 区土器分布図



第 51 図 J 2 区土器分布図

文で、漆が塗られている。2、3はボウル状の鉢で、2縄文帯間に「の」字状単位文が施文される。3は肩部の刻文帯下を無文部とし、以下2帯の縄文帯が構成されるが、それぞれに円形の刺突文が連続垂下されている。4は底部の張り出す鉢と思われるが、方形区画が施される。以上は第Ⅶ群土器である。

5、27はボウル状の器形で、口縁部の円形刺突文を起点とする弧線文を施し、5は円形刺突文下の胴部に並行沈線が垂下され、これを起点として沈線の水平区画と弧線文が施文される。28、30は横位の沈線帯が施文される胴部破片で、28は縦位の、30は横位の綾線状区切り文が施文され。

6、7、32は大森系のソロバン玉形の鉢で、

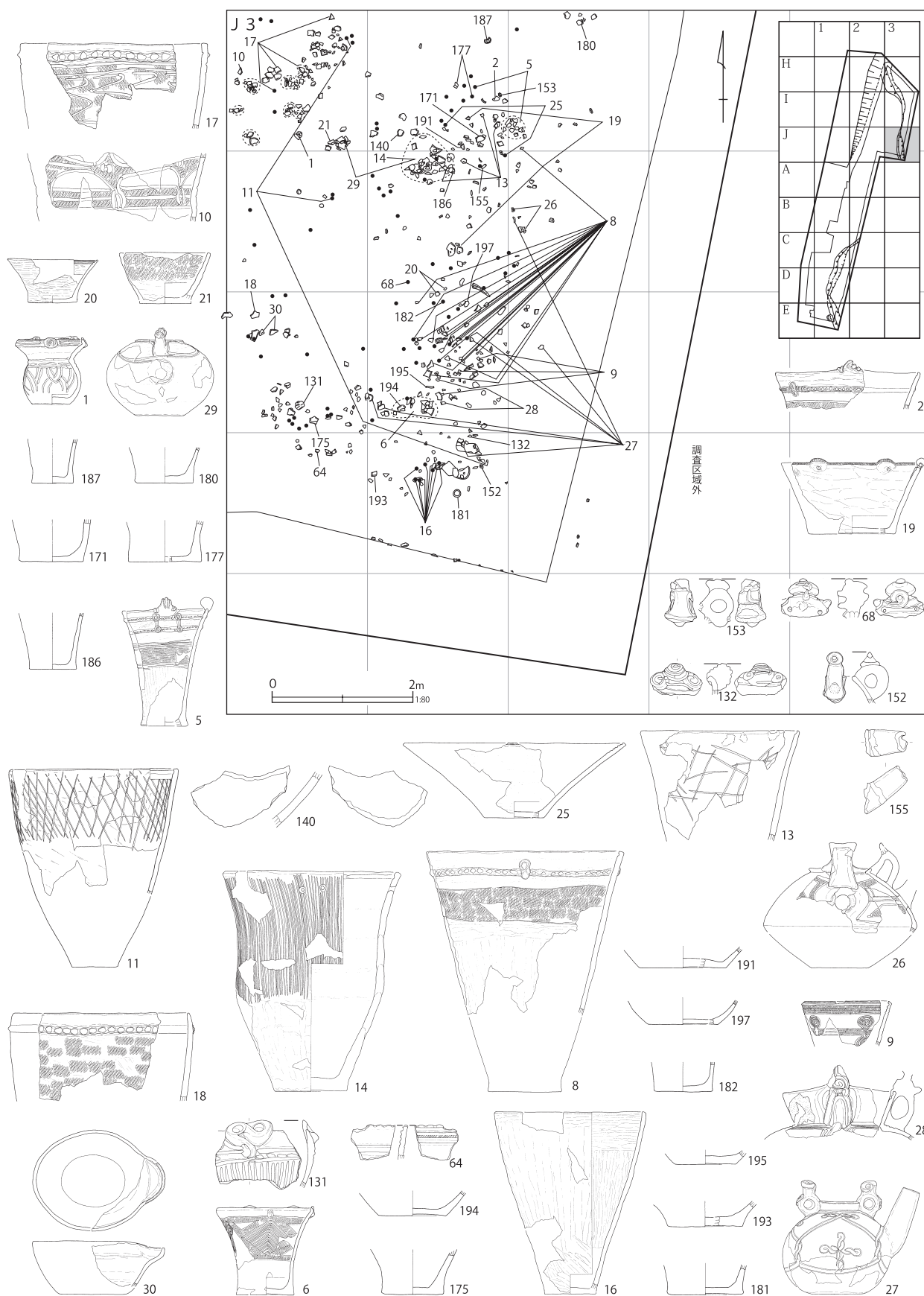
6は上半部に沈線の球抱き入組文と下半部に2段の矢羽状沈線文が、7は円形刺突文を起点とする弧線文が施文される。32は胴部羽状沈線の中央部分が横位に施文され、区画線化している。

29は3単位突起浅鉢の突起で、対称形の突起下に4本の沈線が垂下されている。31は内面に赤彩が施されている。

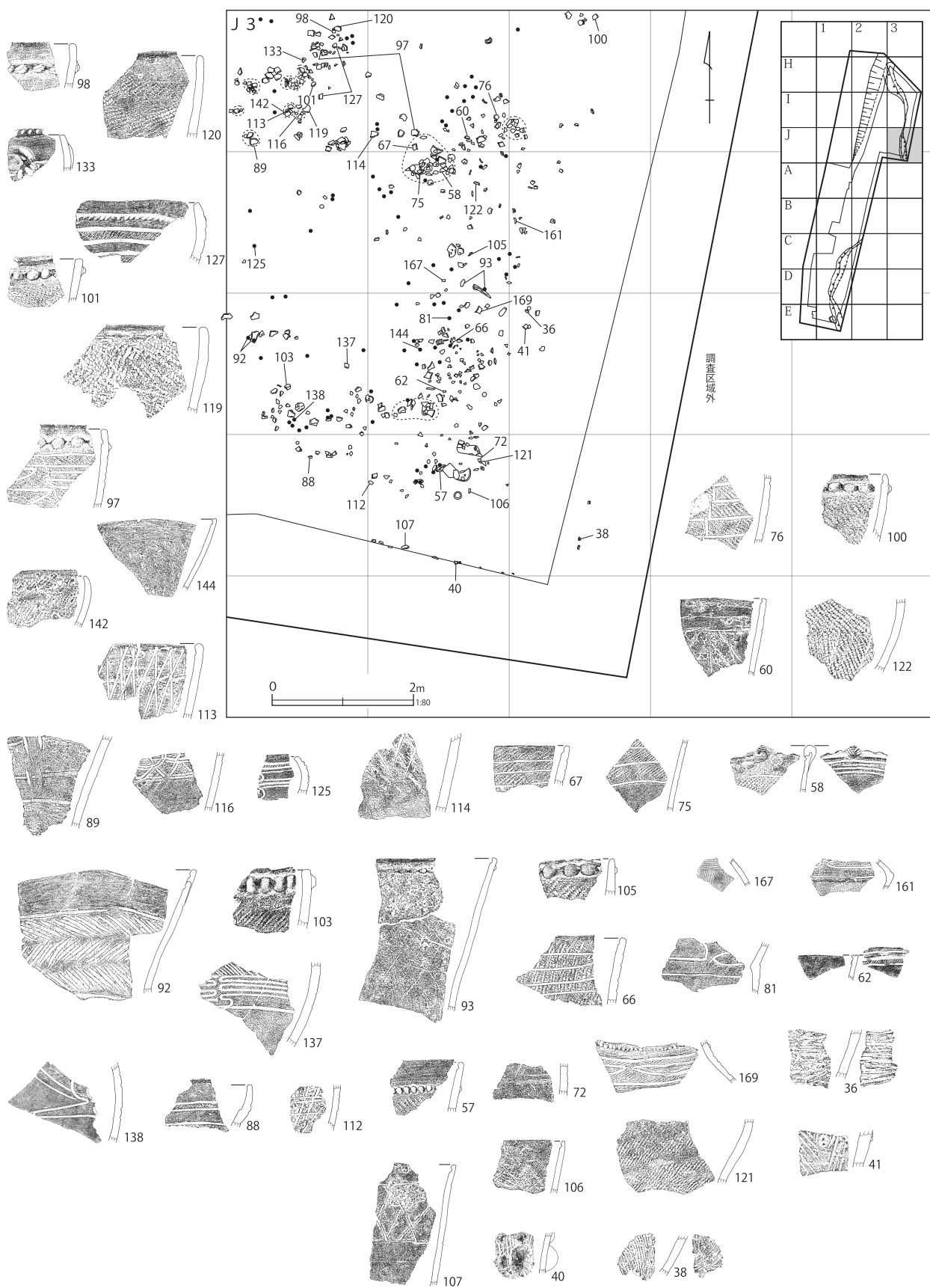
35は無文の口縁部が内折する浅鉢で、第Ⅷ群土器と思われる。

33は注口土器の胴部破片で、集合沈線で「の」字状単文を繋ぐモチーフが構成され、一部に矢羽状沈線が充填される。

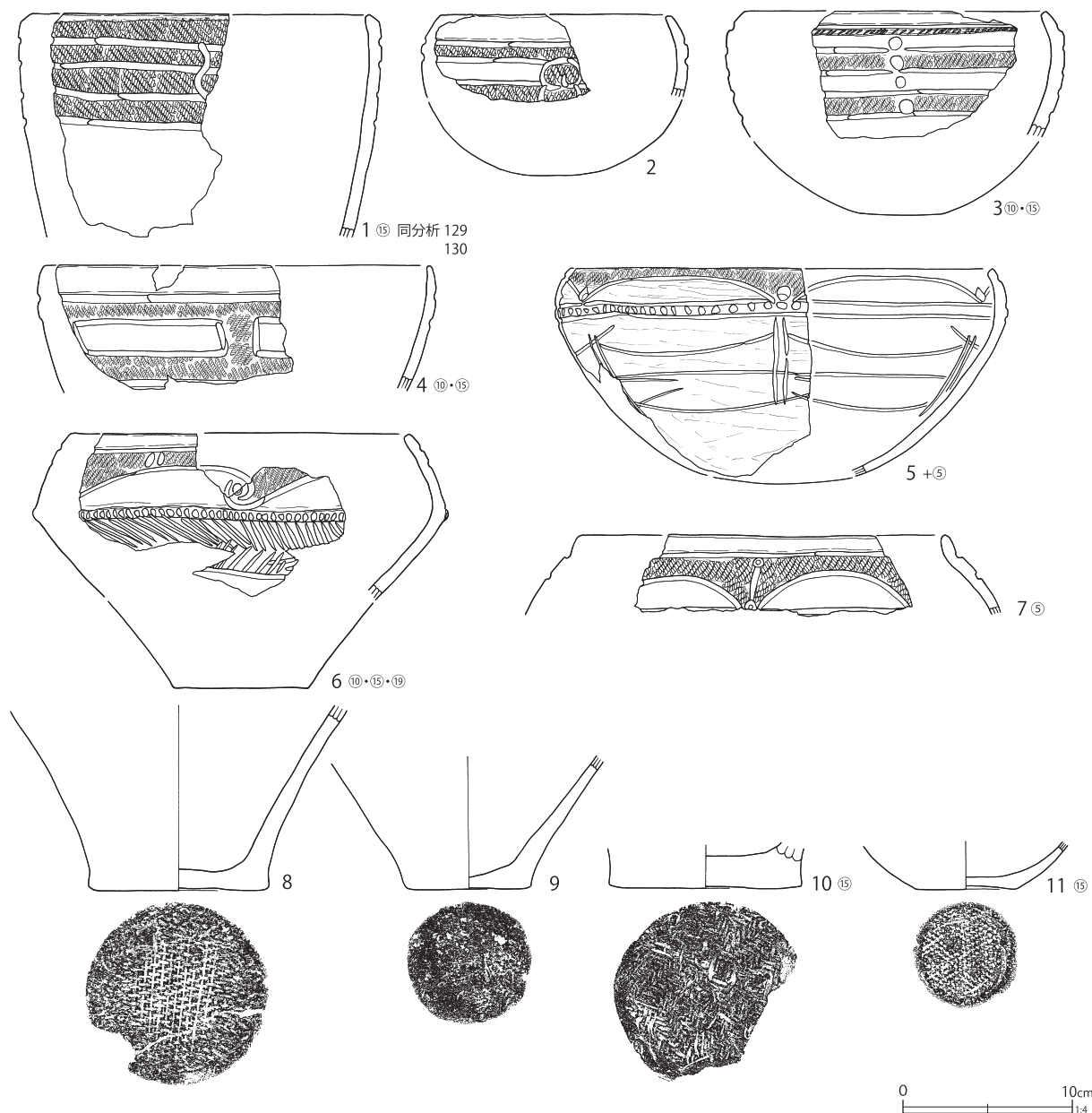
34、36～38は第Ⅸ群土器で、34、36、37は縄文が施文され、36の口縁部裏面には沈線が巡る。38は無文土器である。



第 52 図 J 3 区土器分布図 (1)



第 53 図 J 3 区土器分布図 (2)



第54図 J2区出土土器(1)

J3区の土器群(第50、52、53、56～65図)

J3区は祭祀跡が存在するグリッドであり、台地の裾部が続くことから、早期から後期の土器が出土している。掲載土器197点、非掲載土器1456点の合計1653点が出土した。

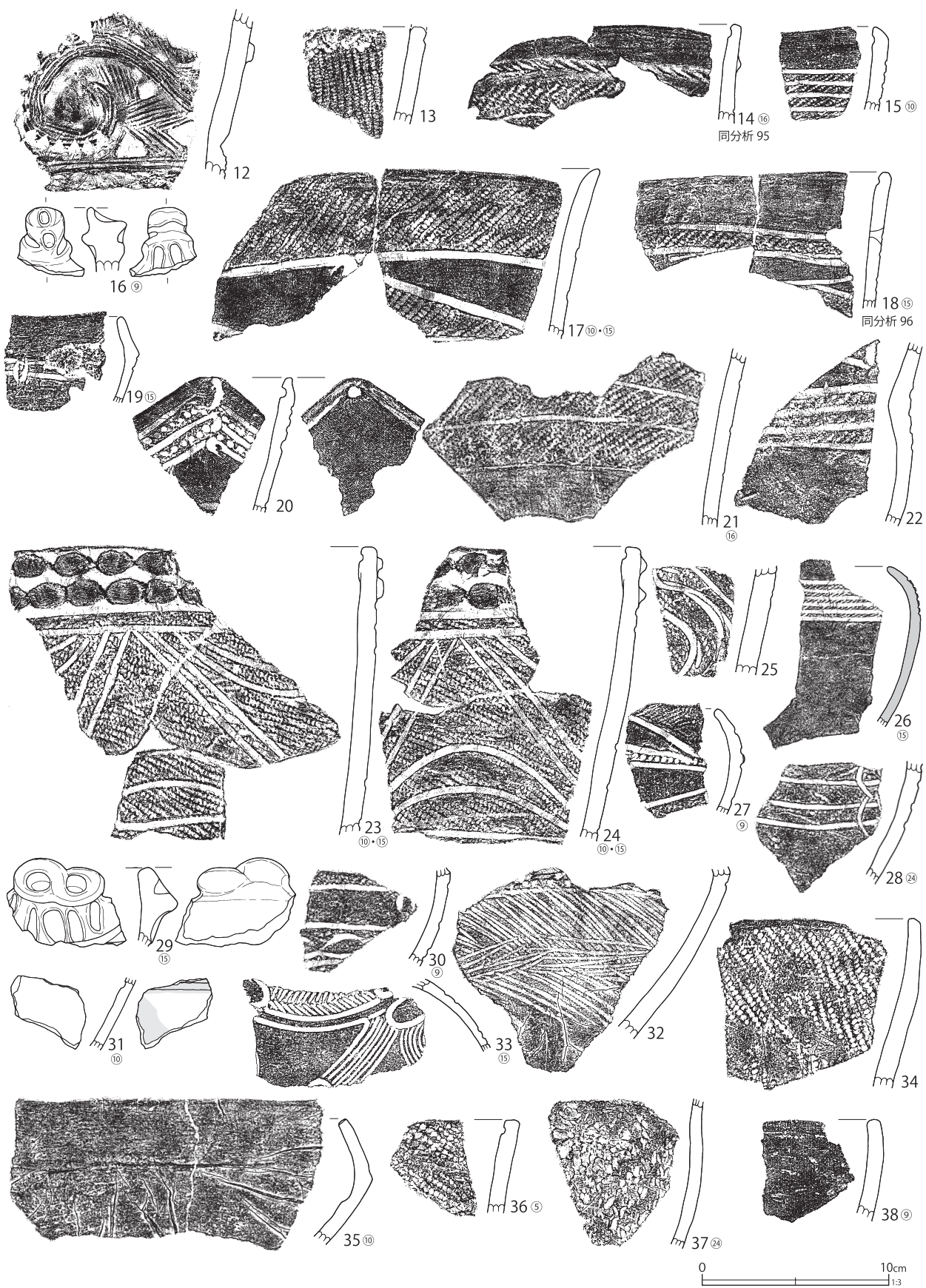
第60図32～38は第Ⅰ群第2類の条痕文系土器群で、32は縦位の区画沈線が垂下する鵜ヶ島台式土器、33は2列の列点文が施文される茅山下層式土器である。

39～45は条線文や貼付文が施される第Ⅱ群4類の諸磯c式土器である。39は横位の平行沈線が施文されることから、第3類の可能性もある。

46は第5類の十三菩提式土器で、羽状縄文が施文される破片の下端部に三角印刻が施される。

134は第Ⅲ群第3類加曾利EⅢ式土器の浅鉢と思われ、口縁部の沈線下に条線文が垂下される。

47～49は第Ⅳ群第2類の称名寺2式土器である。47、48は波状口縁で、48は大きな把手が付



第55图 J2区出土土器(2)

くものと思われる。49は沈線文のみ施文される胴部破片である。

1は胴部が括れ、把手の付く第Ⅴ群の堀之内1式土器である。小形の深鉢であるが、把手を欠損する。屈曲して立ち上がる口縁部には、沈線の楕円区画文が施される。胴部には2本沈線のモチーフが施文される。

2～8、50～68は第Ⅵ群のバケツ形の深鉢で、2、4、5、7、8、50～57、59は口縁部に刻みが施される隆帯が巡る。3は器面全体に大柄な三角形文が多条沈線で描かれ、Ⅵ群の中でもやや古相を持つ。2、5、58、61は3単位突起の先駆けとなる突起が付き、5は突起を挟んでその下位の2本隆帯を縦位の2本隆帯で連結し、4は口唇部と隆帯間に2本隆帯を垂下させて連結させている。6は「8」字状貼付文が1カ所に施文されて正面感を作り、背面の口縁部には低い2山の突起を付けて、3単位口縁が構成されている。胴部には菱形と三角形を組み合わせたモチーフが施文され、菱形区画内には集合沈線が充填施文される。7、51、52も菱形文が連結する構成で、61は上下の区画線に沿って弧線文が連結するモチーフが描かれる。2、5、8、53、56～58は幅狭な縄文帯のみが施文されるもので、突起や58のように内文を持つものがある。59、62～65は内文を持つ深鉢で、まだ口縁部周りに挟り状の沈線は施文されていない。65は集合鋸歯状文が施文される。66、67は地文縄文上に横位沈線のみ施文されるもので、68は3単位突起深鉢の突起と思われる。

69～78は深鉢の胴部破片で、69～73は第Ⅵ群、74～78は第Ⅶ群土器と思われる。

9は小形のバケツ形土器で、短く内折する口縁部内面に挟り状の沈線が巡らされる。口縁部と胴部に縄文帯が巡り、胴部の縄文帯を挟んで上下に対向する「の」字状文が施文される。全面に漆が塗られている。

79～85は胴部で括れる深鉢で、沈線でモチーフが描かれる西関東系の土器群である。79は第Ⅴ群、80～85は第Ⅵ群土器である。

86～92は胴部で括れる第Ⅶ群、第Ⅷ群土器の深鉢で、86は非対称の突起が付く第Ⅶ群土器である。87、88は内湾する口縁部が開く器形で、肩部が縄文帯で区画されている。92は口縁部が直線的に開く器形で、上半部に3段の矢羽状集合沈線が施文される。10、89～91は第Ⅷ群の胴部破片で、10は文様帯下端を区画する縄文帯内に川の字や対弧状の区切り文が施文され、それを起点として弧線の区画文が施されている。

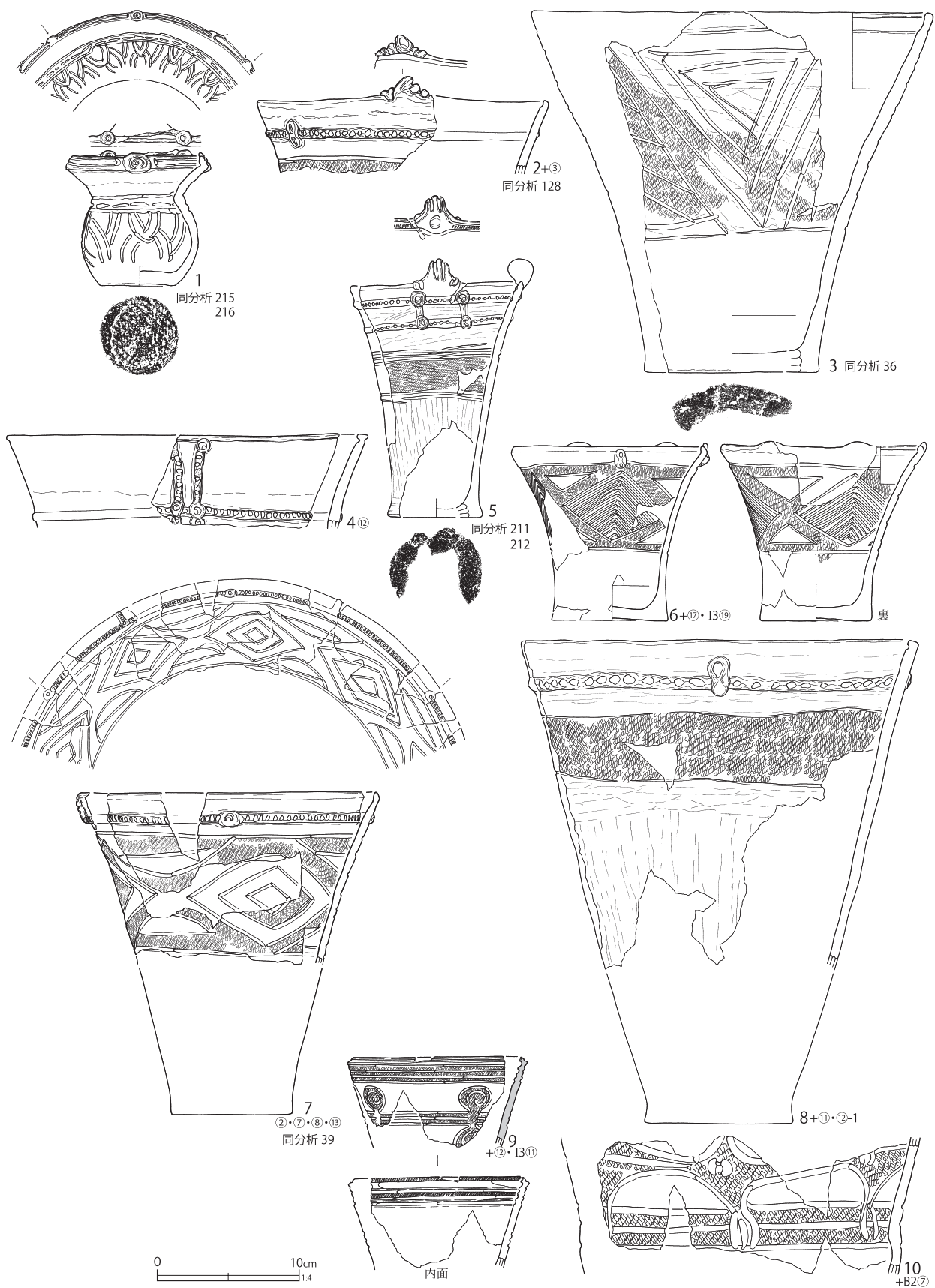
14、15、117は胴部がやや括れる深鉢で、条線文を施文する第Ⅵ群土器である。

11～13、106～116はバケツ形の深鉢で、格子目文が施文される第Ⅶ群土器である。11、113は口唇部下から幅狭な格子目文を、107～109は沈線で文様帯を区画して格子目文を施文するもので、12は口縁部に区画状のナデ整形が施されて、また106、110は無文部を設けて幅広の格子目文が施文されている。13は乱雑な格子目文が描かれる。

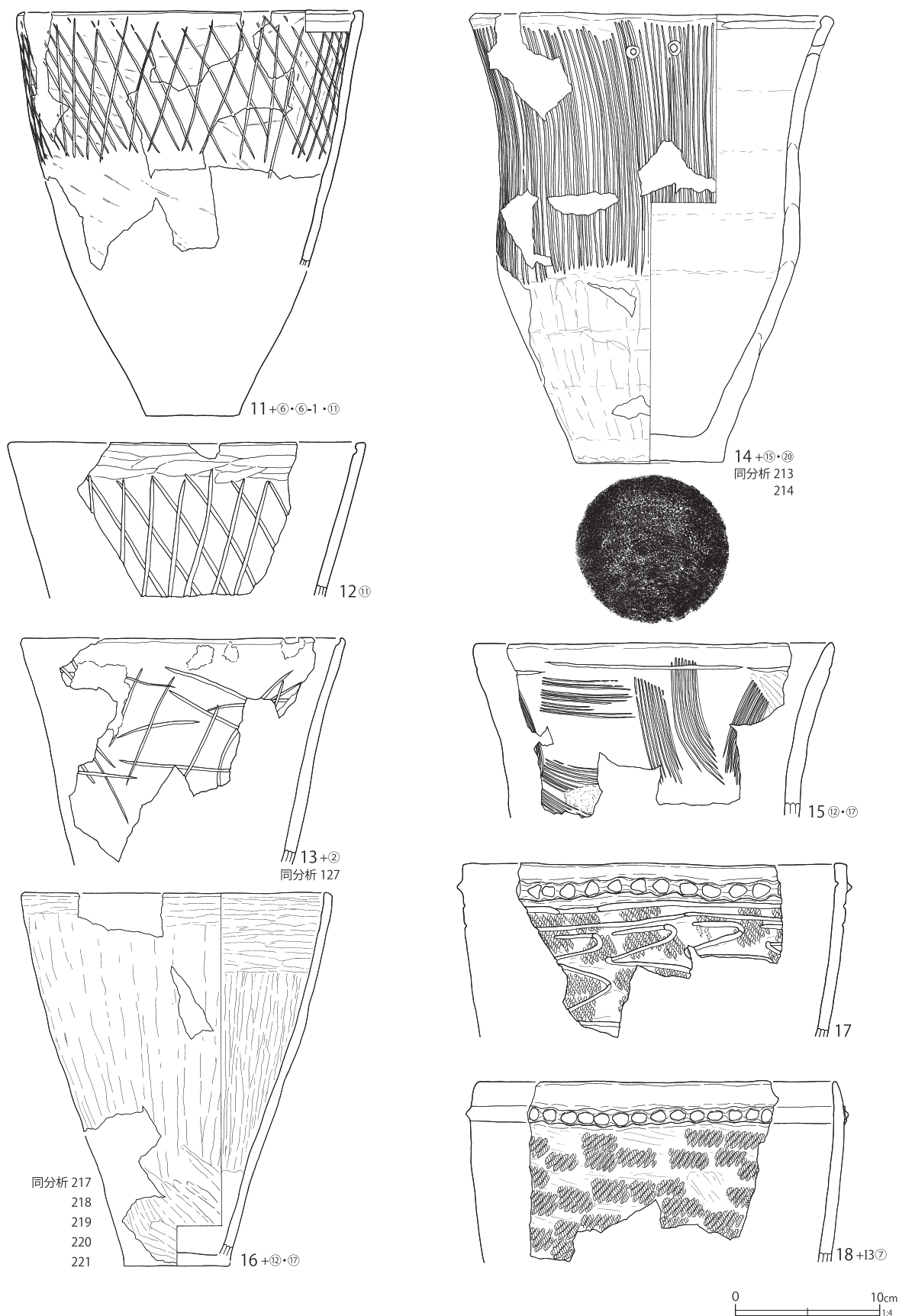
17、18、93～105は紐線文系土器で、17、97は縦位のジグザグ文が、93、94は浅い格子目文が、98は格子目文が描かれ第Ⅶ群土器と思われる。95、96は地文縄文上に鋸歯状と弧線文が描かれ、条線文が施文される99と共に第Ⅷ群土器と思われる。紐線文土器は、口縁部地文縄文上に沈線の巡るものが古相を持つ。

119～124は第Ⅸ群土器で、124の底部には木葉痕が残っている。

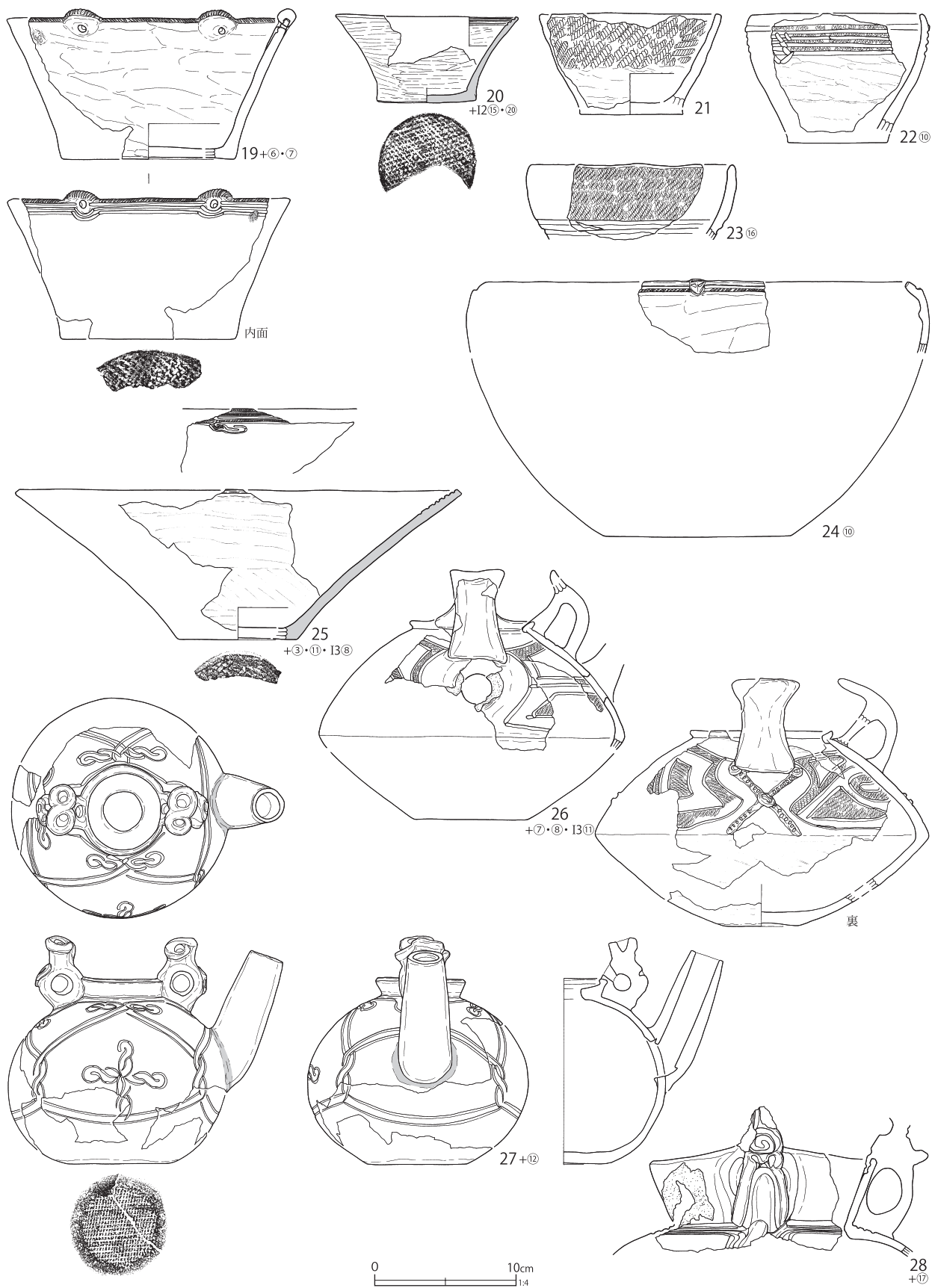
19～24、125～147は第Ⅵ群から第Ⅷ群土器の鉢である。19～21は口縁部が開く鉢で、19は刻みを施す突起と内文を持つ。補修孔があり、漆で繊維状物質が詰められている。20は内文が、21は縄文が施される鉢で、129は口唇部上に沈線が施文される。132は内面に円形貼付文の付く



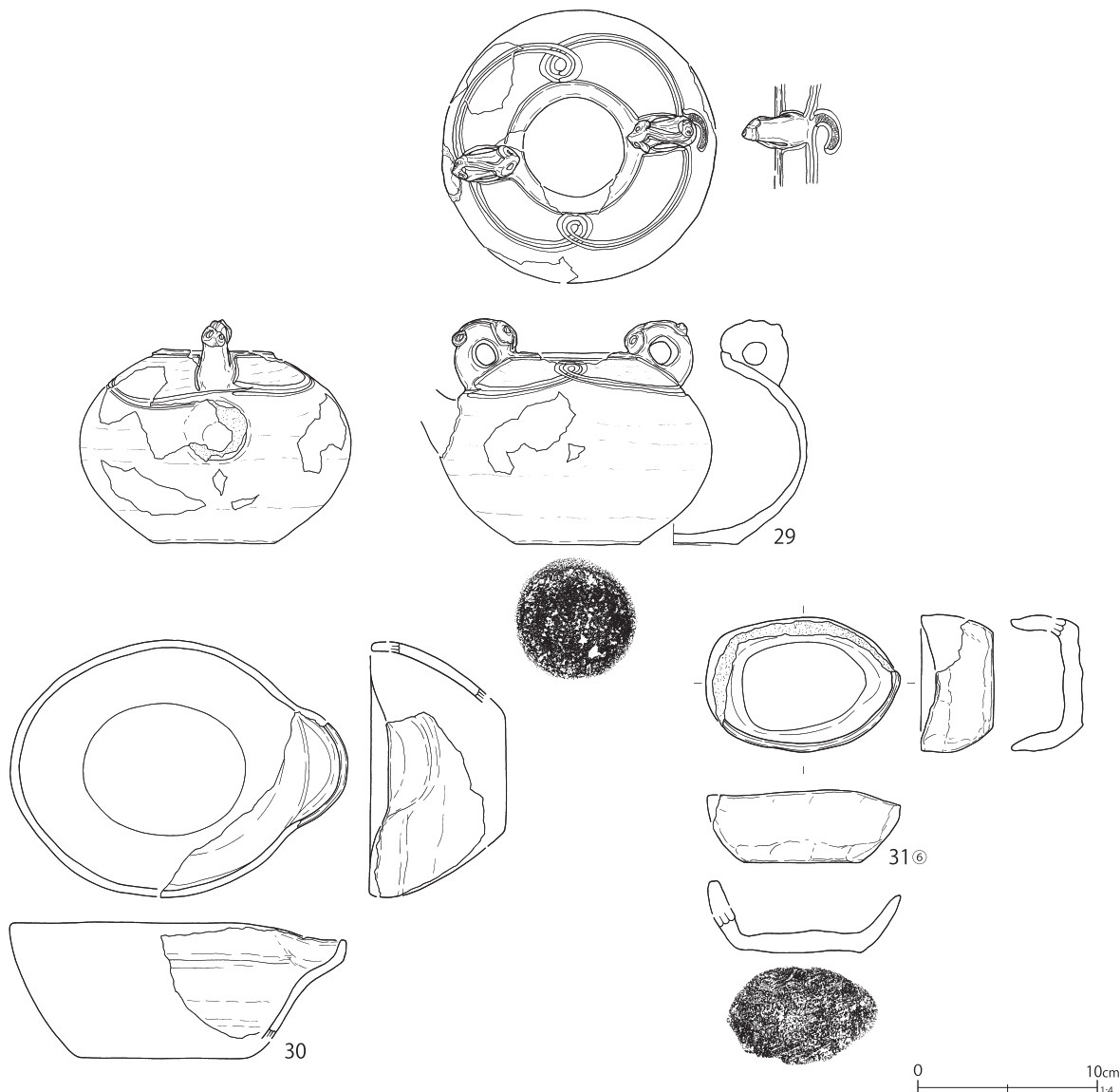
第56图 J3区出土土器(1)



第 57 图 J 3 区出土土器 (2)



第58図 J3区出土土器(3)



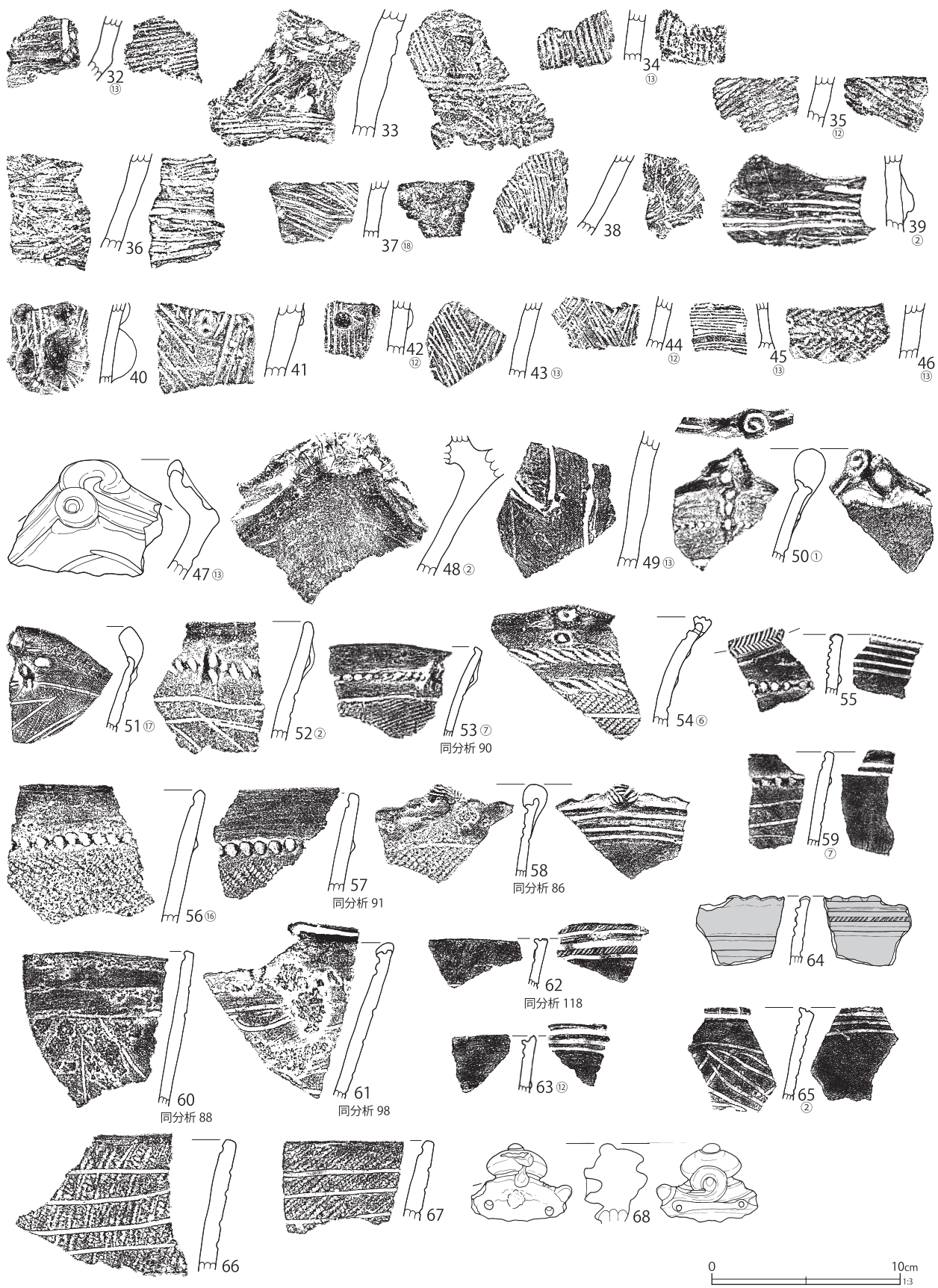
第59図 J3区出土土器(4)

突起で、沈線の渦巻文が施文されている。19～21、129、132は第Ⅵ群土器である。22、23、125～128は口縁が内湾する鉢で、22の縄文帯下端の区画沈線が山形に突出しており、平行沈線間には右にずれる区切り文が施こされる。125、126は横帯の無文部に「の」字状文が施文され、126は縄文が充填される。127は肩部に刻みが施され、128は横位沈線のみ施文される。第Ⅶ群土器である。130は縄文帯に対弧状の区切り文が見られ、131は扁平な突起が付き、縦位沈線が施文される。133は口縁部の貼付文下に対弧状の区切り文が施文される。24は破片からの復元であるが、

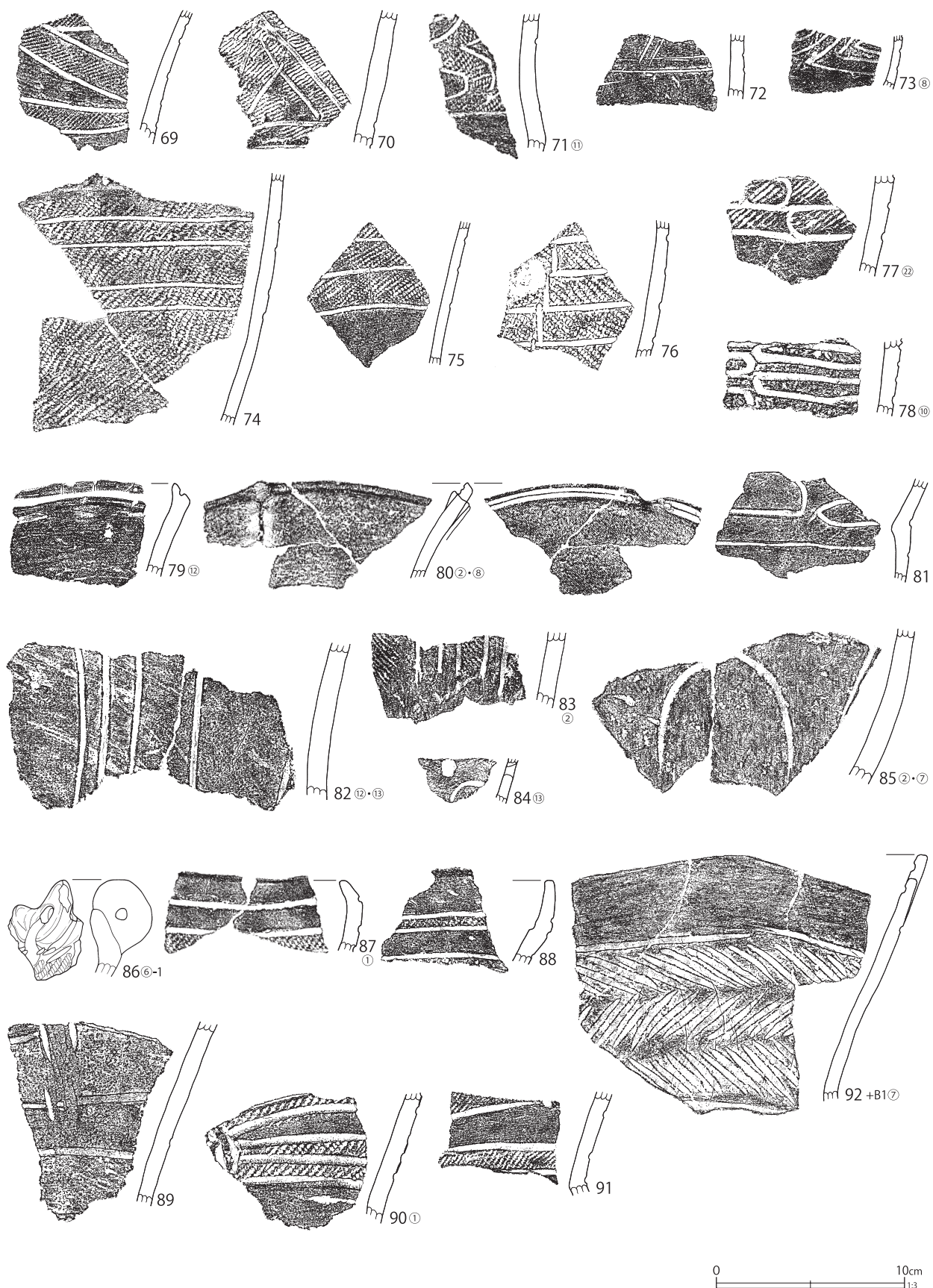
やや大きな鉢になるものと思われる。以上は第Ⅷ群土器である。135～140は第Ⅶ群土器の鉢の胴部破片で、139、140には漆が塗られている。141は鉢の底部破片で、内外面に漆が塗られる。深鉢とした9の底部の可能性もある。142は縄文施文の、143～145は無文の鉢の口縁部破片で、146、147は底部破片である。

30、31は片口状の鉢で、時期不詳である。31は片口の先端が尖ることから、舟形容器とも考えられる。

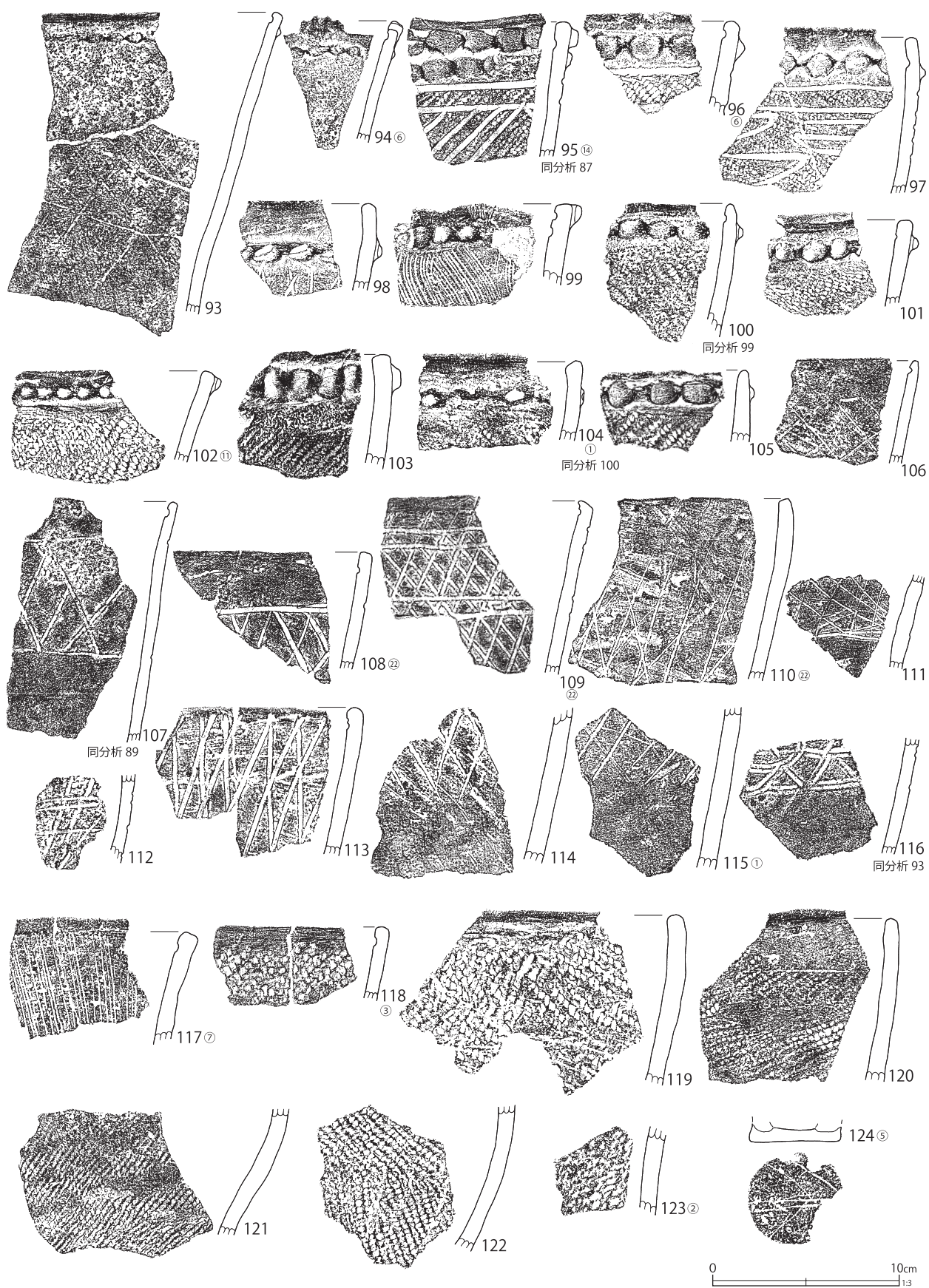
25は口縁が直線的に開く第Ⅵ群の浅鉢で、幅狭の内文を持っている。内外面に漆が塗られている。



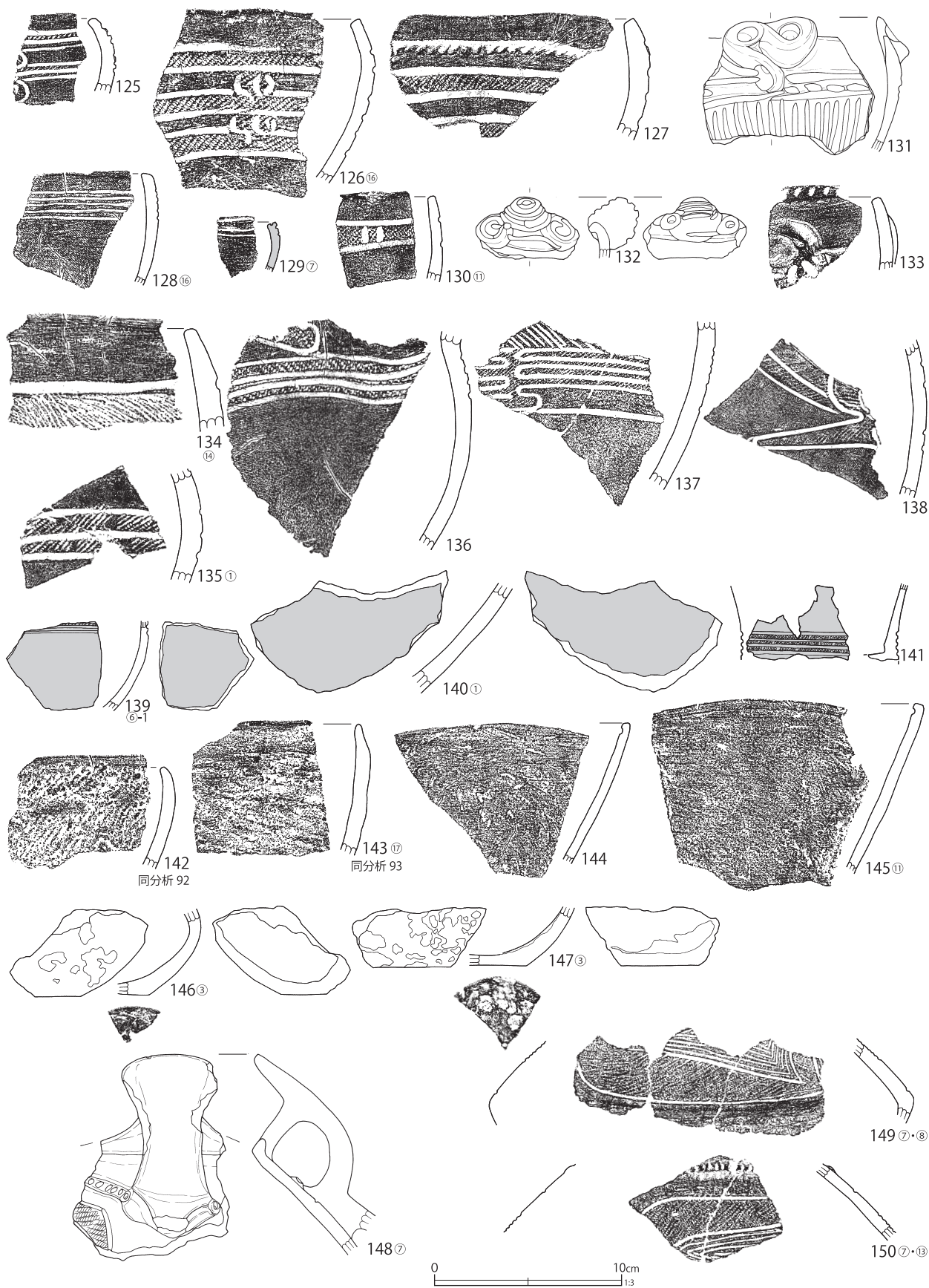
第 60 图 J 3 区出土土器 (5)



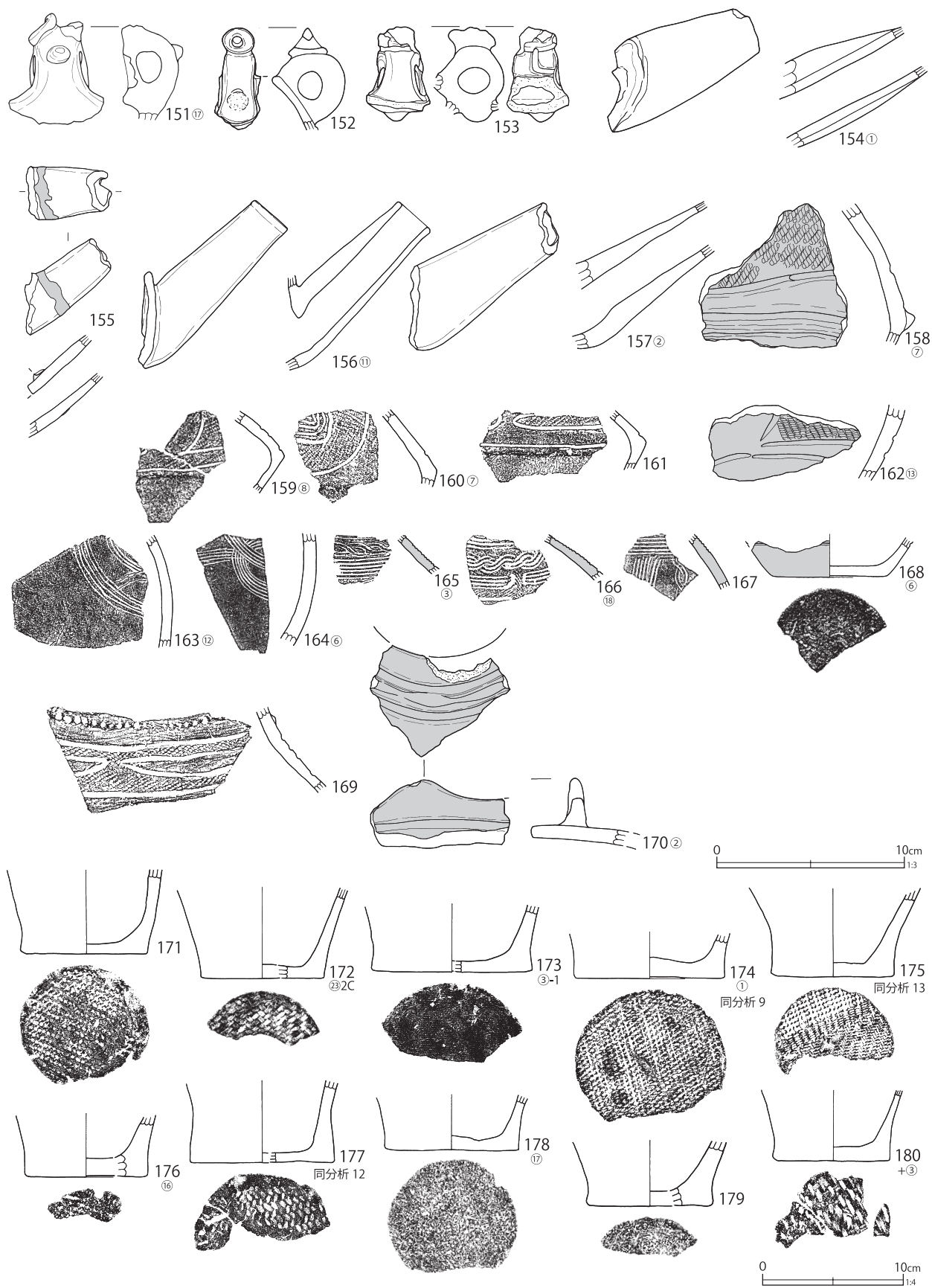
第61图 J3区出土土器(6)



第62图 J3区出土土器(7)



第 63 图 J 3 区出土土器 (8)



第 64 图 J 3 区出土土器 (9)